今日のソ連邦

1979
1
1.1



特集 国際児童年に寄せて

バム鉄道を行く

パミールの氷河観測

今日のソ連邦

第1号　1979年1月1日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）
半年分送料……1200円
1年分送料……2100円
同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ

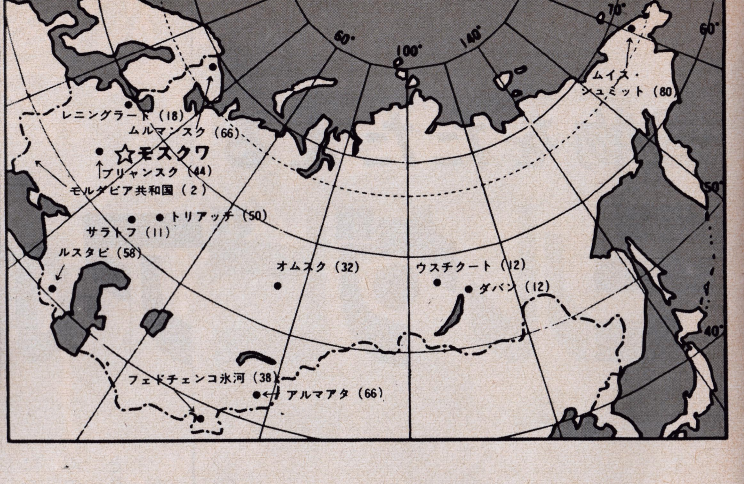


表　紙　新年のヨールカ祭で（カメラ　トゥートフ）

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2－1－1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3－9－13
郵便番号141　電話(03)447－3536(代表)
振替口座東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）



新年のごあいさつ

新年を前にして、その一年の成果をまとめ、次の年の構想を練るというよいしきたりがあります。

第10次5ヵ年計画第3年度（一九七八年）の課題はほぼ着実に達成されたというあらゆる根拠をもっています。昨年11月のソ連共産党中央委員会総会でレオニード・イリイチ・ブレジネフが指摘したように、「国がこれほど強力な経済力、これほど発達した工業、科学技術をもったことは一度もありませんでした」。昨年の1月－9月の工業生産高は一九七七年の同期比4・8％増で、農村の勤労者は一九七八年の困難な収穫のたたかいをみごと勝ち抜き、二億三五〇〇万tの穀物を収穫しました。

勤労者の生活水準をいっそう向上させる党の路線は、ひき続き一貫して実施され、昨年中頃には労働者、職員の月平均賃金は3・4％、コルホーズ員の月平均の労働報酬は5％アップしました。住宅、学校、幼稚園、保育所の建設はあいかわらず急ピッチで進められています。よく御存じのとおり、ソ連では教育と医療は無料です。就学前児童施設の子どもの保育料も国が80％を負担しています。勤労者にたいする年金保障支出は増えており、とくについ最近、大祖国戦争による身体障害者と労働災害による身体障害者にたいする追加の特典と年金の増額にかんする決定が採択されました。

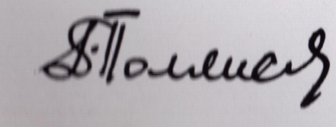
本年度の具体的課題は、さきの11月の党中央委員会総会ではっきり明文化されました。ソ連国民は多大の努力を払わなければなりませんが、ソ連の勤労者が計画目標を着実に達成することは、まったく疑いありません。

一九七八年にソ連共産党とソビエト政府は、軍拡競争の停止、貯蔵核兵器の削減、兵力の縮小や新戦争の脅威の除去をめざす、世界平和強化の分野の新しい重要な数々のイニシアチブを発揮しました。ソ連はこれらの平和提案をさまざまのレベルで提出し、その提案は平和擁護者にも、戦争擁護者にもよく知られています。

ソ連は日本をはじめ他の諸国との関係で、対外政策のレーニン主義的諸原則を変わることなく指針にしています。昨年ソ連は、ソ日関係が平和、友好、真の善隣、互恵の協力の道にそって発展するよう努めました。ソ日両国民の間には未解決の問題はなく、平和に親しく仲よく暮らすのが一番の賢明な道です。

この機会を利用して、『今日のソ連邦』誌の読者のみなさん、日本のすべてのソ連の友人のみなさんに、新年——一九七九年のお祝いを申し上げますとともに、みなさんのご幸福とお仕事のご成功を希望いたします。

駐日ソ連大使
D・ポリャンスキー



穀物をたたえる

モルダビアの新年祭

カメラ　M・パテルニク



年が明けて数日間、モルダビアの道路を走るドライバーは、自動車交通監視員に止められてこう言われる。「この先でお祭りをやっているんで、運転に注意して下さいよ」。たいして急ぐ用事がなければ、ドライバーはスピードを落とす。なかにはこのたのしいお祭りに加わって、家に招かれ、手づくりのワインをごちそうになり、そのうえ美しい娘さんの歌うしあわせの歌にうっとり時を忘れる御仁もいる。

モルダビアはソ連を構成す



馬がオートバイに代わっても、祭日の民族色は変わらない。

◀揚げ菓子を割り砕けば、よい隣人と長い平和にめぐまれる。

モルダビアの新年祭



出し物に欠かせないのがユーモア。見物の人々は十分にユーモアを解する。



お祭りにはモルダビア科学アカデミーの民俗学・芸術学部の学者もよく顔を見せ、記録をとる。



モルダビアの新年の行事に欠かせないのが、こうしたつくり物の馬や羊、山羊、クマ、キツネなど。これらを操るには、かなりの腕がいる。

◀開け、門！　お祭りの主人公たちのお通りだ。







60歳のミハイ・チボタリさんはハーモニカで民謡を演奏するのが得意だ。

◀祭りに参加した者は村中を練り歩く。だから祭りが終わると、声はつぶれ、足が棒になる。



お祭りの晴れ着は大事に扱われ、孫子につたえられる。

る共和国の一つで、ソ連の西南部にあり（面積約三万四〇〇〇平方km、人口約四〇〇万人）、ブドウ、トウモロコシ、穀物の産地として有名だ。モルダビアの民俗行事の歴史は長く、数世紀に及ぶ。民俗行事のジャンルのなかで最もゆたかなのは新年のお祭りで、その準備は長く、入念だ。晴れ着を縫い、伝統的な民族舞踊を練習し、詩や歌を覚える。「プルグショール」はパンをたたえるお祭りで、おそらくモルダビアの人々の新年の行事のうちで最もポピュラーなものの一つだ。この行事の主人公は、新年に雪の中に最初の畑の溝をつくり、豊作を土地に願う若い農民である。昔は木のスキを模した小型の〟スキ〟で溝をつくったものだが、いまは新しいトラクタでトラクタの運転手が畑の溝をつくる。伝統的な民族衣装をつけた若い人々のグループが、村の家々の窓の下で民謡を歌ったり、詩を朗読しながら、村を練り歩く。こうした詩は農民の労働をたたえ、穀物のありがたさをうたったものだ……

……モルダビアの農村をたのしい、花やかな新年のお祭りが通る。そのお祭りは家々に立ち寄り、どの家にも新しい年の成功を約束し、また最も肝心な祝福——平和としあわせの祝福を人々に惜しみなく分かつ。

L・ブレジネフの新著『処女地』

作家　ミハイル・アレクセーエフ



処女地開拓者たちとレオニード・ブレジネフ（一九五四年）

歴史の最も決定的な場面で、祖国の偉大な運命にめぐり合わせた人の運命は、すばらしく、教訓的なものだといえよう。社会主義工業が創設された初期の5ヵ年計画、ソビエト政権の存亡をかけた対ファシズム戦争、むごたらしい戦争の傷跡の復興と再建、処女地開拓の偉業——これらはすべて、あいつぐたたかいの転換点となった、歴史の決定的な場面である。

これらのどのたたかいにも、直接積極的に参加したのが、『処女地』の著者L・I・ブレジネフである。彼はたんなる参加者ではなく、共産主義者としての義務により、多数の人々を指導しなければならなかったし、また実際に指導した人である。

さきの『マーラヤ・ゼムリャー』、『復興』に次いで、こんどは『処女地』という回想録が出た。処女地！　この言葉はソビエト人にとって、そもそもの元の意味をとっくにはみ出している。処女地という言葉について著者が述べているくだりを聞いて見よう。

「古い辞書だと〝ツェリナー〟（処女地）という単語は見付かるが、〝ツェリンニク〟（処女地開拓者）という単語は見付からない。この言葉が現れたのは一九五〇年代で、集団化の時代に〝コルホーズ員〟という言葉が現れたのとまったく同じである。五〇年代には〝ツェリナー〟という概念から純農耕的な意味はなくなり、社会的用語となった。この言葉の裏には国民としての高い自覚と熱烈なソビエト愛国心が加わったからだ。〝ツェリンニク〟とはこの英雄的時代の歴史的人間像である」。さらにL・I・ブレジネフはこの考えをもっと正確なものにするために、「人々は土地で穀物を育てた——土地は人々を育てた」とつけ加えている。

歴史の示すとおり、〝人はパンのみによって生くるものにあらず〟とはいえ、昔からロシアではやはりパンが人間のしあわせの尺度となってきた。実のところ、家庭でも、国家でも食卓にパンがあれば、ほかのものは結構何とかなってきた。だからわが党は、以前と同じく、穀物の増産を農業の主要課題の一つと見ている。

だがわれわれ一国の利益だけを考えてはならない。この地球上には何億という人々が文字通り飢えるか、あるいは食うや食わずの状態にある。そして穀物不足という事態がひんぱんに起こっている。

われわれの敵は、社会主義体制という〝接ぎ木〟はどうやら工業にはついたようだが、農業の分野では駄目だと言い、これを宣伝の〝切り札〟に使って

いる。われわれはこの〝切り札〟を敵から奪う必要もあった。

ただそれだけではない。処女地は、われわれの思想上の敵からさきの〝切り札〟の〝論拠〟を奪い取らねばならなかったし、事実奪い取った。ソ連共産党中央委員会から東部地域の処女地開拓というとてつもなく困難な課題を与えられたL・I・ブレジネフが、最初の開拓者の一人に次のように語った言葉は、まさにそのことを問題にしていたものだといえる。

「（敵側の）論拠はいわば農学的、技術的なもので、問題の政治面については全然触れていない。だが実際は、ほかならぬ今こそ処女地に穀物をまく可能性だけでなく、必要性をも、考慮に入れなければならないのである。これは経済的必要性であるだけでなく、政治の問題でもある。われわれ共産主義者が、短期間に最大の課題を解決できる力をもっていることを、全世界にもう一度見せてやろう」

こうして何百万haという土地の開拓と穀物生産のたたかいが始まった。まさにそれはたたかいだったのである。

そのたたかいは犠牲者を出さずにはすまなかった。初期の開拓者の二人——トラクター運転手のダニール・ネステレンコ（彼は一九四三年秋のドニエプル川渡河作戦のときの功によりソ連英雄の称号を受けており、カザフの草原のジャヌイスパイカ川を渡河中に死んだ）とリボフ建設大学の学生ワシリー・ラグゾフ（冬の猛吹雪の中をトラック隊の進路を探しに出て凍死）の死を語ったこの本のくだりを読むと、感動と胸の痛みがこみ上げてくる。

処女地はたとえていえば、ひじょうに厳格な、きびし過ぎるほどの教師であったが、たぶんにもの分かりもよかったようだ。処女地はいくじなしを受け入れなかった。猛烈な風が吹き荒れる広大な草原では、人々のそれまで外に現れなかった心の中が、たちどころにさらけ出た。真の闘士は闘士の心をもち、いくじなしは心の傷をもっている。さいわい、いくじなしは闘士の数に比べると、問題にならないほど少なかった。この本は、処女地開拓の叙事詩の真の闘士たちをもえがいている。

処女地は初めその構想の壮大さで、若干の人々、誠実な人々さえも驚かした。構想そのものにも、またその構想の実現にも猛烈に反対した直接の敵を驚かしたことはいうまでもない。この抵抗をうち砕く必要があったし、疑念を抱いている人には疑念を消し、処女地を信ずるよう、手助けをする必要があった。勝利、勝利だけが必要だった。「成功すれば、ソ連の穀物需給バランスは、根本的に——私は革命的にといいたい——変わる可能性があった」とこの本は書いている。

そしてはやくも一九五六年に処女地の穀物収穫高は一〇億プード（1プードは約16・4kg）にのぼった。

穀物！　わが処女地開拓者がそれを得るのは、なみ大抵のことではなかった！　初年度は勝利を収めたものの、第2年度はまた懐疑論者に、頭をもたげる機会を与えたようだ。その年は、この地方でさえはじめてという記録的なかんばつに見舞われ、カザフのステップばかりでなく、勇敢な開拓者の心までも焼いた。

そこで開拓者たちは賢明な科学に援助を求めた。「はてしないステップへまず最初に動き出した者は、学者、水工技師、植物学者、耕地整理技師、農業技師であった。彼らのことを誰よりもまずよい言葉で思い出しておきたい」とL・I・ブレジネフは書いている。

L・I・ブレジネフは処女地開拓の叙事詩に参加した多くの人々をたたえている。それは州、地区委員会の書記たちであり、普通の党員であり、ソフホーズ長であり、労働者である。そしてこの著書自体は、カザフ共和国のかつての気むずかしく黙りこくった、果てしないステップの開拓に参加したすべての人々の記念碑というべきであろう。

L・I・ブレジネフのさきの2冊の回想録とともに、『処女地』はカザフの処女地開拓の英雄的過去をまざまざ脳裏によみがえらせるだけでなく、ソビエト人の変わりゆくすべての世代の生活のよい教科書ともなる、われわれの貴重かつ重要な3部作となるものである。

L・I・ブレジネフは『処女地』の中で、いまソ連では日々のパンにたいする配慮が、一般農耕者と農業技師、育種学者、化学者、農場のトラクタ運転手と工場の技師との間で、簡単に言うと都市と農村の間で、均等に分けられていることを明らかにした。自然の移り変わりにたいする農耕者のなんとも慰めようのない孤独感は終わりをつげたか、少なくとも終わろうとしている。いま農民にとって〝土地〟という概念は、働く人が完全な主人となっているわが社会主義ソ連の国土全体をさすまでに広がっているのである。

国際選抜体操競技大会を振り返って

I・ユリエフ



勢ぞろいしたソ連選手団

一九七八年11月下旬から12月初めにかけて名古屋と東京で国際選抜体操競技大会が開催された（中日新聞社などが主催）。ソ連、日本、米国、カナダ、イギリス、ドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国、中国、ブルガリアなど11カ国から男女の選手が参加して技を競い、国際試合の経験を積んだ。

ソ連選手団はセルゲイ・ヒジニャコフ（20歳、ロストフ・ナ・ドヌー市）、ゲンナジー・クルイシン（21歳、モスクワ市）、マルハス・タタラーゼ（19歳、トビリシ市）、レーナ・ダビドワ（17歳、レニングラード市）、レーナ・ナイムシナ（14歳、クラスノヤルスク市）、ナターシャ・カラムシコ（12歳、ハリコフ市）の6人。

この試合の印象をワレンチン・シェフチュク、バルゲス・アラケリャン両コーチとナイムシナ選手にインタビューした。

レーナ・ナイムシナのコーチで今回のソ連女子チームのコーチを兼ねるワレンチン・シェフチュクは次のように語った。

「今回の参加チームのメンバーは、世界選手権やワールドカップ大会に参加したソ連の一線級の選手以外から主として選ばれた。しかし、いずれも一九八〇年モスクワ・オリンピックの候補選手になれる実力を持った選手たちなので、日本での競技はいい経験になったと思う。レーナ・ナイムシナとナターシャ・カラムシコは国際試合の経験がないのに、よくやった。女子チームのコーチとしてほめておきたい。種目別競技の行われた東京の試合だけに限って言えば、ナイムシナが平均台で1位、カラムシコはゆか運動で高得点を出して2位になった。跳馬ではダビドワが1位、ナイムシナが2位、段違い平行棒ではダビドワが米国選手と1位を分け合った。個人的に言えば、私が指導しているナイムシナの成功をいちばん喜んでいる。私たちは二人ともシベリアのクラスノヤルスク市から来た」

「私は6歳の時から体操をやっています」と小がらな、まだあどけなさの残るレーナ・ナイムシナは語る。「健康のためにと、母に連れられて体操の練習場に行きました。コーチの話では、幸い、私は敏しょうさと平衡感覚に恵まれていることが分かりました（「それに非常に規律正しく、勤勉でもある」とシェフチュク・コーチがそばから付け加える）。私が本格的な試合にいつ出場しはじめたかと言うと、一九七六年のソ連ジュニア選手権が最初です。その時、私は11歳半で、1位になりました。一九七七年には跳馬と平均台で金メダルを取りました。私の一番大きな望みは、もちろんオリンピック代表選手になって、モスクワ五輪に出場することです」

男子チームのコーチ、バルゲス・アラケリャンは次のように語った。

「セルゲイ・ヒジニャコフは非常に自信を持って東京の試合にのぞんだ。彼はゆか運動で日本の山脇選手と1位を分け合い、鉄棒で優勝した。そしてつり輪と平行棒で2位になった。ゲンナジー・クルイシンは、残念ながら名古屋などでの試合の疲れが出てしまった。今回の日本の試合では実力を発揮していない。もう一人のソ連選手マルハス・タタラーゼについて言えば、国際試合の経験が十分ではないが、それでも東京のあん馬種目で2位になった。

現在の体操の特徴について言えば、まず、どの種目の演技も難度の高い複雑なものになったこと、それと選手の著しい〝若返り〟だと思う。最近の国際試合に出てくる選手たち、とくに女子選手の年齢は非常に低くなっている。このことは、未来のナショナル・チーム候補選手の養成という面からコーチ陣に余分の負担と、そして責任を負わせている。将来有望な選手を12歳までに国際試合の水準に到達させるためには、6―7歳でその子の素質を見きわめる必要が出てくる。これは何よりもまずソ連の体操界について言えることだ。

エドゥアルド・アザリャンのコーチとしての私の第一の希望は、アザリャンが一九七九年度の世界選手権と第22回夏季オリンピックで個人優勝することだ。もちろん、ソ連チームの団体優勝をどうしても果たしたい」

チェルヌイシェフスキーの生涯と偉業

昨年はロシアのすぐれた思想家で作家でもあったニコライ・チェルヌイシェフスキーの生誕一五〇周年にあたりましたが、東京都の荻村しをりさんから、チェルヌイシェフスキーの生涯や人民のための活動、同時代人に与えた影響などを紹介してほしいというお手紙をいただきました。

ロシア社会民主主義の先駆者

ニコライ・ガブリーロビチ・チェルヌイシェフスキーは一八二八年7月24日（旧暦では7月12日）、ボルガ中流のサラトフ市で聖職者の家庭に生まれました。子どものころから、旺盛な知識欲と周囲の人々や現実にたいする鋭い関心は並々ならぬものでした。彼は早くから、世界は不公平だということ、生活は本来〝すばらしいもの、よいもの〟であるはずだ、ということを理解していました。だから彼は、生活の本来の姿を妨げているすべてを憎みました。

一八四六年に彼はペテルブルグ（現在のレニングラード）へ行き、ペテルブルグ大学の史学・哲学科に入りました。学生時代の彼の生活には、外面的にはほとんど大きな出来事はありませんでした。ひたすら勉強し、文字通り知識のあらゆる分野の本を読みました。しかし内面的には、この時期ははち切れるほど緊張していました。彼は全身これ注意と集中の塊と言ってよく、人類はどんな生活をしているか、祖国の運命は、将来何が祖国と人民を待ちうけているのか等々、あらゆることを知ろうと努めました。

大学教師をめざして

チェルヌイシェフスキーは大学を卒業して、一八五一年に文学の教師として赴任したサラトフ中等学校で、すでに自由思想の種をまき始めています。

チェルヌイシェフスキーはペテルブルグへ行って、大学の教師として、ロシアの若い世代に、未来の祖国のために、祖国を公平に建て直すために、大いに自己を完成するよう呼びかけたいと考えました。

大学の教師になるためには、まず学位を取らなければなりません。チェルヌイシェフスキーは学位論文のために、政治とは縁遠いと思われるテーマ『現実にたいする芸術の美学的関係』を選びました。しかし、サラトフの中等学校の教師の自由思想と、その見解の急進性についての噂は、すでに首都ペテルブルグにも達していました。学位論文の審査員や読者は、その革命的な思想を見すごしませんでした。チェルヌイシェフスキーの美学論のパトスは、芸術作品によって専制・農奴主義的現実を批判することにあったからです。

やがてチェルヌイシェフスキーは雑誌『同時代人』（ソブレメンニク）の常時協力者となり、その後、同誌の批評部門を主宰するようになって、学生だけでなく、ロシアのすべての知識人に呼びかける大きな可能性を手に入れました。

以来、農民革命を直接準備することが、チェルヌイシェフスキーにとって第一義的に重要な仕事となりました。彼は檄『同情者から地主の農民たちへの挨拶』を書き、その中で蜂起準備のプログラムを述べています。

獄中で書かれた『何をなすべきか？』

しかし、以前から警戒してチェルヌイシェフスキーの活動を監視していたツァーの政府は、一八六二年7月8日の夜、彼を逮捕して、ペトロパブロフスク要塞監獄に閉じ込めました。暗い独房で約2年――六七八日すごしましたが、農民革命についての思想を捨てることはありませんでした。長編小説『何をなすべきか？』もこの要塞監獄で書かれましたが、それは革命的行動への呼びかけでした。「未来は明るくてすばらしい。それを愛し、それを求め、そのために働き、それを近づけ、それをできるだけ現在に移し換えよ」というこの小説で2度くり返される読者への呼びかけの言葉は、全ロシアのみならず全世界に響きわたりました。

もちろんこの小説は、ツァー政府によってたちまち発禁になり、チェルヌイシェフスキーはシベリア送りになりました。

チェルヌイシェフスキーはシベリアで懲役労働と流刑の12年をすごし、それから約6年をボルガ下流の暑いアストラハンですごし、一八八九年の夏ようやくサラトフに住むことを許可されましたが、すでに健康はひどく損われていました。故郷へ帰って間もなく、同じ年の10月17日（新暦では29日）、チェルヌイシェフスキーは死にました。

＊　＊　＊

レーニンはチェルヌイシェフスキーを高く評価して、「チェルヌイシェフスキーのおかげで、私は初めて哲学的唯物論を知った」と書いています。また『何をなすべきか？』も高く評価して、「この本の影響で大勢の人々が革命家になった」と述べています。

レーニンは党の指導や党生活、変節者や自由主義者や口先だけの革命家との闘争など、原則的に重要な問題に触れるとき、真の革命性と偽りの革命性の問題が鋭く提起されたとき、しばしばチェルヌイシェフスキーに立ちもどっています。チェルヌイシェフスキーはレーニンにとって、真の革命性のシンボルだったのです。

バム鉄道を行く

ゲオルギー・ボグダノフスキー
カメラ　P・マリノフスキー

まる一〇〇年も運転開始が待ち望まれていた特急列車に、いま私は乗っている……

一九七八年10月28日、三〇〇人の名誉乗客（バイカル・アムール鉄道の優秀建設工）を乗せた開通の一番列車は、ウスチクート市付近のレナ駅を出発し、西工区の雪の原生林の間を縫って、バイカル湖北方のダバン分岐駅まで二九二kmをひた走りに走る。

さてなぜ冒頭に一〇〇年という数字を出したかを説明しよう。

一八七八年にロシアの鉄道網はウラルまで伸び、それから先はシベリアを通って太平洋へ進出するのが当然と見られていた。初め将来の予定線のプランの大半は、17世紀にシベリアを探険した最初のロシア人たちの経路をたどるかのように、北部地区を指向していたが、しだいに比較的人口が多く、気候がかなりおだやかな（現地の尺度から見て）地域を通る〝南部案〟が優勢になり、その案が採用されて現在のシベリア横断鉄道が建設された。

しかしその後も太平洋に出る第2シベリア横断鉄道の最適案の探求は続いた。だがその案が見付かったとき、客観的事情、まずファシスト・ドイツの対ソ攻撃のため、バム鉄道の着工は沙汰やみになった。シベリア本線の北約五〇〇kmに本線と平行するバム鉄道を敷設する工事が、いくつかの工区で同時に始まったのは、一九七四年の4月であった。

それから4年半余りの間に、建設隊は通行不能な原生林と永久凍土帯にい

ルポルタージュ



バム鉄道は予定よりもはるかに早くイルクーツク州の州境を横切り、ブリャート自治共和国のダバン分岐駅に達した。写真はその1番列車を迎えて開かれた鉄道工事関係者の集会。



敷設したばかりのレールの上を列車が走る。

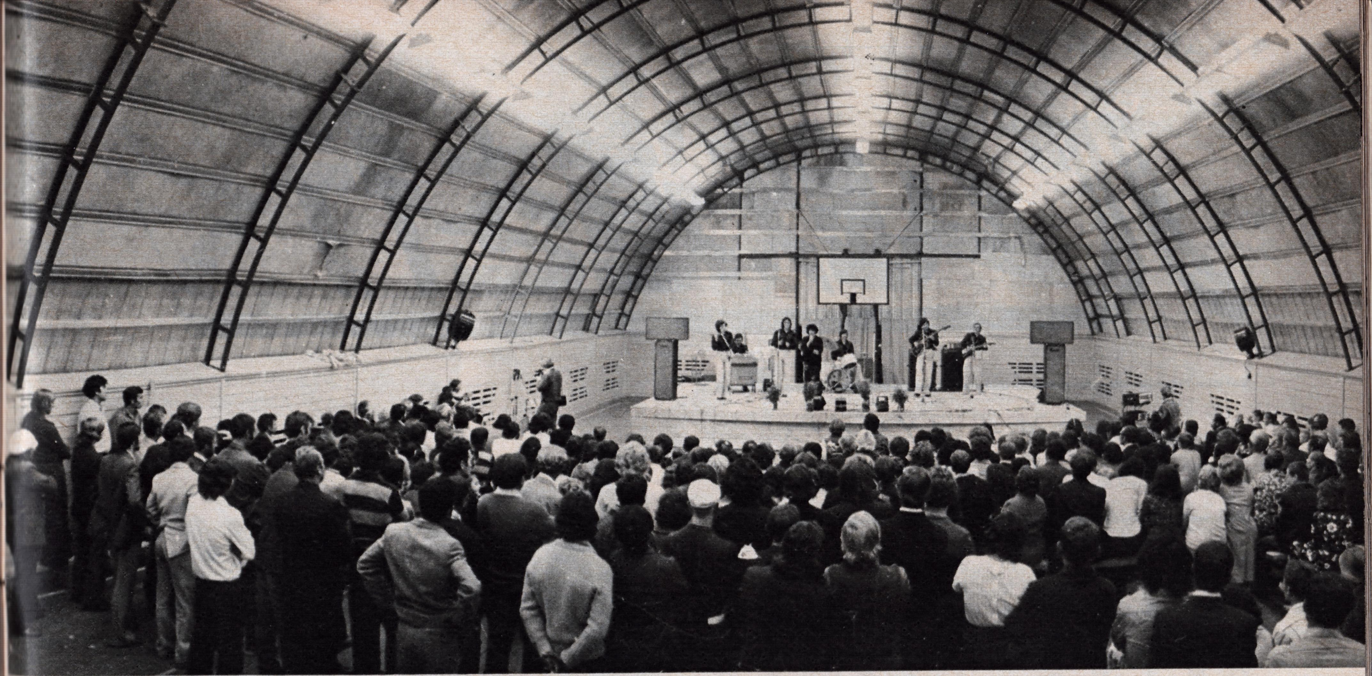
どみ、夏はか（蚊）やブヨ、冬はマイナス60度Cの酷寒に悩まされながら、森林の中に空き地をひらき、深い森林の中の激流に橋を架けてきた。こうしていままでに三〇〇〇万立方m余りの土が処理され、99の橋が架けられ、一五〇〇kmの鉄道が敷かれた。

バイカル湖に出るバイカル山系越えの鉄道工事の最終段階は、とくに難工事であった。私は現場でその工事を見たが、移された何千立方mという土砂の半分は、岩石であった。線路約1kmごとに橋が架けられ、工事は2交代、ときには3交代、つまり昼夜兼行の突貫工事であった。

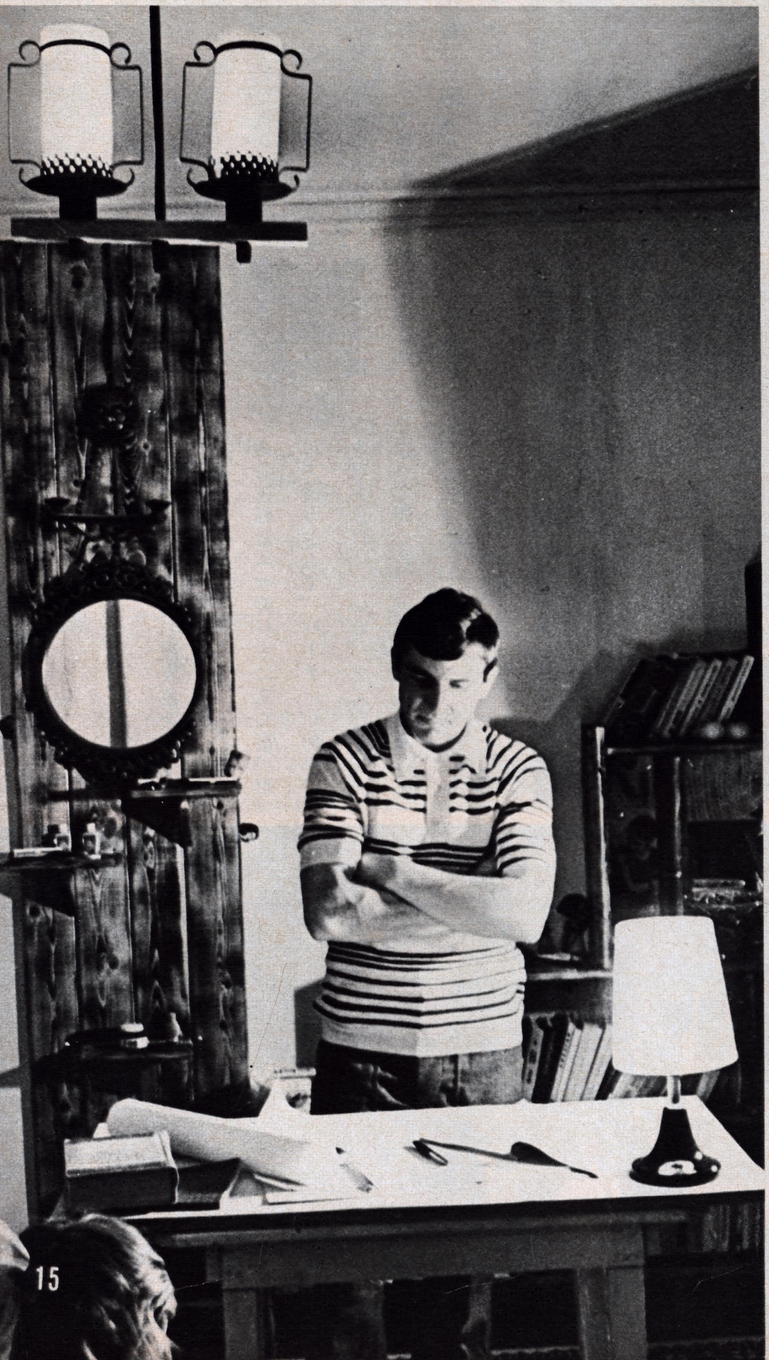
現在バム鉄道の工事現場で働いている人員は一二万人。かつての深い原生林の中に何十という設備の整った小さなまちがつくられた。バイカル湖に通じる鉄道の開通が、過去4年半余りのバム鉄道の建設工事を飾るビッグ・エベントであることは疑いない。

……私の乗った列車の切符は発売されなかった。

「この列車の切符は、りっぱな労働成果をあげたものに渡されたんです」と



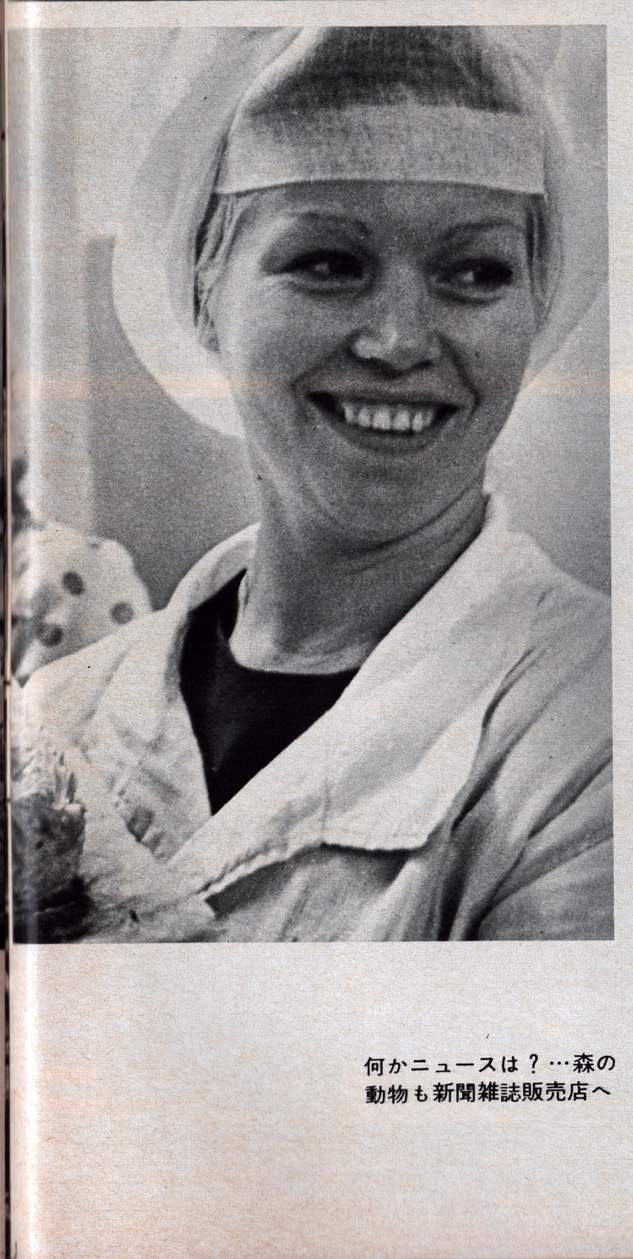
きょうは町のコンサート▶



自宅の大工班長……



工事場で知り合い、結ばれる人も多い。ウェディングケーキがよく出ますと店員さんはにっこり。





クネルマ駅で……



何かニュースは？…森の動物も新聞雑誌販売店へ



レールの敷設はきょうも続く……

私の隣席のマギストラリヌイ町の線路敷設工は胸を張った。「4年間バム鉄道西工区の二万人の全建設関係者は、この切符をもらおうと奮闘してきました。こうして三二〇kmの線路の敷設が終わり、とくに成績のよかった者に切符がおごそかに渡されました」

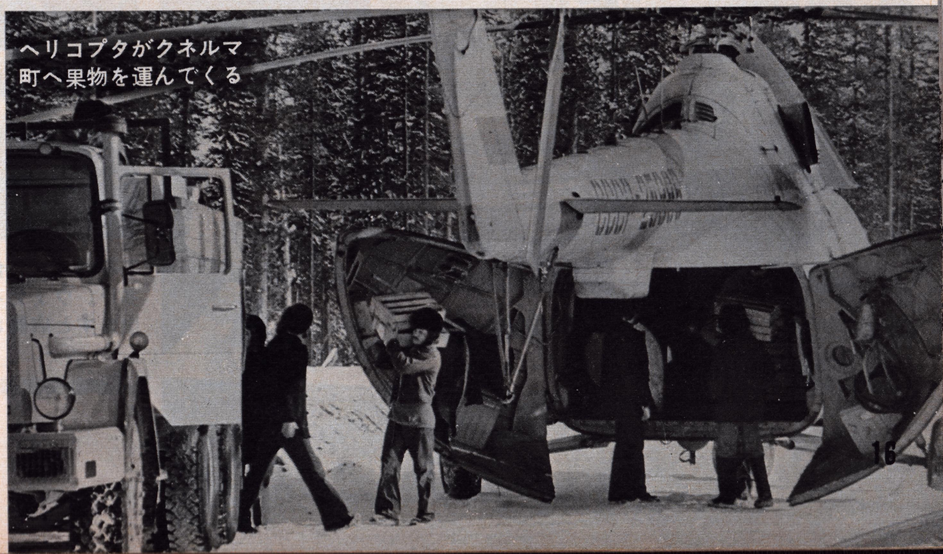
数年もたてば、バム鉄道旅行は一種のソビエト共和国めぐりの旅というべきものになろう。

たとえば、グルジア（カフカズの共和国）から来た建設者たちが建てているニヤ町の街路を歩くと、まるでカフカズのどこかにいるような気持ちになる。屋根の尖端のとがったグルジア風の住宅や公共建物は、外装はレンガ、内装は大部分が伝統的な木彫りや金属の浮き彫りである。

ニヤの隣ではアルメニア人とウクライナ人が、それぞれの民族色を出した町を建設している。

ある夜私はニヤのバーに立ち寄った。客はあまりおらず、バーテンが何かの本を読みふけっていた。どんな小説かと思って聞くと、大学用の『冷凍設備便覧』だった。これでバムの青年たちがパイオニア精神にあこがれ、スポーツ、ダンスに興じる一方、自分の知識を広め、実務の技能資格を高めることを重視していることがわかり、意を強くした。建設場の職業教育施設としては、各種講習会、夜間学校、通信教育の中等専門学校や大学などがある。

……私の乗った列車の1車両は、バム鉄道西工区の工業コンプレクスの設計企画を近く完了する学者たちが占領していた。アガンベギャン、トロフィムークの両アカデミー会員は、建設者たちよりも、よくこの地区を知っていて、大事なところでそのつどはっきりした方針を出している。彼らは、ごく近い将来バム鉄道の経済開発地域には約二〇〇万人の労働者、数万人の技師が必要になると語った。



ヘリコプタがクネルマ町へ果物を運んでくる



バム鉄道の西工区が常時開通するのは一九八〇年だが、すでに運転は始まっており、われわれの列車の次に、敷かれたばかりのレールを、逆にイルクーツク州の北部地区から西へ木材を積んだ最初の列車が出発した。

バム鉄道の東工区の建設工事は予定より早く進んでいる。ネリュングリ炭田までのバム鉄道支線の建設は予定より早く終わり、ヤクート炭を積んだ初の列車もすでに新線を走った。

……私の旅は終わりに近付いた。アナウンスが伝える——「まもなく終着駅です。バム鉄道の正式の工期より1年早く到着です」

レニングラードの日本語教室

エレーナ・ドロシンスカヤ

ソ連での日本語の人気は高まる一方で、社会人向けの日本語スクールはどこもなかなかの盛況だ。その一つ、レニングラード市のカール・マルクス記念鉄道員文化会館で開かれている日本語教室をのぞいて見た。

ワルシャワ駅（レニングラードのワルシャワ方面行きの列車が出る駅）のほど近くにあるこの文化会館に、日本語教室が開設されたのは3年前。レニングラードの鉄道員だけでなく希望者は誰でも受講できる。ちなみにこの会館では、いろいろなサークル活動（コーラス、チェス、洋裁、ジャズ、民族楽器、外国語）が行われているほか、コンサートや講演会が催されている。日本語教室の授業は週四時間で2年制。宿題も出る。

記者はまず1年生の入門コースの授業を見た。9月に新学年が始まったばかりなので、カナの読み書きと簡単な文法の紹介が行われていた。2年生の中級コースでは、受講者が二人一組になり、一人が旅行者となって、もう一人がレニングラードの名所について日本語で説明していた。

教えるのはウラジオストクの極東大学を卒業したセルゲイ・マツセビチ。2年間でどこまでマスターできるのか、という私の質問にたいして「受講者の努力しだいでかなり違うが、日常会話と最小限の漢字、簡単なテキストが読めて翻訳できる程度だ。なかには中級コースのミハイル・ウスペンスキー（エルミタージュ美術館のガイド）のように、日本の芸術や宗教史の文献をロシア語に翻訳できるほどに上達した優秀な人もいる……」ということだった。

受講者は現在70名。日本語の学習を始めるにいたった動機について、受講者たちは次のように語った。

タチヤナ・コンスタンチノブナ（テクノエコノミスト）



日本の版画を見る日本語教室の受講者たち

「レニングラード市の市営事業自動管理システム関係の仕事をしている。日本はこの分野で大きな実績をあげているので、はやく日本語を読めるようになって、文献を翻訳したい」

ニコライ・クルトチェンコ（水文学者）

「エレクトロニクスを水文学に応用する問題にかんする学位請求論文を書いている。2年後に東京でシミュレーションについてのシンポジウムがあるので、それまでに日本語をある程度マスターしておきたい」

アナトリー・アンドレーエフ（電子技師）

「囲碁にこっている。日本語の囲碁の本を読みたい。だから日本語をやることにした」

ラリサ・ロガチェワ（図書館司書）

「ソ連科学アカデミー図書館につとめているが、日本の学術機関との図書交換によって日本語の文献がどんどんふえている。また日本の研究者が来館し閲覧することも多い。いま日本語を勉強しておけばいつか役立つと思う」

イリナ・アレントワ（幼稚園保母）

「子どものころから好きだった国をよく知るために、日本語を学んでいる。日本の歴史や伝説、文化などすべてが興味深い。本屋で日本関係の本を見つけると、すぐ買っている。日本語のものが読めるようになる日が待ち遠しい」

ウラジーミル・コロソフ（工学博士候補）

「語学が趣味で、いままでフランス語、イタリア語などロマン系の言語を学んできたが、東洋のことばも始めたくなった。日本語を最初に選んだのは、日本の伝統あるすぐれた文化、独特の生活様式、すばらしい芸術にひかれたからだ。ロシア人にとって日本語、とくに漢字はむずかしいが、われわれのグループはとても熱心に勉強している」

特集　国際児童年に寄せて

子どもは人類の永遠の関心事

イベッタ・クニャゼワ

「国連総会は……あらゆる努力にもかかわらず、とくに発展途上国において多くの児童が栄養失調の状態にあり、適切な保健サービスが受けられず、将来にたいする基礎的な教育上の準備を行うことができず、かつ基本的な快適な生活を奪われていることを深く懸念し……、一九七九年を国際児童年と宣言する……」

——第31回国連総会の決議から

われわれの子どもたち。

これ以上密接な問題はないし、これ以上グローバルな問題はない。なぜならあなた、私、彼、彼女、大統領と貧しい農民、偉大な学者と普通のコンベヤ作業員、つまり地球上の一人残らずすべての人々が子か親か、そのうちの一つのポスト（両方の場合も多いが）を必ず占めているからである。

これは永遠のものである。人はどのような生活を送っていても、その心の奥にはあれほど暖かく、頼もしかった母の手の思い出をつねに秘めている。どれほどの喜びや不幸が親としての身にふりかかろうとも、われわれのだれもが心に自分の子どもの歴史を抱いている。自然によってわれわれに贈られ、人類の経験すべてによって崇高なものに高められた強力な本能——われわれは子どもたちにおいて自己を主張し、継続し、向上させている。彼らはわれわれの生命の延長であり、期待であり、世界の明日である。

子どもは社会を映す鏡

ちなみに、社会発展の歴史を研究する資料となるのは、大戦争の記録や偉大な司令官の功績だけではない。子どもにたいする国家の態度もそれぞれの国の歴史にこれに劣らぬ光を投げかけるだろう。社会における子どもの地位は、国やその社会体制の道徳的健康、生命力、現実的人道主義の最も正確な規準だからだ。

革命前のロシアは〝諸民族の監獄〟と呼ばれた。ロシアの住民の4人のうち3人が文盲だった。毎年、二〇〇万のやっとともりはじめた乳飲み子の生命が消えた——これがツァー専制にたいする子どもたちからの勘定書である。われわれが一九一七年の10月革命を人類史の新時代として語る時、子どもにたいする態度の原則的に新しい**国家政策**をもそこに含めている。

すべては10月革命から

革命の2日目、一九一七年11月8日。ようやく生まれたソビエト共和国の教育人民委員（教育相）に任命されたアナトリー・ルナチャルスキーは学校再

ソ連の子ども——数字と事実

ソ連憲法第四二条から——「ソ連邦市民は健康保護の権利を持つ。この権利は……成長する世代の健康についての特別の配慮、教育ならびに労働教育とは関連のない児童労働の禁止も含めた、成長する世代の健康についての特別の配慮によって……保障される」

※　※　※

ソ連の法律によれば2人の子どもを持つ女性は、3人目の子が生まれた場合、一時金の国家扶助金が支払われる。4人またはそれ以上の子を持つ家庭は4人目の子とそれ以上の一人一人の子にたいし毎月、国家扶助金を受ける。一九七六年にこのような毎月の扶助金を受けた母親は二五〇万人を超している。

※　※　※

10人の子を生み、育てたソ連の女性には政府から「母性英雄」の称号と勲章が授与される。一九五〇年以後この名誉称号は二〇万九〇〇〇人の母親に与えられた。

※　※　※

7歳まで、すなわち子どもが学校に入学するまで、働く母親は保育所（3歳まで）または幼稚園に子どもを預け

←

●国際児童年に寄せて●

建計画を発表した。それは無料の義務制普通初等教育とすべての段階の学校にだれもが入学できることを主眼としていた。

ソビエト政権の3日目。国家教育委員会が設置された。

5日目。婦人に妊娠と出産のさいの有給休暇が定められた。

国内では労働力がひどく不足していたが、若いソビエト国家は児童労働を禁止する。国内は混乱、飢え、内戦の最中だった。これらの災厄にもかかわらず、革命政権はレーニンが署名した布告をもって、「子どもに衣食住、燃料、医療を供給し、また、子どもたちを食糧豊富な県に疎開させることを最重要な国家的課題の一つと考え」、児童保護会議を設置した。

子どもへの配慮が優先

一九一七年の10月革命以来、いつもこのようであった。平和な日々にも、戦争中の日々にも。本誌の読者がよく知っているように、一九四一年の夏、ヒトラー・ドイツはソ連を攻撃し、わが国の歴史上最も激しい戦争が始まった。当然、余分の資金はなかったが、ソビエト政府はこの最大の難局にあっても、子だくさんの母親や夫のいない母親にたいする物質的援助を増やす措置を実施した。ファシストの軍隊がレニングラードを封鎖し、市民が九〇〇日にわたって飢えに苦しみ、餓死しつつあった時、市内に残っていた子どもたちには食糧配給券によって当時可能な最大規準量のパンが支給された。その規準は、戦車を修理する労働者や市を守っていた兵士たちと同じだった。このことは人から聞いたのではない。私自身が封鎖下のレニングラードの子どもだったのである。

母親と子どものために

われわれの子どもたちはわれわれより恵まれている。そうでなければならない。この点にわれわれ親の人生の意義と幸福がある。この点に最重要の投資――若い世代の健康、教育、養成に投資することを義務と考えている社会の社会的公正がある

ソ連では一分毎に9人の子どもが生まれる。両親は「出産にいくらかかるか」など考えない。ソ連の家族はみなこのような費用を負担しない。ところがこれには少なからぬ金がかかる。国が完全に賃金を支払う一一二日間の母親の出産休暇（産前56日、産後56日）プラス少なくとも一週間以上の産院入院（約四〇〇ルーブル）、つまり一人の子どもの誕生には国庫から約一〇〇〇ルーブルが支出されている。生まれて最初の一ヵ月間は、新生児がまったく健康であっても、小児科医と保健婦が定期的に訪問する。これも無料だ。一般にソ連人は医療面で〝支払う〟という言葉を一生涯知らないだろう。

母親は育児休暇を取って、子どもと一緒に自宅にいることもできる。彼女の職場のポストは確保され、育児休暇の期間は勤続年数に加算される。彼女は子どもを保育所に預けることもできる。その〝値段〟は国家が実際に負担する経費（毎年子ども一人あたり五〇〇ルーブル以上）の20％以下である。3歳になった子どもは幼稚園（園児一人当たりの経費は年間四五〇ルーブル以上）に入れるが、家族が支払うのは保育所と同じく実費の20％以下でよい。男女とも7歳から学校へ通う。10年間（ソ連では普通中等義務教育は10年制）、国家はこの教育の経費を支払う。

新しい世代の若者たち

ソ連では今日、国の全歴史を通じて最も教養ある、最も健康な世代が成長している。だがわれわれは、時としてこの世代が〝甘やかされた、柔弱な世代〟ではないかと心配する。ことによると、こういった非難に一面の真理があるかもしれない。大人たちは自分が若い時代に得られなかったものを子どもに与えようと努めているからだ。

確かに、国は一層豊かになった。そして、当然のことながら、このことを第一に感じているのは子どもたちである。しかし、子どもたちに食料と住居、教師と医師、学校と劇場、本と映画などを保障しながらも、われわれは自らに最も大事な問いかけをすることをやめていない。それはわれわれが子どもたちに一番重要なもの――心をどれだけ分け与えているか、ということである。われわれの子どもたちはどんな人間に成長するのだろうか、彼らの中に冷淡なエゴイスト、ねたみ強い者、欲張りはいないだろうか、彼らはわれわれよりも善良で、勤勉で、知的で、精神的に豊かだろうか、という問いかけである。

論議を呼ぶ教育の問題

子どもの教育は数ある問題の中でも最大の問題である（この問題では自分の意見が一番だと思っていないような大人がいたら、お目にかかりたい）。

教育については多くの人々、恐らくすべての人々が論争している。子どものある人も、まだ自分自身大人になっていない人も。子どもたちは両親を批判し、両親は子どもの〝家庭教育〟をする。

〝父と子〟の問題もまた永久に続く。おそらく社会ではそうならざるをえないだろう。この社会がどんなものであっても。なぜなら若者にたいする年長者の不安もまた永遠に続くからだ。

父と子はわが国でも論争している。だが親子関係における敵対はない。われわれの子どもたちは両親の生活様式、思想様式をよく知り、理解している。それどころか、彼らは通常両親の意見に賛成している。もっとも、いつもそうだとは限らないが。

都市時代と子どもたち

しかし年長者の不安は根も葉もないものではない。親としての愛情のほかに、その不安を深めているのは、新しい、いまの世紀――躍進的な、あわただしい、〝都市的な〟世紀である。

今日ソ連の人口の62％が都市に生活している（これは15年前の1.5倍）。急激な都市集中化過程は、〝訓育面〟での困難を少なからず生み出している。都市には一層緊張した生活リズム、一層高い神経的、心理的負担、未成年者にとって一層大きな誘惑がある。たいてい父も母も働いている家庭では、子どもを監督する機会は少ない。堕落して行く困った家庭があるし、息子や娘にあらゆる必要なものを物質的に保障することで親としての義務は果たした、あとは学校がするのだと考えている親がいる。子どもに必要なのは食事や服やテレビだけではない。配慮、尊敬が必要であり、しかも絶対に必要なのは、何物にも代えがたい母親の愛情なのである。

〝難しい子ども〟の問題

これは容易ならぬ問題だ。これらの問題が時折〝難しい〟子どもたちを生んでいるのだ。

どうしたらよいか？　なによりも大人を教育することだと教育家や心理学者は確信している。難しい子どもは困った大人たち、または無責任な大人たちのいる所に現れる。難しい子ども――これはたいていその子の不幸であって、その子の罪ではない。これはわれわれ全体の教育的欠点であり、悩みであり、心配である。だからあれほど多くの人々や社会団体が〝難しい〟子どもの保護に立ち上がっているのだ。

難しい子どもをなくすために、新ソ連憲法はそれぞれの父親、それぞれの母親に次の義務を負わせた――「ソ連邦の市民は子どもの教育に配慮する義務を負う」。また次のことを保障した――「家庭は国家の保護のもとに置かれる……国家は広範な児童施設網の創設と組織および充実、日常サービスと公共給食の発展、子どもの誕生の際の扶助金の給付、子どもの多い家庭にたいする扶助金と特典ならびにその他の種類の扶助金と家庭援助の付与により家庭についての配慮を示す」

「わが国では子どもは不幸になりえないし、不幸になる権利を持たない」と、ソ連のすぐれた教育家アントン・マカレンコは語った。

われわれもマカレンコに同意して、次のように言おう――われわれの子どもはわれわれよりもすぐれ、才能があり、幸福になるだろう！

ることができる。ソ連にはこのような就学前児童施設が約一二万あり、一九七六年には一二〇〇万人以上の子どもがこれらの施設へ通った。

※　※　※

ソ連の子どものうち四五五〇万人が普通教育学校の生徒。普通中等（10年制）義務教育が施行されている。そのすべての費用は国家が全面的に負担している。教育に必要なものや就学前児童施設の維持のための費用は国防費を大幅に上回っている。

※　※　※

前教育年度（一九七七―七八年度）のソ連の普通教育学校の教員数は合計約三〇〇万人。これはソ連知識人の最大の部隊である。子どもの教育としつけの分野での学術研究は、ソ連の42の研究所で行われている。

※　※　※

約二二〇〇万の幼児と少年少女（事実上3人に1人）が一九七七年の夏にピオネールや学校のキャンプ、団体旅行宿泊所で休息し、あるいは児童施設とともに別荘地へ出かけた。国は子どもたちの休息費用の大部分を支払った。子どもの $\frac{1}{10}$ が無料の利用券をもらった。半数の子の親は子どもの夏の休息に実費の18％だけを払い、40％の親は実費の約 $\frac{1}{3}$ を支払った。

※　※　※

ソ連全国には子どもたちのために四五〇〇以上のピオネール・学校生徒の宮殿と会館、一〇〇〇以上の少年技術者ステーション、約六五〇〇の少年自然科学者ステーション、37の子ども鉄道がある。

※　※　※

毎日一五八の児童劇場と人形劇場、二七〇〇以上の幼児、学校生徒向けの特別の映画館が子どもたちのために活動している。モスクワには世界で唯一の児童音楽劇場があり、アルメニアの首都エレバンには世界で唯一の児童画美術館がある。

※　※　※

毎年ソ連では子どものための文学祭や芸術祭が開かれる――児童図書週間、子どもと青年のための全ソ音楽週間、全ロシア「演劇と子ども」週間が催される。

※　※　※

ソ連の子どもたちの間で最も普及しているスポーツはサッカーとアイスホッケー。毎年、七〇〇万人の少年たちが最も人気の高い大会――サッカーの〝皮のボール〟賞大会とアイスホッケーの〝金のパック〟賞大会に参加している。

※　※　※

ソ連では一五〇万人の子どもたちが四五〇〇の種目別児童スポーツ学校（課外学校）に通っている。

子どもたちの
創造の芽を伸ばす

モスクワのピオネール宮殿

イリーナ・ケマルスカヤ　カメラ　V・ロジオノフ

週末を含む毎日、五〇〇〇人近い子どもたちがモスクワ市ピオネール・学校生徒宮殿の八〇〇のサークルにやってくる。このピオネール宮殿はレーニン丘の、モスクワ国立大学からほど遠くないところにある。サークルの種類は自然科学系統、技術関係、芸術、スポーツ関係その他と、実にバラエティーに富んでいる。どのサークルの指導も無料である。

夢から職業へ

「飛行中隊、整列！」──命令するのは9年生のウラジーミル・アガポフ（15歳）。「定例訓練飛行用意。全飛行士は位置に付け！」

これは少年飛行士サークルの授業風景。制服を着た15―16歳の少年少女たちが機敏に飛行訓練装置の操縦士席に着く。操縦室には手と足で操作するハンドルやレバー、計器板、その他必要な設備が一切そろっている。

訓練〝飛行〟のあと、隊員たちは元テストパイロットのレオニード・ミハイロフ先生と一緒にミスの分析をする。

この少年飛行士サークルに入れるのは中等学校の上級生（8―10年生）たちだけ。授業は週2回、1時間半ずつ行われる。このサークルで習うことはかなり程度が高いので、中等学校のカリキュラムに入っていないような航空技術、物理学、数学の理論的知識をある程度持っていないと、この授業についてゆけない。

しかし、このサークルに通ってくる生徒たちの〝飛行歴〟はこれよりもかなり以前に始まっているのが普通。というのは、きょうにでも宇宙飛行に飛び立ちたいと夢見ている子どもたちは、10歳になると、母親たちに連れられて宇宙飛行士サークルにやってくるからである。このサークルの生徒たちは体育館やグラウンドで運動をし、室内プールで泳ぎ、宇宙開発の歴史を学び、物理学と数学の知識に磨きをかける。子どもたちのために著名な科学者、宇宙飛行士、設計家の講演も行われている。

一時の熱中がしっかりした興味に成長した子どもたちはやがて、少年飛行士サークルに移ることになる。サークルを〝卒業〟した子どもたちの多くが飛行学校、あるいは航空関係の大学へ進む。

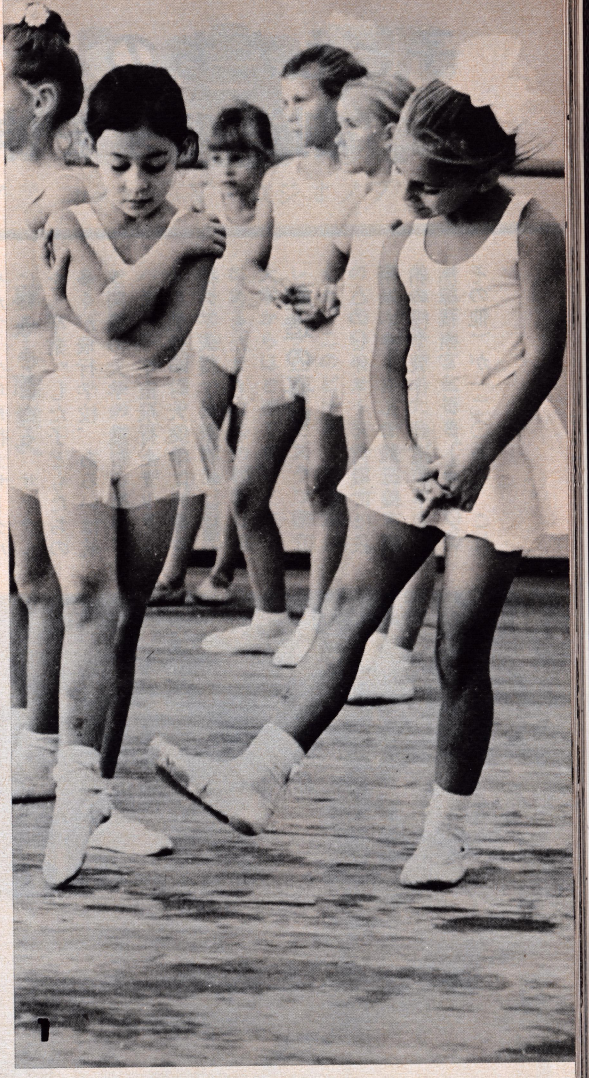
また、宇宙飛行士サークルでの勉強から天文学に興味を持ち、天文学サークルに移る子どもたちもいる。

創造の喜び

このピオネール宮殿には技術系のサークル（飛行機・船舶の模型製作、鉄道模型製作、無線技術、エレクトロニクスその他）が一二〇ある。これ



ピオネール宮殿で開かれた新年のヨールカ祭





らのサークルの多くは、2年生、つまり8歳から子どもたちの入会を認めている。

ピオネール宮殿の技術部次長リジア・カラーシは語った。

「一部の子どもは、1―2年もするとサークルをやめて何かほかのことに熱中するようになります。しかし、まさにそのことに私たちの仕事の目的の一つ――子どもたちが少年少女時代からすでに自分の関心がどの方面にあるか判断するのを手伝うという目的があるのです」

しかし、他の子どもたちは最後までサークルで勉強を続け、中には中等学校を卒業して技術系の大学に進学したあとも、ピオネール宮殿と縁が切れず、実験室で製作したり、先生たちの助言を求めてやってくる者もいる。

たとえば、ことしモスクワ電子機械工業大学に入学したミハイル・シドレンコは次のように語る。

「ピオネール宮殿での勉強がなかったら、多分、大学の入試に通らなかったろうと思います。ぼくはここで数学や物理学に中等学校よりもはるかに真剣に取り組みました。しかも、テレビの新しい回路の設計という自分の研究テーマを見つけたのもここです。だから大学でも、初歩から始めるのではなく、すでにピオネール宮殿でやっていたことの開発を続けているのです」

技術系の各サークルではよく工場や研究所、大学の注文に応じている。たとえば、体育大学の注文でボート選手の動作リズムをトレースする装置が子どもたちの手で開発されたこともある。また、幾つかの博物館のために第2次世界大戦中の飛行機の動く模型がここで製作された。現在、ここの一部のサークルでは石油化学・ガス工業研究所の注文で電子式温度調節器の開発に取り組んでいる。

自立への一歩

このピオネール宮殿に通ってくるのはもちろん、未来の設計家、数学者、技師たちばかりではない。ここにはまた四〇〇席の客席がある人形劇場や美術のサークルもある。ソ連全国に知られているロクチェフ記念学校生徒歌舞アンサンブル（7歳から17歳までの子どもたち一三〇〇人が会員）もある。少女たちを対象にした編み物、刺しゅう、裁縫、料理などのサークルもある。

文芸関係のサークルも多い。ここで勉強している文芸学者、作家、詩人の卵たちの中には7歳以下の子どもたちもいる。部屋の外でそういう学齢前の子どもの帰りを待っている親をよく見かける。母親の一人にたずねてみた。

「お宅の息子さんは何のサークルですか？」

「幾つも入っています。チェス、絵画、文芸のサークルです」

「三つともこなしています？」

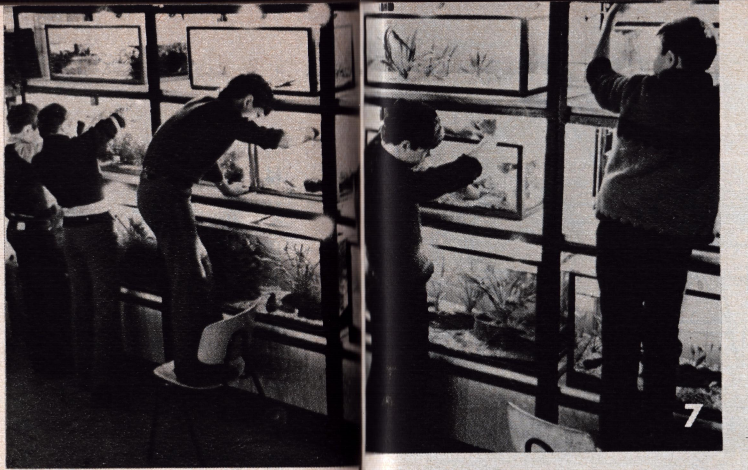






1 ここの歌舞アンサンブルはソ連全国に知られている。これまでにモスクワの学校生徒約2万人がこのアンサンブルを〝卒業〟した。
2 芸術関係のサークルには3500人以上の会員がいる。
3 チェスのサークルはピオネール宮殿で最も人気の高いサークルの一つ。
4 歌舞アンサンブル年少組のレッスン風景
5 歌舞アンサンブル・オーケストラのリハーサル







「ええ、今のところは。息子にとって一番厳しい罰はピオネール宮殿に行けないことです。私の考えでは、将来、自分の興味がどこにあるか見きわめやすいように、最初はいろいろなことに手を出して見たほうがいいと思うんです……」

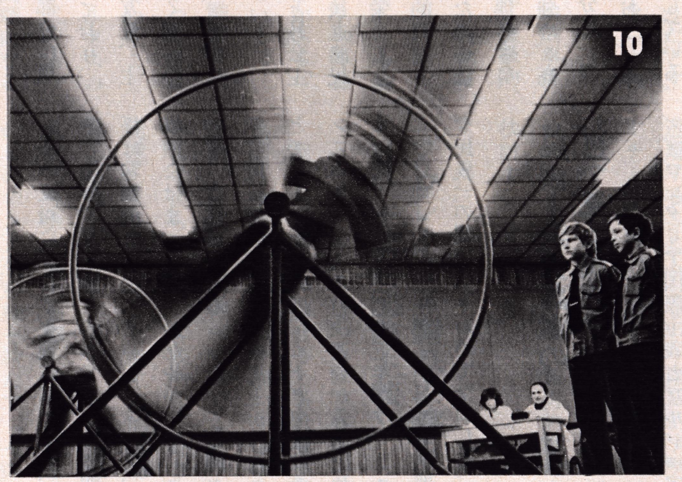
子どもたちはサークルの授業で自作の詩やお話を読み、色鉛筆で仲間の作品のさし絵をかき、文学ゲームをする。この子どもたちは将来、物理学者や地理学者になるかもしれないが、文学への愛着は永久に残るだろう。

もう少し年上の子どもたちの文芸サークルは、心理学博士候補のジナイダ・ノブリャンスカヤ先生が指導している。

「私がめざしているのは、サークルの子どもたちが全員プロの評論家や作家になることではありません。私の願いは子どもたちが生活を創造的に認識し、本の内容について熟考し、真の芸術作品を評価できるようにすることです。私のサークルには詩やお話を一度も書いたことのない子どもたちもいます。そのかわり彼らは文学の鑑賞眼を身に付けました……」

ノブリャンスカヤ先生のサークルの会員たちは夏のピオネール・キャンプに同じようなサークルの指導員として参加している。ピオネール宮殿の他のサークル員たちも同様の活動をしている。生物サークル員たちはキャンプや学校に生物コーナーを作り、写真サークル員たちは現像室を開き、チェス・サークルの子どもたちは競技会を催し、外国語サークルの会員たちは外国人見学客の案内を勤める……こうして子どもたちは、自己の創造的才能を発揮する自立した最初の一歩を踏み出すのだ。







6 ピオネール宮殿の〝冬の庭園〟には500種を超す植物が植えられている。これはソ連科学アカデミーからのプレゼント。

7 動物サークルの水槽には100種以上の魚が飼われている。

8 人形劇場は観客を楽しませるだけではない。俳優たちにも大きな満足感を与える。

9 宇宙飛行士サークルで

10 宇宙飛行士サークルの会員たちは飛行訓練装置、回転リング、遠心訓練装置などで練習する。

11 模型飛行機製作サークルはモスクワや国際的な児童工作展には必ず出品している。

プロレタリア国際主義の思想と現実

教授 E・バグラモフ

プロレタリア国際主義とブルジョア民族主義との間の激烈な思想闘争は、すでに前世紀の中ごろに始まった。当時、マルクスとエンゲルスが「万国のプロレタリアよ、団結せよ！」というスローガンと、他の諸民族を抑圧している民族は自由になりえないという命題を提起したことが、この闘争の原因であり、動機であった。マルクスとエンゲルスのスローガンは、一方では、社会的、民族的解放をめざしてたたかっている勤労者の強力な思想的武器となり、他方では、支配階級による激しい攻撃の対象となった。

この思想的抗争は、ロシアで10月革命が勝利したのちにとくに勢いよく燃え上がり、第2次世界大戦中にははっきりと現れ、それは今日まで続いている。

現段階の特徴

現在の二つのイデオロギーの闘争には、いくつかの新しい特徴がある。その一つは、現在地球の広大な部分に現実の社会主義社会が確立されており、その社会では諸民族の友好、友愛、主権、相互援助と支援にもとづく新しいタイプの民族関係がつくられ、成功裏に発展していることである。

ソ連における社会主義建設と社会主義世界体制の誕生は、以前の後進諸民族を含む多くの民族に真の繁栄をもたらした。新しい制度は、民族的利益と国際的利益との正しい結合のための強固な基礎をつくり、あらゆる種族または民族の人々の民族的尊厳を高めた。社会主義諸民族は、自分を一つの家族の平等の一員と感じており、当然お互いの緊密な接近を熱望している。

いま一つの重要な特徴は、全世界で社会生活の国際化の動きが強まっていることだ。この動きは社会主義社会ではとくに速い。現在当然の現象としてますます強まっている社会主義国民の接近は、国際主義の活力と魅力をはっきり示している。

その反対に、資本主義体制の場合、その全体でも、個々の環でも、民族関係は客観的に悪化している。それは、以前にはまったく〝おだやか〟で、このような問題など起こらなかった国々で、民族感情が激しく燃え上がったことである。たとえば、カナダではフランス系カナダ人の自決運動が急激に強まった。ベルギーでは近年、フランス人とワロン人（ベルギーの二つの主要な民族）の関係がきわめて緊迫した。

民族主義擁護者の目で見た民族主義

プロレタリア国際主義とブルジョア民族主義との間の思想闘争の背景となっているのは、民族解放運動が発展する一方で、旧植民地所有諸国が、かつての植民地で支配または影響力を復活させようとしていることである。当然、旧植民地の国々の人々は民族形成過程に高い関心を示し、自主的発展の道を求めている。

西側の政治学者または社会学者の著書の多くは、〝民族主義が全能の力〟をもつかのように書き、民族主義的ビールスが社会的、地理的境界をどんどん越え、全世界に慢延しているかのように書いている。これらの著書は民族的要因の役割の増大を、民族主義の役割の絶対的強化と見ている。民族主義の概念が資本主義社会の支配階級に好まれるのは、民族主義が彼らの階級的利益にかなう場合だけだということは、偏見のない人ならだれでも知っている。

発展途上国で民族主義は、新植民地主義者の目的にそうように手なずけられ、利用されようとしている。また社会主義世界で民族主義がほんの少しでもあらわれるとすぐに、民族主義はほめちぎられ、天まで持ち上げられている。

西側では民族主義はしばしば社会主義反対闘争の主要な切り札にされており、民族的偏見の力を利用すれば、プロレタリア国際主義の思想に挑戦し、社会主義と民族の自由・独立をめざす闘士の隊列を分裂させることができるとあてこんでいる。



マルクス主義の敵の目で見たマルクス主義

ブルジョア社会学から見れば、階級的立場とか、プロレタリアートとすべての勤労大衆の利益の擁護とかは、民族的利益に反するものである。社会主義の敵は共産主義者に向かってこう言っている――諸君は自らを民族的力と宣言して階級的利益に超然とするか、それとも〝狭い階級的〟立場に閉じこもって民族の利益を代弁する権利をやめるかどちらかだと。

続いて社会主義の敵は〝民族的〟概念と〝国際主義的〟概念そのものを対置させ、二つは互いに排除し合うものだと宣言している。彼らは階級闘争を社会的進歩の原動力とするマルクス主義的命題を否定し、かわりに民族間の闘争や民族的対立を原動力だとしている。これでは民族的諸関係は、全然法則性をもたない独立した動きということになる。つまり米国の黒人の諸権利をめざす闘争も、人種主義者やクー・クラックス・クランの野蛮な無法行為も、すべて同じような性質の出来事であり、人間の盲目的な、先天的な性癖の抽象的な人種紛争にすぎないというわけである。この理くつだと、紛争が起こっているのは、何ともわかりかねる民族感情のせいだということになる。

しかし、もしこの見解の通りだとすると、人類の発展の見通しはたちまち真っ暗になってしまう。

重大かつ深刻なあらゆる政治的事件または紛争の根底にあるのは、階級的、社会・経済的要因であるという命題は、マルクス・レーニン主義の拠点の一つであり、民族的抑圧を含むあらゆる抑圧の一掃は、プロレタリアートの革命的な社会的課題と密接な関係がある、とマルクス主義者は主張している。

レーニンは書いた――「〝労働者の問題〟に比べて、マルクスにとって民族問題が従属した意義をもっていたことは疑う余地がない。しかしマルクスの理論と民族運動の無視とは、天と地ほどの違いがある」。従って、問題になるのは、一般的な社会・階級的課題にたいする民族問題の従属的位置である。

しかしこの従属関係は、言うまでもなく、民族問題が民族的特性の過小評価、ましてや無視とはまったく無縁である。

現実的社会主義の誕生と発展は、国際主義実現の重要な法則性をきわめてはっきりと示した。つまり社会問題にたいする狭い民族的アプローチや民族的わく内に人為的に閉じこもることは、現実的社会主義とは無縁である。同時に現実的社会主義は、民族的基盤から遊離することもしない。階級的アプローチとは民族的課題を忘れることではなく、勤労者の共通した国際主義的利益のプリズムを通じてこれらの課題を検討することである。

プロレタリア国際主義と社会主義的国際主義

反共思想家にいわせると各社会主義諸国は今後遠心的傾向を強め、分離主義的、民族主義的傾向を強めるそうだ。そして彼らはこの〝客観的な〟動きを促進しようとして、社会主義的国際主義とはほかならぬ〝外国〟への従属であり、〝社会主義的国際主義〟の概念そのものでさえ生存権を持たず、〝モスクワの思い付き〟にすぎない、と宣伝している。

社会主義的国際主義の規準、原則は、国家関係の水準に高められたプロレタリア国際主義の規準、原則である。

このように、労働者階級だけでなく、共通の利益で結ばれた、主権をもつ社会主義諸国民も、社会主義的国際主義の社会的土台となっている。

社会主義諸国はけっして同じ条件のもとで新しい社会を建設しているのではない。社会主義への前進は、国民の独特な歴史的運命、その社会構造の特徴、文化的伝統を反映している。だから当然、社会主義建設の形態と方法を〝一元化する〟ことはできない。同時に各国の経験の相互研究は、きわめて興味深く、重要である。もちろんソ連国民も社会主義を建設している諸国民の多面的な経験を注意深く研究している。同時に発達した社会主義社会の建設の過程で蓄えられた経験は、兄弟諸国の共産党と国民が抱える問題を解決するのに役立っている。

社会主義における民族的なものと国際的なもの

兄弟諸国が蓄えた社会主義と共産主義の建設の共同経験のおかげで、新しい社会建設の一連の重要な法則を定式化できるようになった。これらの法則は普遍的性格を持ち、民族的特徴に関係なく十分な価値をもっている。

社会主義の条件下の民族的なものと国際的なものとの弁証法的結合の問題について、ハンガリーおよび国際労働運動の有名な活動家ゾルタン・コモチンはこう語っている――「われわれは国際政策で、友人や同盟者にとって良いものだけがわれわれにとって良い、という原則をつねにとっている。もし時としてわれわれの特殊な利益が共通の利益と矛盾を来した場合、われわれは自分の利益を共通の利益に従属させる。なぜならこのような解決だけが将来によい成果を残すと確信するからだ」

経済相互援助会議（通称コメコン）とワルシャワ条約機構の加盟国は緊密な経済的、政治的同盟を結ぶことによって、国際協業を共通の利益のために広く生かし、平和と国際安全のために国際場裏で一致して行動することができるようになっている。このような協業のメリットについては、コメコン加盟諸国の工業生産の国民一人あたりの平均水準が世界の平均水準を3・6倍上回っているという事実からもわかる。

具体的な問題では意見の相違はあっても

社会主義的国際主義は、労働運動、民族解放運動と同様に固いきずなでプロレタリア国際主義と結ばれている。

今日プロレタリア国際主義について語ることは、「共通の目標をめざす闘争におけるすべての国の労働者階級と共産主義者の連帯、民族解放と社会的進歩をめざす諸国民の闘争との連帯」について語ることにほかならないと、一九七六年の欧州共産党・労働者党会議でL・I・ブレジネフは指摘した。社会主義と民主主義をめざす闘争の具体的な問題について、あれこれの党の間で意見の相違が起こっているのは当然のことだ。ある場合には意見の相違は労働運動自体の歩みの中で取り除かれており、ある場合には慎重な分析と同志的討論、唯一の確実な解決の辛抱強い探求が必要であろう。

しかしいずれにせよ、兄弟的なマルクス・レーニン主義党は、これらの意見の相違が、社会主義をめざす国際主義的闘争の根本的な問題に触れない限り、その意見の違いを大きく取り上げて問題にするつもりはない。一方われわれの敵は革命勢力の連帯をぐらつかせるために、どんな犠牲を払ってもソ連の路線を他の兄弟諸党の立場に対置させようと心をくばっている。しかしこの戦術は兄弟諸党からますます強い反撃を受けている。

原則は譲れない

エンリコ・ベルリングエル・イタリア共産党書記長はジェノアの大衆集会で次のように演説した。「レーニン主義を〃AからZまで〃放棄し、対ソ関係を断ち切れという要求がわれわれに出されている。しかしそれだけではすまない。レーニンを捨てれば、マルクスをも捨てなければならなくなる。われわれがソ連共産党と断絶したら、やがては10月革命も誤りだったことを認めなければならなくなる。その後さらに、共産主義者は、われわれの全歴史は誤りの連続にすぎなかったし、共産主義者の多くの世代のたたかいは無駄だったと声明しなければならなくなる。

ではこんな攻撃を企てた連中のねらいは何だろうか？　彼らはわれわれに原則的な譲歩をさせ、階級的、国際主義的、革命的党であることをやめさせ、あるいはわれわれをセクト主義や教条主義に閉じこめようとあてこんでいる。

しかし彼らがどんな衣をつけようとも、彼らを待っているのは失望だけである。彼らの策略は企てと反対の結果を招くだろう」

トピックス＊
アムール水系第3の水力発電所

ソ連ゴスプラン（国家計画委員会）とソ連ゴスストロイ（国家建設委員会）の特別委員会は、極東で3番目の水力発電所の建設を一九八〇年に開始することを決めた。これは現在アムール川の支流ブレヤ川に建設中のブレヤ発電所（出力約二〇〇万KW）の下流に建設される下ブレヤ発電所で、堤高40m、堤長約一五〇〇m、満水面積一五〇平方km、出力は三八万KWの予定。発電所の運転は自動化され、ブレヤ発電所から遠隔操作するよう設計される。すでにダムサイトの選定も終わっている。

下ブレヤ水力発電所で生産された電力は、バム鉄道とその沿線に建設される新しい企業に供給される。完成は一九八六年の予定で、下ブレヤ発電所のダムによってブレヤ川の航行条件も大幅に改善される。

砂漠をよみがえらすアムダリア川

ボリス・プリワロフ

中央アジアのカラクム砂漠を流れるアムダリア川の開発状況を知らせてほしいとの福島県の鈴木和則さんのご要望におこたえします。

アムダリア川は世界の屋根――パミール高原の雲のかなたに源を発しており、支流にバフシ川とピャンジ川がある。アムダリア川の水位の変動は大きく、年間流量の$\frac{3}{4}$は氷河がさかんに溶ける夏季が占め、秋や冬は場所によっては歩いて渡れるほど流量が少ない。川岸は泥と砂からなり、その岸を洗う流れは速い。アムダリア川が水路をたびたび変えている理由の一つはそこにある。

アムダリア川が、流域の多くの都市や村に多大の損害を与え、カラカルパク自治共和国のかつての首都トルトクリ市の場所を洗い流したことは、そう古いことではない。そのため首都はヌレクに移され、トルトクリは新しい場所に建設された。

水工施設の建設

この暴れ川の包蔵水力は三〇〇〇万KW。アムダリア川を抑えるためにヌレク水力発電所（すでに設計出力二六〇万KWにほぼ達した）、タヒアタシ水工施設（第1期工事分が近く完成）、チュヤ・ムユン水工施設が建設されている。これらの施設は、アムダリア川の治水対策や利用の第一段階となるものだ。

アムダリア川流域には中央アジアのほとんどすべての主要な富源がある。本流と支流の流域ではソ連の約50％の綿花、中央アジアの果物の約半分が栽培されており、この川の水は金、ガス、石油、アルミニウムの採掘を助け、幾百万頭の家畜に水を与えている。アムダリア川の流域には一二〇〇万haの肥沃な土地があるが、いまの所その$\frac{1}{10}$しか利用されていない。

中流域の難工事

タヒアタシ水工施設は、アムダリア川の難所といわれる中流に建設されている。これらの施設はダムのほか、導水路と排水路、給水装置とさまざまな用途の運河、船舶用の水門と魚道などで、ダムの堤頂を鉄道、高速道路、さまざまな交通路が通る。

水工施設の主な用途は、農地の灌漑と都市や農村への給水。この地方の灌漑面積は四八万二〇〇〇ha増えた。

タヒアタシ水工施設の規模は一見たいして大きくはないようだが、この川の特殊な事情のせいで、工事はなかなかの難工事になっている。アムダリア川は荒れ狂うほかにいくつかの〃秘密兵器〃を持っているが、ここではそのうち二つだけを挙げよう。第一は、タヒアタシ地区のアムダリア川の泥水が鉱分をたっぷり含んでいることだ。これは鉱水愛好者にはよいかもしれないが、建設者には悲劇だ。こんな水は酸に劣らぬほどコンクリートを破壊するので特殊コンクリートを使わねばならなかった。

第二は、ダムの建設現場で水利学者がこの地点の1年間の土砂などの通過量を測定したところ、一億三〇〇〇万tだった！　この量を頭におかないと、タヒアタシの水工施設は全部砂もろとも持ち去られてしまうだろう。

世界最高のダム

ごく最近、ヌレク水力発電所が発電を開始した。この発電所はワフシ川に建設され、世界最高のダムを持つ。さらにこのヌレク発電所の上流でラグン水力発電所の基礎工事が始まった。そのダムの高さは四〇〇mで、ヌレクより一〇〇m高い。設計出力も一〇〇万KW多い三七〇万KWである。ワフシ川では合計6つの発電所が建設される。

ピャンジ川にはダシチジュム貯水池が建設され、ワフシとピャンジの合流地点には中央アジア最大級の上アムダリア貯水池が建設される。またアムダリア川そのものにもチャルジョウ水工施設が建設される。これらが完成すれば、増水、かんばつ、流砂はなくなる。一九九〇年までにいまの荒れ地の約四〇〇万haが開拓される。こうしてアムダリアとその支流はおとなしい従順な川になろう。

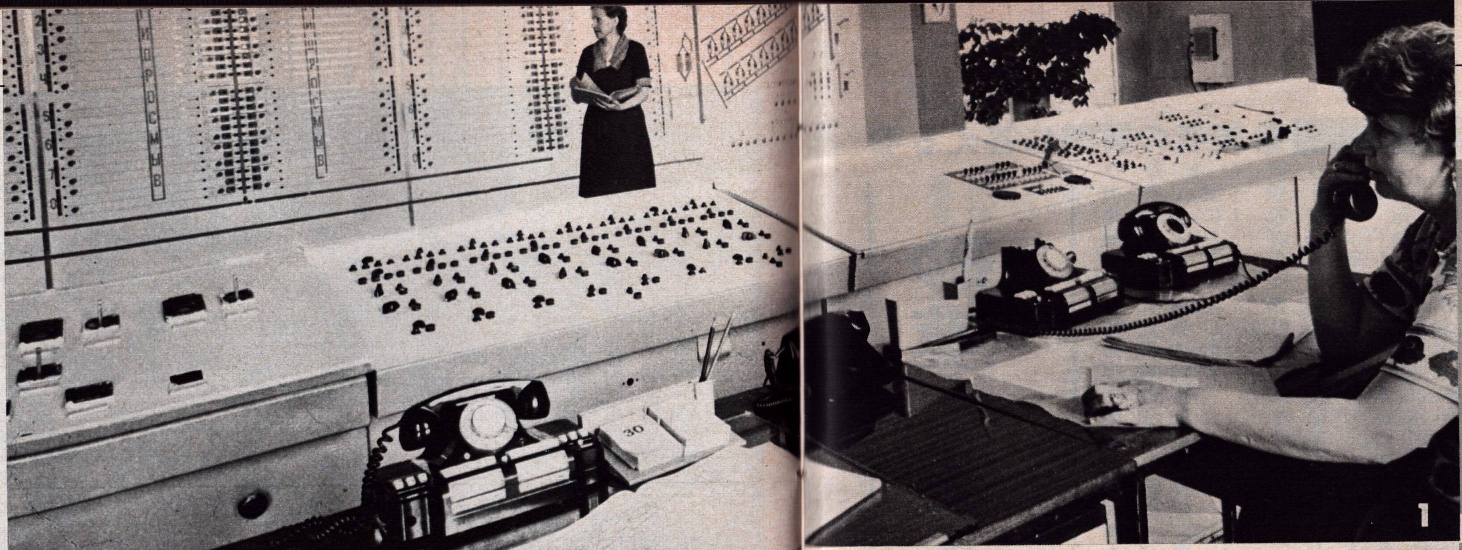
工費を数年で償却

アムダリア川流域の総合開発費は約二二〇億ルーブルだが、よみがえった土地はこの費用の何倍にものぼるものを返してくれるだろう。たとえばチュヤ・ムユン貯水池の工費は約三億ルーブルだが、きびしく見積もっても3－4年で償却できよう。タヒアタシ灌漑施設が完成すると、カラカルパク自治共和国だけで綿花の収穫量は倍増し、年間六〇万tとなる。

アムダリア川水資源利用総合計画のかなりの部分はすでに実施ずみである。一九八〇年までにカラクム運河（一一〇〇km）が全通し（現在は九〇〇km）、アムダリア川は砂漠を灌漑してカスピ海に入るだろう。

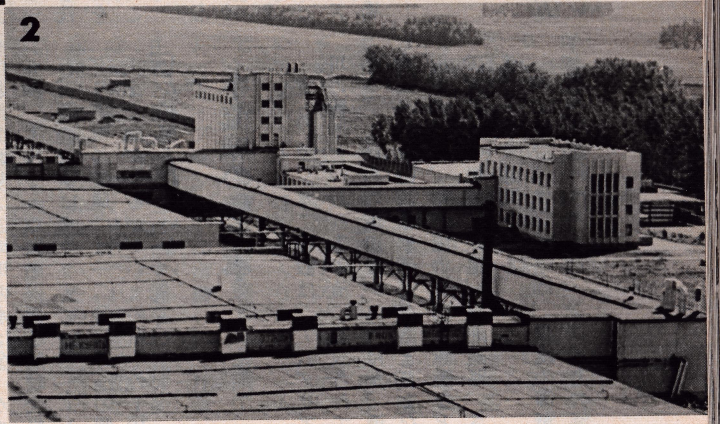
オムスクの養豚コンビナート

ウラジーミル・スハノフ
カメラ　G・マルデル



西シベリアのオムスク市の近くに国営養豚コンビナート（フィルマ）「オムスク・ベーコン」がある。設立以来10年になり、現在の肥育頭数は一七万頭。

この企業はオムスク州の八つのソフホーズを統合したもので、三つのソフホーズは肥育、一つは豚の繁殖力の改良、あとの四つは飼料の生産をそれぞれ専門にしている。こうした専門化のおかげで、新しい仕事のやり方や進歩的な技術を広く採用することができ、大きな経済的効果をあげている。



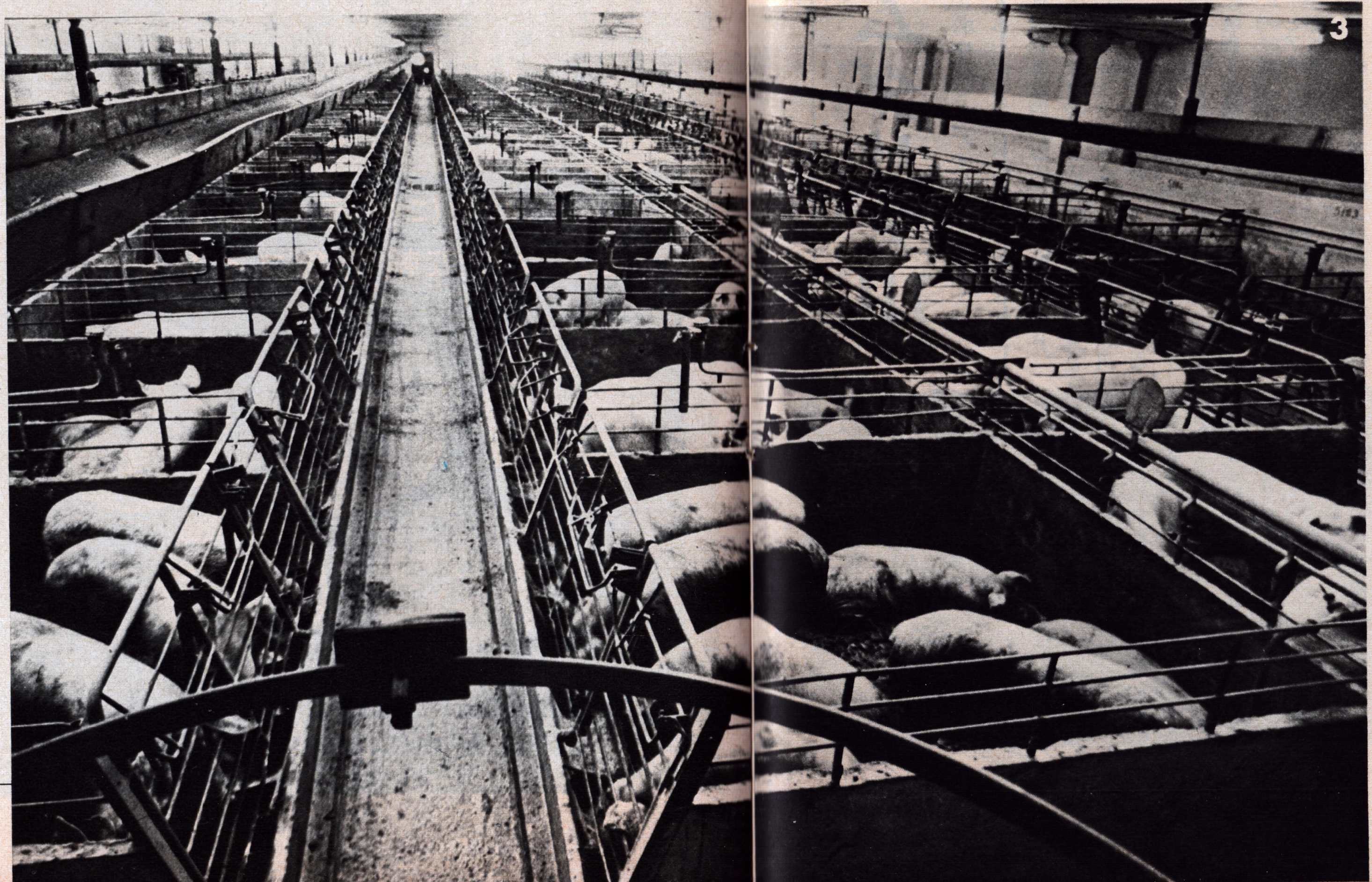
この企業の肥育コンビナートは大工場そっくりで、飼料の自動配分機、子豚を暖める赤外線ランプ、豚舎の換気、清掃用の独創的な装置などを備えている。

コストも大幅に低下

省力化コンビナートの出現は、肥育生産の技術全体と経済を大きく変えただけではない。畜産従事者の作業条件は一変し、前よりもずっとらくな楽しいものになり、労働支出はオムスク州の非専門経営の1/3以下になった。飼料の消費量は1/3に減り、豚肉のコストも1/3下がった。

この企業の仕事の経験は、西シベリアの他の畜産経営でも広く生かされている。フィルマはこのように大企業であるだけでなく、実験所や育種センターを備えた学術生産合同でもある。現在この企業にもう一つ同じような養豚コンプレクスが建設されており、それが操業すれば、この企業の豚肉生産量は倍増しよう。

いまこの企業の並びに都市型の現代的な集落があり、5階建てのアパートや2階建てのコッテージ型住宅が軒を並べている。



1　養豚コンビナートの指令室。ここで係員がコンビナート全体の仕事を監視している。

2　養豚コンビナート「オムスク・ベーコン」の全景

3　コンビナートの豚舎の一部

＊トピックス

うずまき形の海流現象

レオニード・ブレホフスキフ・ソ連科学アカデミー会員らは、うずまき形の海流が大洋中に存在することを観測で明らかにしたが、この業績は学術上の重要な発見としてソ連国家発明発見委員会に登録された。

これらのうずは絶えず出現しては消失しており、風、太陽エネルギー、それにメキシコ湾流のような恒常的な海流の作用で発生し、深さ２－３kmに及ぶ。大多数のものは存続期間が数カ月だが、数年間存続するものもある。同時に1000個のこの種のうずが形成されることもあり、１日に数kmのゆっくりした速度で絶えず移動する。

海洋学者はこれらのうずが海水の温度や塩分含有率、その他の物質の濃度を変え、時には恒常的な海流の速度や方向をも変えることを明らかにした。うずが通り過ぎる場所では動植物プランクトンが増えるので、漁業の資源状態にもこのうずまき形の海流が与える影響は大きい。

肉眼では識別しにくいため、この現象の発見が遅れたが、将来はたとえば超高感度の無線高度計を人工衛星に搭載しての観測も可能となろう。

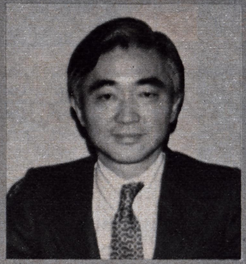
平和な世界の建設に役立つオリンピック

——好評のモスクワ五輪記念コイン

ユーリー・イワノフ

いま世界のスポーツ界の目は、第22回オリンピック大会の開催地モスクワに向いている。モスクワ五輪には世界一〇〇ヵ国余りから約一万二〇〇〇人の選手、政府関係者のほか、約八五〇人の来賓、六〇〇〇人の記者、三五〇〇人の審判員らが参加し、その規模は実に壮大なものになる。また内外から一〇万人の観光客がモスクワを訪れる。

ソ連はモスクワ五輪の準備とPRにつとめている。その一環としてソ連で発行された第22回オリンピック記念白金（プラチナ）貨、金貨、銀貨は、日本では輸入総代理店の西武百貨店を通して発売されている。本紙記者は西武百貨店の竹内敏雄常務取締役にインタビューし、オリンピック記念コインの発売について話をきいた。



竹内・西武百貨店常務

オリンピック大会の意義についてご意見を。

オリンピック憲章には、平和な世界の建設に助力し、国際的敬意と友好を深めるという世界のスポーツマンの志向が明確に示されている。これまでのどのオリンピック大会もこのけだかい目的に役立ってきたが、こんどの大会もこの目的にそうことは疑いない。これは社会体制の異なる国々の平和共存の手本だといえる。すべての諸国民は平和な空の下で暮らし、対決はスポーツだけに限りたいと願っている。スポーツを通じて世界平和を——これがオリンピックのモットーであり、主な意義である。

西武百貨店はオリンピック大会協賛事業にどのように参加しているか？

これまでにオリンピック写真展など数々の展示会を催してきた。こんどはオリンピック記念コインを発売し、オリンピックの理念そのもののPRにつとめているし、売上金の3％は日本オリンピック委員会に、さらに一部は第22回オリンピック大会基金に寄贈する。うちのコイン売上高は一四億円で、そのうち七二四万円がモスクワ五輪基金へ送られた。

ソ連発行のオリンピック・コインの特徴は？

白金貨（白金品位九九九／一〇〇〇、一二万円と一五万円）の発行は戦後初めてである。どのコインも品質が高く、デザインがりっぱだ。コイン収集家だけでなく、贈り物にしたいお客様方にも、とても評判がよい。このことはお客様のご意見にもはっきり出ており、たとえば春日部市の山田さんは「ソ連発行のオリンピック・コインはどれもみなとてもすばらしい。とくに珍品といえる白金貨はすばらしい。私はいろいろお世話になっている方々に贈るために金貨（六万円と七万五〇〇〇円）を4枚、それに自分用として白金貨を1枚買った」と言っておられる。ある大保険会社の常務取締役の方も「ソ連のオリンピック・コインは品質、デザインともにすぐれており、収集家にはこたえられないものだ。日本各地の支社へのよいプレゼントになる」と語っておられた。私たちは多くのお客様からも同じようなご意見をいただいている。

対ソ貿易の信頼度についてご意見を。

ソ連は十分に信頼のおける取引相手だ。ソ連は、貿易面でひじょうに明るい未来をもっている唯一の国である。私の見るところでは、ソ連と中東の二つの地域に、こんごの経済発展の可能性が集中しているようだ。

オリンピック記念コインについてのお問い合わせは左記へ。

（郵便番号一七一）東京都豊島区南池袋1－28－1 **一九八〇年オリンピックコイン企画**（電話03－983－0161㈹内線3789）

すでに発行されたモスクワ五輪記念コインから



（写真は２万3000円の銀貨セット）



アレクサンドル・イワノフ氏の生活AからZまで (1)

アレクサンドル・フラトキン

はしがきに代えて

本号からごく普通の働いている人とその家族の日常生活をつたえるシリーズものを始めたい。

本誌は創刊以来20年余りになるが、これまでにさまざまなテーマやジャンルで、労働者や農民、技師や医師、学者や芸術家の話を取り上げてきた。それでもなお、ソビエト人の生活ぶりの詳細を紹介してほしいという読者からの手紙がいぜん多い。こういうリクエストはしごくもっともなものだと思うので、読者の注文に応じることにした。

ジャーナリズム、とくに日本の新聞や雑誌では〝密着取材〟がよく行われている。私たちも初めそれをやろうと思った。このやり方だと、記事がさも信頼のおける正確なものになるかのようだが、よく考えて見ると、それで読者のあらゆる質問にくわしく答えるのは、とうてい無理だとわかった。他人がいるところで、たとえその人が平静に他人を意識せずに行動したとしても、やはり自分をすっかりさらけ出すのは無理であり、いやでも何か束縛された感じを受けるのは免れない。だから、まったく正確にその人のありのままは描けない。またその人は記者がついて回ることに、どこまで耐えられるだろうか？ 1週間、2週間……しかしその期間に読者が知りたいと思うようないろんな生活上の出来事が、その人の生活に起こらないかもしれないのだ。

こうしたことをいろいろと考えた末、日本の新聞や雑誌にかなり見られる〝作り上げるルポ〟というやり方に似た方法で取材することにした。この方法の絶対的長所は、取材の相手をどんな状況のなかにでも置くことができ、相手がけっして口にしないような生活上のこともうかがい見ることができる点だ。

私たちのルポの対象は一応頭の中でつくり上げられたもの（このジャンルの性質上仕方のないことだ）だが、まったく典型的な普通の世帯である。この家族がぶつかるいろんな摩擦やシチュエーションはすべて、実際にあったことを基にしており、ソビエトのほとんどの世帯が経験しているものである。

もちろん、このシリーズでは数々の数字や事実が挙げられよう。こうした数字や事実



は全部、統計集や百科事典や新聞雑誌にのったものである。

もう一つことわっておくが、このルポ・シリーズで真っ先に労働者世帯を取り上げたのは、労働者とその家族がソ連の全人口の61・6%を占めているからだ。

読者の皆さんにはまだそれでも疑問や希望があるかもしれない。もしお手紙をいただければ、私たちはよろこんで皆さんのあらゆる質問にお答えしよう。

〝作り上げるルポ〟シリーズの担当は、ノーボスチ通信の経験ゆたかな記者で、一九七二年から七六年まで日本で働いたアレクサンドル・フラトキン(55歳)、さしえの担当はリュドミラ・ボルズイフである。

まずは御紹介

どの統計を見ても、ソ連で一番多い姓はイワノフとなっている。たとえば七九一万一〇〇〇人のモスクワ市民のうちイワノフ姓を名乗るものは九万人いる。こうしてここにまず登場する人物もイワノフという姓である。

名はアレクサンドル。この名のほうも遠い昔からロシアで最もポピュラーなたくさんある名の一つである。横道にそれるが、この〝アレクサンドル〟はほかの名よりも愛称が多いようだ。たとえば、サーシャ、サーニャ、シューラ、アリクといった具合だ。身内の者や親しい友だちはこの愛称でアレクサンドルを呼ぶ。

わがイワノフ氏は職場でよくアレクサンドル・ペトロビチと父称をつけて呼ばれる。〝ペトロビチ〟というのが父称で、父親の名のピョートルからきたものだ。名と父称を呼ぶのは公式には成人に限られ、身内や古い友人の場合は名を呼ぶだけでよい。　式に

アレクサンドルは35歳。どうして35歳にしたかについては、いくつかの理由がある。いまソ連の男の平均年齢が大体35歳というのが第一の理由で、第二は妻帯して、子どもを二人もち、完全に一本立ちになるのに、35歳という歳が最も適していることだ。

アレクサンドルは親代々のモスクワっ子で、両親もモスクワで生まれた。母親はいまも戦前から夫と住んでいたモスクワ中央部のアパートに住んでいる。まだ57歳というからそう歳もとっていない。2年前にいやな〝年金受給資格年齢〟に入り、年金の給付を受けるようになったが、職場の郵便局はやめず、以前どおり電報受付係として月に一三〇ルーブルの給料をもらっている。ついでに説明しておくが、国民経済の多くの部門、まずサービス業関係の部門では、年金受給年齢に達したのちも、同じ仕事または別の職場で働くと、年金の全額と賃金の両方がもらえる。アレクサンドルの父親は、息子が生まれた数ヵ月後の一九四三年に戦死した。

高い技能資格をもつ仕上げ・組立工のイワノフは工作機械工場で働いており、賃金はかなりよく、月平均約二六〇ルーブル。働くのが好きだし、仕事の腕もよいので、もう何年間も年末には〝ボーナス〟(賞与)として1ヵ月の賃金分をもらっている。

さて、イワノフ氏についてまだ紹介することがあるだろうか? 彼が主人公である以上、体格も一応定めておこう。

体は丈夫だし、がっちりしている。髪は半分以上のロシア人と同じくあま色で、かなり長く(それほどではないが、やはり流行におくれないよう心掛けている)、まゆ毛は黒、目は当然灰色。背は約一八〇cm、体重は78kg。大多数のロシア人同様骨太だから、もしスポーツをやっていなかったら、体重はもっとあるはずだ。アレクサンドルはスキーもうまいし、泳ぎもなかなかのものだ。以前はロシアの子どもなら誰でもやるようにサッカーもやっていた。いまは魚つりが一番のたのしみだが、冬にはそれにスキーが加わる。スキーには奥さんや子どもたちと出かける。そのほか、男らしく大のスポーツファンで、「スパルターク」チーム(サッカーと冬はアイスホッケー)がごひいきだ。「スパルターク」は労働組合のスポーツ団体の一つである。

なおイワノフ氏は機械工業労組の組合員で、毎月賃金の1%の組合費をきちんと払っている。

さきに言ったとおり、イワノフ氏は家庭持ちで、家族の数は統計の平均数字なみの4人。本人のほか、奥さん、そして男の子と女の子だ。

家族の一人一人をちょっと紹介してから、話を本題に戻すことにして、まず奥さん。

奥さんの名はアンナ、愛称はアーニャ、アーネチカ、アニュータ。イワノフ氏はその時の気分次第でいろいろに呼ぶ。アンナは31歳。アーニャはきゃしゃとはいえないが、すらりとして、スタイルがよい。髪はくり毛で、いつも手入れがよく、感じがよい。おしゃれが好きで、太らないように気を付けており、一定の〝減食日〟さえきめて、その日はリンゴだけとか、ヨーグルトだけにとどめている。おしゃれの好きな人はよく家計に穴をあけがちだが、アーニャはうまくやりくりをやっている。彼女の身長は一六四cm、平均体重は62kg。

アンナは自宅に近い地区の診療所の看護婦をしており、月収は約一一〇ルーブル。

息子はペーチャ(正式な名はピョートル)。イワノフ氏の父親の名を受け継いだ。9歳で3年生。成績は悪くはない

が、優等生でもない。それがいささか両親の悩みのタネだが、ペーチャは別段それを気にかけてはいない。母親似だが、母親よりもずっと背は高くなるだろう。おそらく父親よりも高くなるだろう。どうやら典型的な〝のっぽ型〟だ。学校まで家から歩いて7分だが、ペーチャは始業時間に遅れまいと3分ですっ飛んでゆく。

この家で一番小さいカーチャは4歳。両親がカーチャを叱るときは、カーチャをおとなのようにフルネームでエカテリーナと呼ぶ。この歳のどの子どもにも共通していることだが、カーチャも何かにつけて「どうして?」とたずねる。カーチャ自身言っていることだが、カーチャは毎日〝おつとめ〟に出ている。〝おつとめ〟先はすぐ隣の区立幼稚園だ。いつもママが8時に幼稚園につれて行き、午後6時にパパがつれて帰る。

そして最後に5歳の雄犬のステパ。家中の者にかわいがられ、ステパも家の者全部が好きだ。ステパの母親はエルデール・テリアだが、パパは不明。むく毛で陽気で大食いのステパは、何よりもくるみとお菓子が大好きで、あっというまにお菓子の包装紙をむきとるこつを会得している。

イワノフ家は数年前に建った工作機械工場の8階建の鉄筋コンクリートの従業員アパートの5階の二間のフラットに住んでいる。ここはモスクワのはずれの新地区の一つにある。35平方mの二間プラス8mのキッチンのほか、玄関、浴室、トイレがある。モスクワのほとんど全部の住宅同様、セントラル・ヒーティングとお湯の設備がある。16平方mの部屋は子どもたちが使い、19平方mの部屋は夫婦が使っている。いまこの家では手狭だが、工場は目下もう一棟アパートを建設中であり、労組工場委員会は1年以内に新築の三部屋のフラットをイワノフ氏に提供すると約束した。もちろんイワノフ氏は1ルーブルも払わずに入居できる。

以上が第1回分だが、これから先の号でアレクサンドル・イワノフ、奥さんのアンナ、息子のペーチャと娘のカーチャ、犬のステパの生活をくわしく紹介してゆくつもりである。

(さし絵　リュドミラ・ボルズイフ)

読者のページ

新潟県　岩沢　岩雄

改装されてから手頃な大きさになり、内容も一段とわかりやすくなりました。一九六七年にモスクワ郊外の工場へプラントを納めた機会に貴誌を愛読している機械技術者です。

福井県　三田村　久治

始めてお便り差し上げます。小生は48年に訪ソ青年の船にてモスクワ、レニングラードを訪問し、若者の友情連帯の旅を経験しました。以来本誌を知り愛読しております。簡単に本誌についての感想を述べます。いつも全体に調子が固いと思います。見出しについても、内容についても興味をひく題材には至らない様に思います。もっとリラックスした紙面を期待します。それから写真の写りですが、もう少しハッキリ鮮明に紙面に出ないものでしょうか。

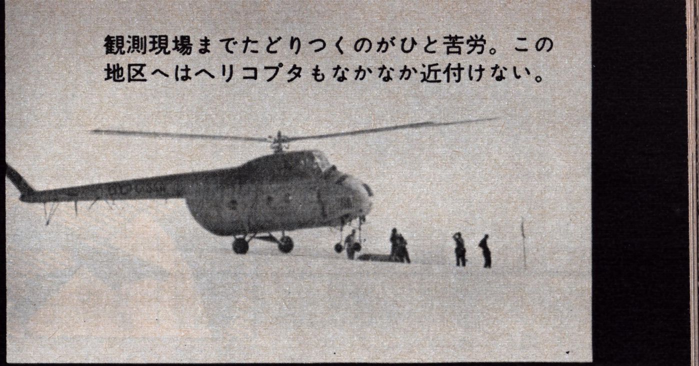
毎号多彩な目次内容ですが、これにロシア料理などの紹介と料理法を連載して下さい。また有名なロシアケーキの紹介を盛り込んでいただけたら大変興味ある誌面になるでしょう。それから有名美術館を訪問して、作品を詳細に紹介してください(連載で)。

神奈川県　朝賀　則善

昨年度からの新装釘は確かによい。持ち歩き易くなり、通勤途上でも読めるようになり、大変便利になった。内容もバラエティに富んでいる。とくに特集記事が多いと魅力がある。教育、文化、地理、各種組織等の解説紹介をより多く望んでいる。記事については、もう一段の努力が欲しい。まだ日本語としてはこなれていない点が多い。ともあれ一九七五年八月に本県社会科部会(高校)の一員としてシベリアを訪れた際のよき思い出が重なって何時も楽しく拝見している。

愛知県　加藤　裕子

10月1日号の「タシケント見聞記」は大変おもしろかったです。かたかった訳語がだんだん良くなって、読みやすくなったと思います。「エルミタージュの裏方たち」も旅行の時の思い出が浮かんで、写真も美しく、なつかしかったです。NHKの「白いバイカル」「青いバイカル」を見て感激しましたので、バイカル湖周辺の人々の大特集を組んで下さい。あれを見てつくづくソ連は広い国だなァと痛感しました。それからモスクワ放送の日本語課の方々の素顔を特集して下さい。



観測現場までたどりつくのがひと苦労。この地区へはヘリコプタもなかなか近付けない。

パミールの氷河観測

地質・鉱物学博士　ボリス・ボーリン
カメラ　V・ショーミン　N・ボルコフ他

通常の氷河観測

地表、地下ともに広く研究調査の手が伸びているこの地球に、まだ思いがけない〝空白部分〟がある。それは氷河である。

ソ連の山岳氷河の総面積は二万一〇〇〇平方km。その約半分を占めるのが〝世界の屋根〟パミール（中央アジア）である。パミールではほかの山系よりも早く常時の観測が始まり、一九三三年、標高四二〇〇mに高山気象観測所「フェドチェンコ氷河」が設立された。この観測所は一九七三年春にメドベジー氷河の〝大移動〟の時間と規模を正確に予報し、危険を知らせた。おかげでごく短期間に対策をとることができて、損害を減らし、死者を一人も出さずにすんだ。

氷河の〝息吹き〟は、広大な地域の天候を左右する。河川の春の増水時の水位や夏季の水位にかんする氷河観測班の正確な予測情報は、水力発電所や灌漑施設の建設、畜産や道路工事の関係者、都市や農村の人々に欠かせないものだ。だから高山のきびしい条件を乗り越え、観測班はたえず活動している。

ここにのせた写真はフェドチェンコ氷河における観測班の日常の活動（積雪の測定、試掘、各種の計測）を紹介したもの。

四〇〇〇mのこの場所に到達するには、馬やヘリコプタを含むあらゆる輸送手段を使っても、約2週間はかかる。ヘリコプタのパイロットは、氷河観測班を乗せて飛ぶ仕事は最高にむずかしいと言う。とくにむずかしいのは着陸だ。

フェドチェンコ氷河は、いろんな点で〝特別だ〟と言える。この氷河はヤズグレムスキー峠付近（標高五三三〇m）に始まり、標高三〇〇〇m地点で終わる。幅は3—4km。地震探査の最近のデータによると、氷河層の厚さは約五〇〇—七〇〇mといわれる。氷河は大量の水分を蓄えている。氷河では雲がつくられ、風、雪あらしが起こり、雨が降る。だからここパミールのごく普通の観測班の普通の作業日ごとに、氷河の理論と歴史に新しいページが書き込まれる。



氷河は生きている。だから毎日測定が必要だ。



危険はいたるところにある。

東京でロシア人の氷河の本が……

氷河はどうして突然流動したり、後退するのか？　気候の大きな変動のせいだろうか？　初めて信頼のおける氷河・気候変動説を唱えたのは、一九二七—三一年にソ連の船舶チャーター関係駐日代表であったエブゲニー・ゲルネトである。彼は一九三〇年在日中に新氷河説をまとめて、『氷の粒』という小冊子にわかりやすくその説を紹介し、東京で五〇〇部出版した。

ゲルネトの仮説は、要するに氷河作用が発生するには、大量の降雨とかなりの低温が必要であるというものである。これらの要因が重なって作用すると、冬に大量の雪が蓄えられ、雨の多い冷たい夏の間も溶けない。そうなると氷河



タジク共和国ホログ市付近ガルム・チャシマの温泉



氷河のはずれに咲く高山植物



80kmに及ぶフェドチェンコ氷河を気象観測所まで歩む荷駄の列



照り輝く太陽、湖岸の花と湖面の氷——南パミールの魅力的な風景。

はどんどん広がる。

みんなの利益のために力を合わせよう

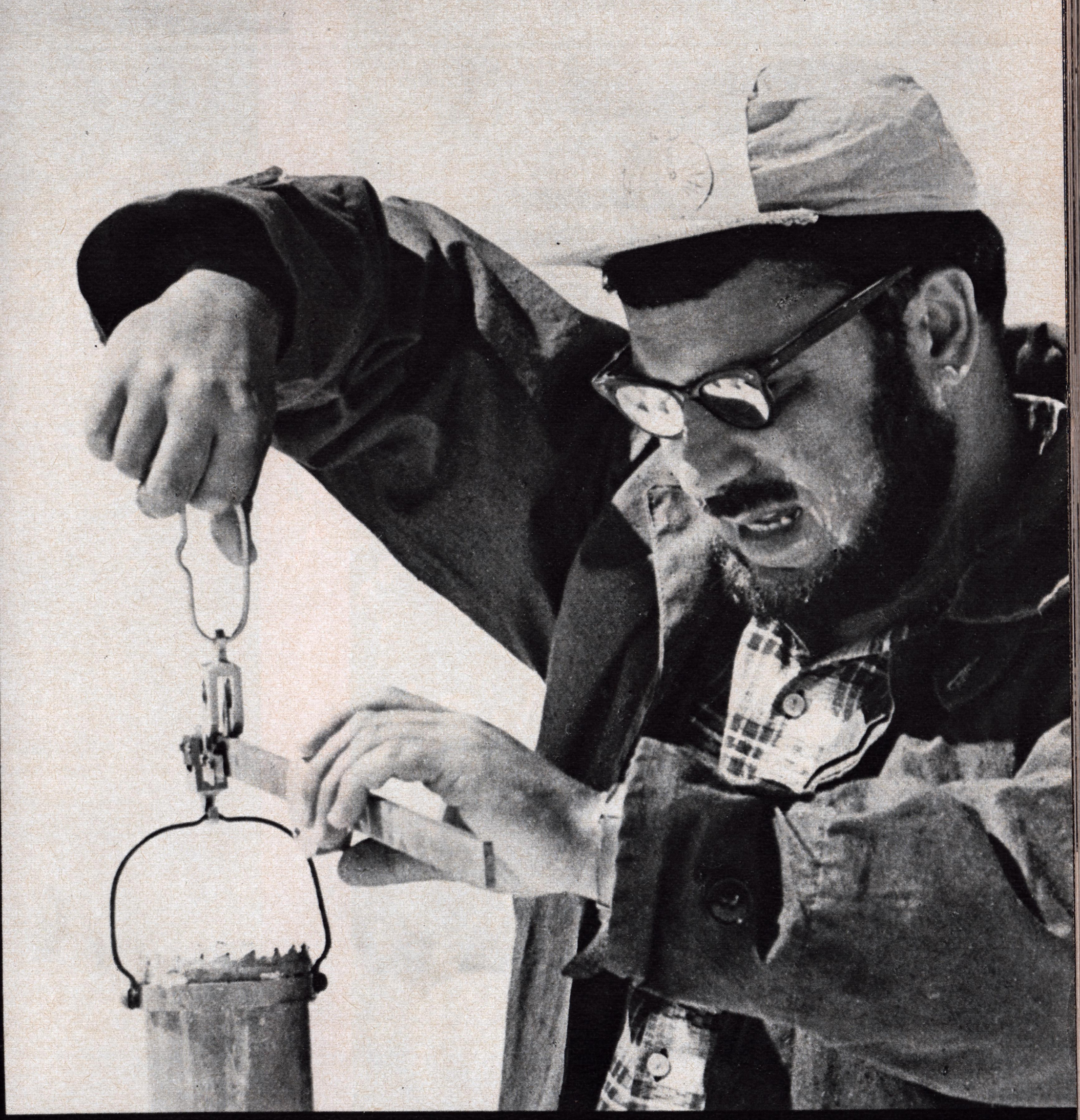
氷河と地球の気候変動の研究調査は、世界の学者が力を合わせてはじめて成果があがる。国際計画にもとづく観測作業には15ヵ国の研究者が参加している。

国際地球観測年（一九五七―一九五八）、国際水文学10年計画（一九六五―一九七四）期間中に氷と雪にかんする多くのデータが入手され、また一九七五年から国際水文学計画にもとづいて広範な観測調査が進められている。

氷河は人類に淡水を確保するうえで大きな役割を果たすことができる。もしかりに全部の氷が溶けると、地球の表面の水の層の厚さはさらに約50mふえる。

氷河の〝大移動〟をきわめて正確に予知し、大災害を未然に防ぐことは、極めて大事である。宇宙からの観測は、地球の氷河のこうした危険地点を発見するのに大いに役立つ。宇宙からの写真でわかったが、パミールのこの地区の平穏だった万年雪は氷河氷となって、谷間へ流動していた。

現在ソ連の氷河学者、地図関係者、その他の学者は、国際分業の形で世界の雪・氷分布図を製作している。この重要な仕事は国際水文学計画へのソ連の大きな貢献となるだろう。



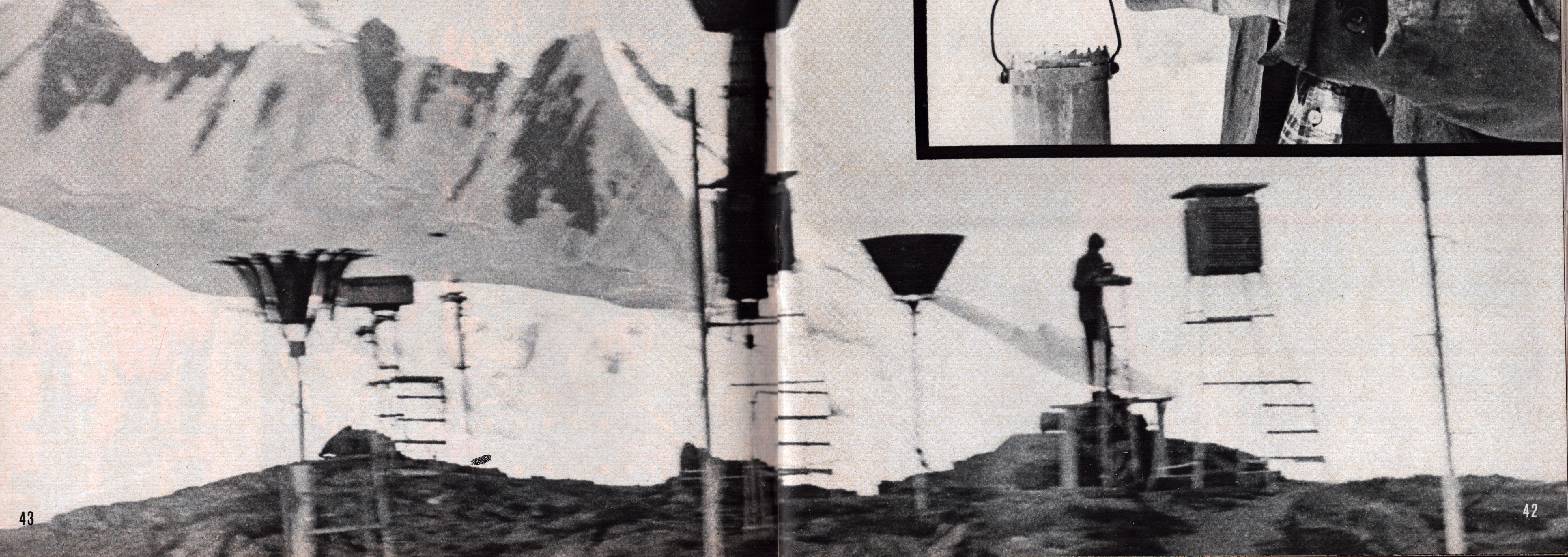
観測班長レフ・アトラス



氷河は地球上の淡水の75％を蓄えている。



入手した資料を分析する観測班



大気のどんな変化をも逃さずチェックする計器

ブリャンスクのガラス工場

カメラ　A・ズイビン

ロシア連邦ヨーロッパ部の中心――ブリャンスク州のスターリ町には、それは見事なガラス製品を作っている工場がある。この工場の名人たちが再現できないような色を自然界に見つけるのはむずかしいだろう。ガラス工たちのかたわらでは、たくさんの窯の中で、さまざまな色や組成のたねガラスが何十種類も煮立っている。ある窯のたねガラスからは、ウラル産の天然の宝石と見分けがつかないほど美しい、7色に輝くガラスができる。別の窯のたねガラスからは、色鮮やかな装飾ガラスや花びんが、さらに別の窯のたねガラスからは、色々な板ガラスが作られる。

これらのガラス製品は、比較的最近まで、手吹き法によって作られていた。しかし工場の専門家たちは、組成が複雑な色ガラスの製造の機械化に成功した。この工場の製品は、交差点の信号、灯台や空港の標識灯、駅の装飾ガラス等にも使われている。

この工場は七〇〇種以上の製品を作っている。たねガラスが煮立っている窯の中は一五〇〇度Cにもなるので、そこで使われる機械設備には、正確な制御・測定装置と、正確な分析データが必要である。しかし、何といっても大きな役割を果たしているのは、従来どおり、ガラス工たちの経験と勘。それは、仕事のやり方を身につける中で、世代から世代へと引き継がれて行く。



名人技が遺憾なく発揮されている装飾ガラス



モダンな形のびん



クラシックなワイングラスとゴブレット



斬新なデザインと色が身上



手吹き法ならではの複雑な成形



しゃれた感じの花びん



道路の信号や空港の標識灯用のガラスもこの工場の製品

●時事評論

ソ連の2週間（一九七八年11月）

『今日のソ連邦』評論員　ミハイル・エフィーモフ



昨年一部の読者から「国内問題」欄のわくを広げてほしいという希望があった。わくを広げれば、ソ連の生活をもっと完全に紹介できると思う。そこでこの1号からこれまでの「国内問題」の欄に代えて時事評論「ソ連の2週間」という欄を設けることにした（編集部）。

モスクワの賓客たち

いまこの記事を書いているのは12月、初雪がモスクワ中を薄化粧した直後だ。つい最近天気予報官が困惑げに、モスクワではこんな暖かい天候は約一〇〇年来のことだとテレビで報道したばかりだし、なんと11月末の気温は10度C近かった！　しかしいまはどうやら自然も正気づき、本来の姿に戻ったようで、雪が降ったし、きびしい冬がやってきた。

しかし私は話をまた11月に戻したい。「また」といったのは、前号で11月のいくつかの出来事をすでにコメントしたからだ。

ここで読者のみなさんといっしょに、11月のカレンダーをもう一度めくり返して、11月中にモスクワが迎えた外国の賓客たちを思い出してみよう。あらかじめ断っておくが、11月はいつもの月よりもはるかに客が多かった。日にちを追ってあげると――

ヤセル・アラファト・パレスチナ解放機構（PLO）議長。

ファリ・ブーメジェン・アルジェリア大統領。

レ・ズアン、ファン・バン・ドン両氏にひきいられたベトナム党・政府代表団。

アブラハム・リビコフ上院議員を団長とする米上院代表団。

P・ヤロシェビッチ・ポーランド人民共和国首相（日本への途中立ち寄る）。

メンギスツ・ハイレ・マリアム・エチオピア臨時軍事評議会議長兼首相。

T・ジフコフ氏を長とするブルガリア、ヤーノシュ・カダル氏を長とするハンガリー、E・ホーネッカー氏を長とするドイツ民主共和国、E・ギエレク氏を長とするポーランド、N・チャウシェスク氏を長とするルーマニア、G・フサーク氏を長とするチェコスロバキアの各党・国家指導者たち。

G・ウビパリプ・ユーゴスラビア副首相。

A・ヘイラル・イラク国防相。

河野洋平・新自由クラブ代表をはじめとする日本国会議員グループ。

T・キョプルリュリル・トルコ商業相。

J・A・ディエス・スペイン貿易観光相。

ざっと挙げただけでも、とても多くの要人が来訪したことがお分かりいただけよう。

11月にはモスクワでソ連・ベトナム、ソ連・エチオピア会談が行われ、いずれも会談の結果、友好・協力条約が締結された。またワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会（首脳）会議が催され、長文の宣言を採択した。この宣言については本号の「ソ連の視点」欄を参照されたい。これらの条約や宣言は、ソ連内外の新聞で大きく取り上げられ、大々的にコメントされたが、それも当然で、9カ国の党、政府の首脳の権威のある署名がされており、最も緊要な国際問題を取り上げているからだ。

ここではこれらの条約や宣言の共通点に注目して見たい。その共通点は三つとも世界平和、国際緊張緩和と信頼のふんい気の強化に役立っていることだ。東南アジアやアフリカの角、あるいは欧州問題であれ、その点変わりはない。ワルシャワ条約加盟諸国はモスクワで、戦争の一切の脅威を取り除く具体的な綱領をまとめ、「人類が永続的な平和と広範な国際協力の条件のもとで21世紀を迎えるよう」、全力をつくすことを誓った。

このようにお客たちは、世界の緊急の問題にたいするそれぞれの立場を調整し、また帝国主義的侵略または覇権主義とのたたかいを擁護、支援してもらうために、モスクワにやってきているのである。今日モスクワは誰も無視することのできない主導的政治センターになっており、それをかさねてはっきり証明しているのは、モスクワをぬきにしては、中東危機をどうにも解決できないでいる事実だ。

L・ブレジネフ、ソ連経済の成果と問題点を語る

ソ連最高会議の第10回会期が始まる二日前の11月27日、ソ連共産党中央委員会総会が開かれた。席上党・国家の首脳レオニード・ブレジネフが綱領的演説を行い、現行5カ年計画（一九七六―一九八〇）の3年間の成果と現在ソ連経済が抱えている最大の問題点をくわしく分析した。

報告者の言葉によると、全体として過去3年間は「よい年だった」。重みのある数字がそれをはっきり裏書きしている。

過去3年間に固定生産フォンド（機械設備、工業用建物、施設、輸送手段など）は一九五〇億ルーブル増えた。この金額は一九六〇年代初めのソ連の生産フォンドの総額にほぼ等しい。3年間だけで七〇〇以上の大工業企業が建設され、小売商業売上高は三〇〇億ルーブル以上増えた。約六五〇万フラットの設備のよい住宅が完成した。いまソ連では1カ月間に人口五〇万の都市に匹敵する量の住宅が完成している。

これらの数字はもちろん、われわれを喜ばしているが、それで、ソ連経済がいま抱えている緊急問題を帳消しにはできない。これらの問題についても党中央委員会総会でくわしく述べられた。

ではその問題とはどんなものだろうか？

まずソ連がいまだに金属、燃料不足に悩んでいることから話を始めよう。鉄鋼や非鉄金属の生産企業増設と生産、石炭・石油の産出の目標は、完全に達成されておらず、また基本建設はあいかわらずネックとなっている（3年間に七〇〇の大企業が新設されたにもかかわらずである）。全体としてソ連の基本建設のテンポはいぜん低い。たとえばナホトカのかん詰めかん工場は着工以来12年間になるが、まだいつ完工するか目鼻がついていない。これなどは悪い例の一つといえよう。

また国民経済全体にかかわる客観的な困難もある。「戦争の後遺症」に再び悩まされる一九八〇年代が、いま容赦なく迫っている。国民経済には何千万という20歳代の者が足りなくなるのだ。それは彼らの祖父の代の人々が対ファシズム戦争で戦死したため、その次の父親の代の人が生まれず、結局そういう父親の代の人が生まれなかったため、その子どもも生まれなかったからだ。

ソ連はその困難な時代にそなえて、あらかじめ準備を進めており、生産のめざましい自動化に望みをつないでいる。とくに機械が労力不足の代用となるところから、機械工業部門の自動化に力が入られる。

一九七八年は豊作で、穀物収穫高は二億三五〇〇万tに達し、これまでの最高を記録した。こんごの課題は、食肉その他の畜産品の大増産である。

このように、どの問題も大きく、困難であるが、そういう問題が停滞や危機から出てきたものではなくて、逆に経済の猛烈な発展にともなって出てきたことは、はっきりしている。これらの問題が具体的に取り上げられ、その発生原因が綿密に分析されている事実から見て、これらのすべての問題はいずれ解決されると断言してよい。

一九七九年はソ連にとってどんな年になるか？

答えは一つ。あらゆる点で前年よりもよくなるに違いない。

11月29日から12月1日まで開かれたソ連最高会議は、ソ連閣僚会議が提出したソ連共産党中央委員会総会承認ずみの一九七九年度ソ連経済・社会発展国家計画案を審議したのち、この計画を法的に承認した。

一九七九年にソ連国民は何をやらねばならないか？　一九七九年の具体的な見通しを知る判断材料となる数字をほんの二、三挙げておこう。

国民所得は一八〇億ルーブル増え（4・3％増）、工業生産高は三三〇億ルーブル余り増える（5・7％増）。このうち生産手段の生産高は5・8％増え、消費財の生産高は5・4％増える。

石油とガス・コンデンセートの産出量は五億九三〇〇万tで、前年比二〇五〇万t増となる。この増加分は主に西シベリア、コミ自治共和国、オレンブルグ州から産出される。

農業総生産高は5・8％増える。

住民一人当たりの実質所得は3・3％増える。

小売商業売上高は前年比4・8％増となる。

総面積一億一二三〇万平方mの住宅が建てられ、これにより一一〇〇万人の居住条件が改善される。五万三五〇〇床分の病院が建設される。

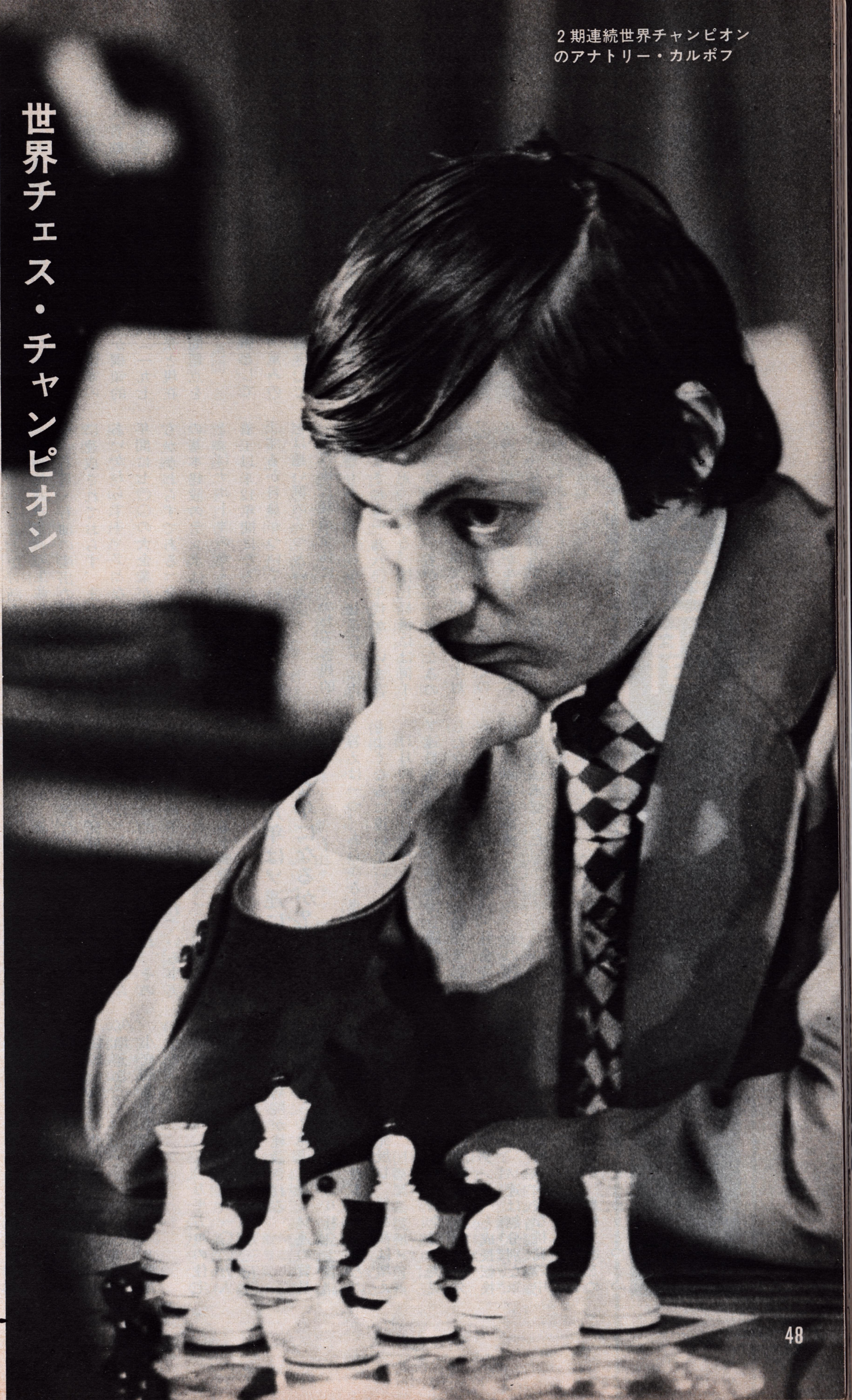
貿易もさらに発達する。ソ連の貿易の大半は、これまでどおり社会主義諸国が占める（61％）。資本主義諸国との貿易は引き続き発展し、貿易額は増える。

もちろん、これらの計画全部を実現するには、まず国際関係の政治的デタントを軍事的なデタントへと成長転換させる必要がある。ソ連は無分別な軍拡競争と軍国主義層の危険な挑発の中止を断固要求している。

とどのつまり良識が、覇権主義をめざし、〝力の政策〟をとろうとつとめているすべての者に、諸国民の声に耳を傾けさせ、もっぱら話し合いの場を通じて現代のさし迫った問題を解決させることになることを、期待してやまない。

世界チェス・チャンピオン

カルポフ、タイトルを防衛



2期連続世界チャンピオンのアナトリー・カルポフ

チェスの世界チャンピオン、ソ連のアナトリー・カルポフ（27歳、レニングラード大学卒）は、このほどフィリピンのバギオ市で行われたタイトル防衛戦で挑戦者のビクトル・コルチノイを6対5のスコアで退け、少なくともあと3年間、引き続き世界チャンピオンの座を占めることになった。3カ月間に両者は32局対戦し（試合規定により、引き分けはスコアに入らない）、体重を数kgずつ減らし、神経をすり減らしたが、勝利の女神は結局、強いだけでなく、より粘り強い者の上にほほえんだのである。

試合は、とくに最初の段階では、きわめて複雑な状況のもとで行われた。上告審判団は相次ぐ抗議を検討しなければならなかったが、そのさいすべてではないが、もめごとの大部分を引き起こしたのはコルチノイ〝チーム〟の方だった。公平を期するために強調するが、こうした状況のもとで私が当時バギオで見たカルポフは、沈着冷静そのものであった。挑戦者側が企てた神経かくらん戦術はむしろ当の挑戦者自身に災いしたようだ。

挑戦者の意外な善戦

カルポフの勝利は多くの専門家によって予言されていた。そのためのあらゆる根拠がそろっていた。チャンピオンはこの5年間連続して、年間世界最優秀チェス選手として〝チェスのオスカー賞〟を授与されていたからである。それにもかかわらず点差が小さいことから分かるように、成功は彼に最高の緊張、創造的思考、忍耐を要求したのである。

なぜチャンピオンは圧倒的優勢をかちとれなかったのか？その理由は、客観的な性格のものや主観的な性格のものを含めて幾つかある。何よりもまずコルチノイは正しく強力なライバルである。バギオのソ連代表団長ビクトル・バトゥリンスキー・ソ連中央チェス・クラブ理事長が私とのインタビューで語ったように、「コルチノイはあらゆる見地から――理論的、肉体的はては工学的見地から入念に試合の準備をした。たとえば彼はオランダから試合のために特別のいすを取り寄せた」面白いことに、4対1のスコアでカルポフがリードした時、同じオランダの会社からチャンピオンに同じいすを無料で提供するとの電報が届いたのである。カルポフはお礼を言ったが、断った。

私が想像するところでは、挑戦者は2対5とリードされた時、もはや事態は絶望的と判断し、気を楽にしたようだ。スポーツでは何が起こるか分からない。意外にもその後の試合で挑戦者は善戦し、スコアを同点にまで持ち込んだ。ここでカルポフは持ち前の根性を発揮する。元世界チャンピオンのミハイル・ターリ（ソ連）は対局前にカルポフについて次のように書いた。「カルポフは生まれつきのスポーツマンだ。決定的瞬間になると、まるで別人のようになり、ふだん見せたことのないようなすばらしい〝プレー〟を見せる」

〝チェスはスポーツ〟

カルポフは実際、きわめて〝スポーツ的〟である。「チェスは科学や芸術であるばかりでなく、スポーツでもある。しかし、最近ではしばしばスポーツ以外の何物でもない」と、カルポフはかつてもらしたことがある。これは決して偶然の言葉ではない。「私はチェスでは今後も、スポーツ的側面がわずかの差で創造的側面に優位を占めると思う」と書いて、カルポフは自分の信念にたいする忠実さを証明した。そして、次のように付け加える。「チェス、とくにその試合における心理学の要素はきわめて重要だ。己を知り、相手への手がかりを見つけ、盤上の具体的な状況のもとで自分だけでなく、相手の知識をも利用する能力を持たなければならない。ある個所では最良の一手を差し控えるかわりに、相手のいやがる局面に追い込んでゆくような能力を持たねばならない。そして将来、チェスではますますこの能力が大きな比重を持つようになるだろう」

棋士としてのカルポフは、天才的なキューバ人カパブランカの棋譜を研究、分析し、吸収して育ち、その後ソ連最初の世界チャンピオン、ミハイル・ボトビンニクの指導を受け、さらにチェスの名コーチで名人位のセミョン・フルマンと長く一緒に研さんを重ねた。

カルポフはロシアの古都ズラトウスト（ウラル）でチェスを学び始め、ついでツーラに移り、15歳ではやくもマスター、19歳で国際グランドマスターになった。世界チャンピオンの栄冠を初めて獲得したのは24歳にもならないときで、このタイトルを取るまでの道は険しく、同国人のレフ・ポルガエフスキー、ボリス・スパスキー、そして先のコルチノイとタイトル挑戦者の権利をめぐって激しい戦いを交えなければならなかった。当時世界チャンピオンだった米国のフィッシャーとの決戦が待っていたが、フィッシャーは戦わずしてタイトルを放棄した。

試合に出るチャンピオン

カルポフは〝試合に出るチャンピオン〟になるという約束をはたすため、この3年近い年月の間に14回大試合に出場し、うち12回1位をとるか、または1位を分け合った。昨年もユーゴスラビアでの〝名人対抗戦〟に出場し、スパスキーと1、2位を分け合った。

日常が息の詰まるほど忙しい棋士生活を送りながらも、アナトリーはチェスだけの生活に閉じこもってはいない。中学校を優等で卒業したあと、大学に入り、ここも優秀な成績で卒業した。彼の卒業論文「余暇と社会主義社会における余暇の経済的意義」（この論文の審査は昨年2月8日に行われた）は高い点数を得た。

カルポフの趣味はスポーツ、読書、そして子どもの時から続いている切手収集だ。彼は国内各地を回り、講演をし、地方のチェス愛好家に助言を与え、多面打ちをやっている。青少年にチェスをPRすることは、コムソモール中央委員たる自分の義務だと見ている。

「もしチェス・オンリーの生活だったら、いまごろはまったくうんざりしているだろう」とカルポフが語ったことがある。ふつうカルポフは1日約3時間をチェスに充てている。そう長い時間ではないが、その時間はチェスに没入したはりつめた時間だ。

カルポフは世界選手権で勝利を収めたが、今後もあくまでも自分の方針に忠実に〝試合に出るチャンピオン〟の座を守るつもりでいる。

青年とコンベヤ

ニコライ・アンドレーエフ

問題と対策

コンベヤをきらう若者たち

コンベヤは若い労働者を追い払っている。これは事実だ。チラスポリ市（モルダビア共和国）の縫製工場のある職場で、私はコンベヤ生産にたいする中学生たち（ここへ見学に来た）の反応を観察した。数片の生地をまたたく間に流行のブラウスに変える女子工員たちの正確な動きには、合理性の美とでも呼ぶべきものがあった。工場は緑に囲まれていた。装飾用植物の茂みには鳥かごがつるされていた。しかしこのすばらしい環境、軽快で、しかも能率が高い作業にもかかわらず、数分間仕事を見学していた女子中学生は友だちの方を向いて同情を込めて言った。「一生こんなことをするの!?」

何事にも創造的な態度をとらなければならないと長年教え込まれて来た、中学校出たての若者の場合を想像してみよう。職長が若者を仕事の部署に連れて行き、簡単な作業の手順を一通りやって見せる。「自分もとうとう仕事に就いた。独立した人間になった」——おそらくこれが最初の反応だろう。だが、一週間、いや一ヵ月過ぎても、若者の一日は毎日、優しい女性アナウンサーの同じ言葉——「コンベヤの速度が決まりました。きょうも楽しく働いて下さい」で始まるのだ。

もし仕事が単調で変化に乏しいなら、一体そこにどんな〝楽しい〟作業があるというのだ。

経営担当者は以前から産業心理学者の勧告に従って、コンベア生産に伴う否定的要因を少しでも減らそうと、いろいろな対策を打ち出している。たとえば、多くの企業では一つの作業班に、ある製品の組み立てを最初から最後まで任せて、労働者が自分の労働の結果を知ることができるようにしている。コンベヤの速度は季節や昼夜、バイオリズムに合わせて定められ、デザイナーは心理的に最大限の快適さを与えるように作業部署のレイアウトをし、職場によってはバックグラウンド・ミュージックが取り入れられている。

一連の措置はある程度効果をもたらした。たとえば社会学的調査が示しているように、これらの措置は婦人たちのあいだでのコンベヤの労働の威信を高めた。しかしそれでも問題は解決されなかった。

レニングラードのある動力機械メーカーの企業長はかつて私に「うちの工場には一〇〇〇人の旋盤工がいるが、タービン・シャフトの加工を任せられるのは、最高の資格をもつ7人の職長しかいない」と語った。当然彼らの賃金は、分工場長がもらっているのとほぼ同額だ。彼らは工場では有名な、影響力の大きな人々で、自己の職業技術によって人が生涯に何を達成することができるかを身をもって示している。しかし、コンベヤ労働ではこういう見通しはまったく立たない。



ボルガ自動車工場の主コンベヤ

コンベヤは一時の腰掛け?

事実上どこの企業でも労働力が不足しているという条件のもとで、コンベヤに新しい現象が生じた。コンベヤの仕事に就く中学卒業生たちの考え方が変わってきたのだ。最終的に職業を選択し、物質的に独立する前に一応就職して、1、2年したら自分の技能を伸ばせるような、自分を創造的人間と感じられるような職場へ転職したいというのが、若者たちの考えだった。彼らにはそうすることがかなり容易だった。すでに述べたように、事実上どこの企業にも働き場所があるからだ。技能労働者にも、若者たちと同じくらい働く場所がある。

17—18歳の若者の間の労働流動性が70%にも達しているが、まさにコンベヤはこの点、大いに〝罪〟がある。

しかし今のところコンベヤを〝廃止する〟ことはできない相談だ。多くの工場ではコンベヤだけが高い生産性と労働の質を保障しうるし、現に保障しているからだ。

活路はどこにあるか?

ボルガ自動車工場の対策

たとえばボルガ自動車工場（略称VAZ、ロシア連邦共和国トリアッチ市にある）ではその活路を発見した。この工場自体、主コンベアで働く若い労働者が絶えず流動するので困っていたのだ。

工場に就職した若者には学習が待っている。

若者は自分の職場を選択する。工場での労働条件について五〇〇〇もの客観的データ、いわば常数を保管している計算センターがこの見習工に出勤記録番号を与えるが、このことは彼を工場の考課システムに自動的に含めたことを意味する。考課システムの数式の条件は、彼の努力、発揮された能力、労働経歴に応じて変わるだけでなく、教育水準に応じても変わる。これらのパラメータに応じたデータの変化に従って、コンピュータは賃金の決定についてだけでなく、特典の提供、たとえば住宅条件の改善、昇進についても勧告する。

当然ながら、人間にたいする評価を最終的に決定するのは機械ではなく、コンピュータの勧告は労働組合や管理部によって修正されるが、少なくとも若者は自分の努力が記録されることを知っている。

次いで新入り工員は工場付属の教育センターに入る。ボルガ自動車工場の発展体系の基礎には、従業員全員の教育と資格向上の計画が組み込まれている。ここの教育センターには職業技術学校、中等専門学校、大学が集まっている。

若者の前に二つの教育水準が開かれている。一つは必須資格、つまりコンベヤに必要な資格である。この資格は職業技術学校でも、職場——実地経験でも得られる。

ボルガ自動車工場では労働は作業班別の労働だけである。賃金もまた作業班別の賃金である。作業班は見習工が自分の仕事に習熟したことを確認すると、再び彼を教育センターに送り、今度は関連職種を身に付けさせる。新しい専門技術は労働者の視野を広げ、賃金を増やす（関連職種の習得にたいしコンベヤで働く労働者には割増賃金が支払われる）。このことは作業班にとっても有利だ。もし仲間が中等専門学校で学び、試験を受けるための有給休暇をとったら、新人がしばらく彼に替わってやることができるからだ。

第2の教育水準というのは夜間大学または中等専門学校のことである。

一般技術教育は若い労働者に前途洋々たる人生を開き、コンベヤ労働を一時の〝腰掛け〟として考えさせる可能性を与えているが、しかしまたコンベヤを甘受させてもいる。少なくとも教育中は。

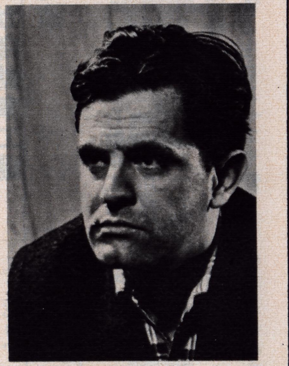
集団全体の賃金がその成員の賃金に左右される作業班制度は、教育を受けることだけを目当てにボルガ自動車工場に入った者がその生産義務にふまじめな態度をとることを許さない。

ボルガ自動車工場で採択された制度はコンベヤ要員の流動性を著しく減らすことができた。一部の青年は絶えず新しい専門職種を習得していることで満足している。専門技術を習得するたびにいつも新しい角度からコンベヤを見直すことができ、不断の技能的向上に満足しているのだ。これらすべてを第一の教育水準がつくっている。

第2の水準の卒業生はコンベヤで定められた期間働いてから——またしても工場に残るが、今度はもう技師や技手としてである。このような専門家の価値は高まっている。彼らが理論を身に付けているだけでなく、〝内部から〟生産を知っているからだ。だからコンベヤが彼らを助けているとさえ言える。

工場心理学者の資料によれば、コンベヤで働く能力がまったくない若者もいる。このような人たちは修理工場や実験所に移されている。

ボルガ自動車工場で初めて採用された制度は他の諸企業にも普及した。今のところ、これは〝コンベヤ病〟に最もよく効く薬であると考えられている。



ファジリ・イスカンデル

（1929年生まれ）

1960年代の初めに、生活の非論理的な、こっけいな側面を、皮肉やユーモアや風刺をこめて暴露した若い作家たちが、ソ連の文壇に登場した。ファジリ・イスカンデルもその一人だった。

イスカンデルは黒海沿岸のアブハジア自治共和国（グルジア）スフミ市で生まれた。中等学校を修了したあと、モスクワへ移り、1954年に文学大学を卒業。はじめ何冊かの詩集を出したが、やがて散文に転じ、そこで本領を発揮することになる。

農民の家庭に生まれたイスカンデルは、幾世紀も自然と結びついて来た、強くて善良な人間の、淡白でおどけた英知を受けついでいる。イスカンデルの世界観とそのリリカルな主人公のこのような特徴は、中編『ヤギ座』や長編『チェゲムのサンドロ』その他、アブハジアの生活や風俗を描いた諸作品にはっきり現れている。

イスカンデルは極端な条件設定、グロテスク、空想とは無縁で、物語はすべて彼自身がよく知っている生活にもとづいている。だから、フィクションは一つもなく、自分の考えや経験、回想を読者と分かち合うために、それを書き留め、注釈しているだけのようにさえ思われる。

〔短編〕発端

ファジリ・イスカンデル
山田　はじめ　訳

ありのままに語ろう。随意の、だからこそ楽しいことについて語ろう。われわれの知人たちの中に見られる、おかしな人間的本性について語ろう。知人たちの奇妙な癖について語るほど楽しいことはない。何しろわれわれは、自分の健全さを気にしながら他人の癖を語り、同時に、自分だってこの種の逸脱はやりかねないと考えている。だが、それで仕方がないとは思っていない。あるいは、それでも仕方ないと思っている？

人間のこっけいな本性の一つは、周囲の人々によって与えられた自分のイメージを、だれもが演じ通そうとすることにある。不平を言う人もいるが、しかし演じ通す。

たとえば、周囲の人々があなたの中に、くそまじめな働き者を見ようとしたとすれば、どんなに抵抗しても、どうにもならない。抵抗することによって、逆に印象を強めてしまう。単純な、くそまじめな働き者の代わりに、頑固な、あるいは怒りっぽい働き者に変わるのが関の山だ。

それでも人間は、周囲から押しつけられたイメージを演じ通す。たとえばこうだ。

私がまだ学校に通っていたころ、あるとき、クラス全員で、海岸の空き地を文化的な休息の場所に変えようと、働いていた。奇妙に思われるかもしれないが、実際に変えたのだ。

みんなで空き地にユーカリの苗を植えた。数年後には、空き地に見事なユーカリの林ができた。

それはともかく、いまでも故郷へ帰ると、ときおり私はユーカリの大木の下へ行って、炎暑の中で休息し、自分が感きわまった総主教になったような気分を味わう。概してユーカリは、成長がひじょうに速い。だから総主教の気分を味わいたかったら、ユーカリを植えて、高い、飾り立てたヨールカのようににぎやかな音のする樹冠を待てばいい。

だが、問題はそこにあるのではない。問題は、私たちが空き地を耕したあの遠い昔の日、子どもたちの一人が、土を運ぶ担架を私がどのように持っているかにみんなの注意を向けさせたことにあった。みんなを監督していた教師も、私の担架の持ち方に注意を向けた。みんなが、私の持ち方に注意を向けた。気ばらしの材料を見つける必要があった。そして、材料は見つけ出された。私は札つきの怠け者のような持ち方をしていたのだ。

これが、溶液から分離した最初の結晶だった。その後は、課せられた方向で最終的に結晶化しつくすために私がいまみずから促している、結晶化の機械的なプロセスが続いた。

いまや、すべてがイメージづくりに作用した。私が数学の口頭試験の番を待って、友人が問題を解いているあいだ、じゃまにならないよう静かに座っていると、みんなは、私がぼんやりしているのではなく、怠けているのだと見なす。

もちろん私は、誤解を改めさせようなどとは試みない。私が教科書やカンニング用のメモを使わずに、思いつくままロシア語の文章体で書けば、それこそ、私の度しがたい怠惰の証拠になるのだった。

他人のイメージをこわさないために、私は当番をサボることにした。これはすっかり有名になって、だれか別の生徒が当番の仕事をやり忘れても、教師たちはクラス全員のはやし声に押されて、私に黒板消しをさせたり、体操用具を運ばせるのだった。もっとも、当時は体操用具がなかったので、別の物を運ばされた。

イメージはさらにふくらんで、私は宿題さえやめなければならなくなった。しかも、事態の先鋭さを維持するために、私はかなりいっしょうけんめい勉強しなければならなかった。

そんなわけで私は毎日、人文系科目の教材の説明が始まるやいなや、机につっ伏して、眠っているふりをした。教師が私の態度に激昂すると、私は気分が悪くなったからだと言った。しかし、置いて行かれたくなかったので、授業はサボらなかった。机に伏せながら、私はありきたりの悪ふざけに逸脱しないように、教師の声を注意深く聴き、それを記憶しようと努めた。新しい教材の説明が終わってもまだ時間が残っていれば、私は進んで次の授業で当ててくれるよう申し出た。



それは教師たちを喜ばせた。彼らの教育者としての自負をくすぐったからだ。自分たちは、生徒が教科書に頼らなくてもすべてをマスターするほど、首尾よく、分かりやすく授業をしている、ということになるからだった。

教師は成績簿の私の欄に良い点をつけて授業を終え、みんなも満足だった。そして私のほかにはだれも、暗記したばかりのことが、たちまち私の頭から抜け落ちてしまうことを知らない。それは、「下ろせ」というレフリーの合図を待ちかねていたように放り出される重量挙げ選手のバーベルと同じだった。

正確にするために語っておかなければならないが、机に伏して眠っているふりをしながら、私はときおり、実際にうとうとしていた。ただ、教師の声だけは聴いていた。ずっとのちになって、言葉というものはそのような方法で学ぶものだということを知った。あるいはそれに近い方法であると言っても、特に不遜だとは思われないだろう。完全に眠り込んでしまった場合のことを言っているのではない。そんなことはめったになかったからだ。

しばらくすると、札つきの怠け者の噂は、校長にまで達した。そして彼はなぜか、半年まえに地理室から消えた望遠鏡は、私が持ち出したのだと断定した。彼がなぜそう決めつけたのかは分からない。恐らく彼は、視覚で距離を省略しようという考えが怠け者を何よりも誘惑したのだ、と考えたのだろう。そのほかには説明がつかない。幸い望遠鏡は発見されたが、私にたいする監視は続けられた。なぜか、私がいたずらをやればいいと期待しているようだった。やがて、私がどんないたずらをやるつもりもなく、それどころか、ひじょうに従順で良心的な怠け者である、ということが明らかになった。そのうえ、怠け者のくせに、私はかなりよく勉強した。

そこで、当時の流行だった集中教育法が私に適用されることになった。この方法の本質は、教師全員が一人のだめな生徒に不意に襲いかかり、その生徒がひるんだすきに、その成績を一挙に模範的なものにしてしまおうというものだ。

この方法は、他のだめな生徒たちが、模範生になった一人のだめな生徒をうらやましがって、ユーカリの木立ちのように、われもわれもと伸びることを目ざしていた。

効果は、意表をつく集中攻

撃によって達成された。そうでなかったら、生徒は逆に逃げてしまうか、この方法そのものを台無しにするだろう。

概して、試みは成功した。たたき直された怠け者は、面目丸つぶれの照れ笑いを浮かべながら、優等生の仲間入りをして行った。

そのさい、教師たちは必ずしもいい意味での羨望に駆られてではなく、互いに張り合って、ねたまし気に成績簿を見ながら怠け者の成長を見守っていたが、これはもちろん、どの教師も、自分の担当科目のところだけ成績が落ち込んだりしないようにと、注意していたのだ。

私にたいする攻撃があまりにも激しすぎたのか、私の能力の限界が考慮されなかったのか、いずれにせよ私にたいする試みの成果が話題になり始めたときには、私は優等生メダルの候補になっていた。

「あなたは銀メダルだわ」と、あるときクラス担任が私の目を心配そうにのぞき込みながら言った。

それは、不可触賤民の、小さな、自尊心に燃える集団だった。教師たちでさえ、メダル候補には一目置いていた。

何しろ彼らは、学校の名誉を守る使命を担っていたからだ。メダル候補に手を振り上げることは、取りも直さず学校の名誉を打撃にさらすことと同じだった。

メダル候補はそれぞれ自力で、何らかの主要科目ですぐれた成績を収めており、その他の科目でも必要な水準に達していた。私をメダル候補に加えることは、さしあたり集中教育法の静かな凱旋にすぎなかった。

卒業試験には、もっとも物分かりのいい教師たちが割当てられた。教師たちは私たちのところへやって来て、しばしば受験票の内容説明にかこつけて、こっそり、簡潔に、解答の内容を教えてくれた。まさに、それは必要なことだった。札つきの怠け者を演じていたときに磨かれていた猛烈な暗記力は、予備措置を講じてくれた教師のありがたいささやきを私が試験委員会の机まで、まちがわずに持って行くのに役立った。私はただそれを声に出して言うだけでよかった。私はそれを、嘘いつわりない心情を込めて実行した。

すべては、私が予定されていた銀メダルの代わりに金メダルをもらうことによって終わった。それというのも、金メダル候補の一人が途中でしくじって、脱落してしまったからだ。

実際には、その子はひじょうに出来る生徒だった。だが、彼は作文がへたで、おまけに母親はひどく頑固だった。彼女は父母委員で、だれにも受け入れがたい、しかし議題にはのぼせなければならない無意味な提案ばかり出して、みんなをうんざりさせていた。彼女は、メダル候補生たちに特別食を食べさせることさえ提案した。しかし父母委員たちは、多数決でこの有害な提案をしりぞけた。

そんなわけで、この少年は最初の試験に備えるにあたって、どんな問題が出てもいいように、ロシア文学にかんするもっとも出る確率の高いテーマを20選んで、作文を用意しておいた。彼はそれぞれの作文を極小の豆本にして、まちがえないようにそれぞれの表紙に、標題と解題をつけておいた。20冊の豆本は、片手の手のひらに収まってしまうほどだった。

彼は作文で大成功を収めた。しかし疲れすぎていたのだろう。そのあとの試験では、正確に答えはしたものの、声が小さすぎた。さらに肝心なことに、しばしば考え込んで、試験官が分かったとうなずいているのに、とつぜん、すでに答えたことをむし返して、言い方を訂正したりするのだった。それはもはや救いがたかった。

試験官か試験委員長が回答に同意してうなずいたら、それは先へ進めということであって、すでに答えたことをむし返したりしてはいけないのだ。なぜなら、試験官をいささか奇妙な立場に立たせてしまうからだ。

試験官が最初の回答には首をたてに振るわけにはいかず、生徒が自分の答えを訂正するのを待っていなければならないときもある。もちろん、必ずしも訂正しなくてもいい。試験官なり試験委員長なりがうなずいたのは、彼らがその回答をそれ以上正確に表現するのは無理だと判断したからだ、と考えてもいいし、そこに何か無定見なものがある、つまり、適当に相づちを打っているのかもしれない、と考えることさえできる。

自分では気づかないまま、その生徒は試験委員会を侮辱した。よくまあこんなひどい回答で試験が受けられたものだ、と思われてしまったのだ。

結局、彼は長いことメダル候補の座にあって、うぬぼれてしまったと見なされ、最後の二つの試験では、評価を1ランク下げられてしまった。

彼の代わりに私が金メダルをもらい、卒業パーティーでは、彼の母親からどやしつけられた。

その年、私は勉強するためにモスクワへ行くことになり、まだ実物を見たことのないメダルは、数カ月後にママの職場に届けられた。

だから私は目録だけをお金といっしょにポケットにしまって、汽車に乗り、モスクワへ出発した。当時、私たちのところからモスクワまで、汽車で3昼夜かかった。だから将来の専門を選択するのに、時間は十分あった。私は大学の哲学部を決めていた。将来を決定したのは、次のような事情だった。

その2年ほどまえ、私はある少年と本を交換した。私は彼にコナン・ドイルの『シャーロック・ホームズの冒険』



をやり、彼は私にヘーゲル全集の端本の一巻——『美学講義』をくれた。私はすでにヘーゲルが天才的な哲学者であることを知っていた。それが、遠い昔、私がこの本をくれと頼んだ大きな根拠だった。

当時まだ私は、ヘーゲルの著書が難解だとは知らなかったので、ほとんどすべてを理解しながら読んだ。長たらしい、意味の分からない文章に出くわすと、私はそれをためらわずに飛ばして読んだ。そんなものがなくても、すべてが理解できたからだ。のちに別の大学で勉強するようになって、私はヘーゲルには合理的な萌芽のほかに、観念論が少なからず散りばめられていることを知った。私は、自分が飛ばした文章にこそ、多分に観念論が含まれていたと思い当たった。

私は何の不安を味わうこともなく、大学へやって来た。階段を登り、紙の矢印をたどりながら、小さな机が並んでいて、そこにさまざまな人々——中には何人かの娘たちさえ座っている部屋に入った。それぞれの机の上には、学部を示した標示が載っていた。机のまわりには学生たちが群らがって、書類の提出をまえに、気をもんだり、ためらったりしていた。部屋には、学生たちのざわめき声と汗のにおいが立ち込めていた。

『哲学部』と書かれた机には、白いシャツの袖をいかめしくまくり上げた、かなり年輩の男性が座っていた。この机の近くにはだれもいなかったので、私はまっしぐらに、哲学的懐疑主義によって生み出されたその空間を横切った。

私は机に近づいた。男性は身動きもせずに私の方を見た。

「どこから来たのかね?」と彼は哲学的勝利に疲れた声でたずねた。

私は大体そのような質問を予想していたので、用意しておいた会話にとりかかった。

「チェゲムからです」と私は、正確に話そうと努めながら、アクセントをつけて答えた。

私はできるだけ田舎めいていた方が相手が喜ぶだろうと、自分の出身地をわざと市とは言わずに、村と言った。ロモ

ノーソフの名を冠した大学は、そのような出身者を特に喜ぶはずだと考えていたからだ。

「どんな村なんだね？」と彼は、私が書類を机の上に置こうとするのを、やっと見分けがつくほどの手の動きで制止しながらたずねた。

「チェゲムは、アブハジアの山の高所にある村です」と私はていねいに説明した。

いまのところ、すべては用意しておいた会話のとおりに進んでいた。私が田舎出なら喜ぶだろうという予想以外はすべて。しかし私は、見せかけのこの冷たいあしらいに狼狽してはいけないと決心した。だから、チェゲムがどんなに高い山の中にあるかを強調しつづけた。

「アブハジアはアジャリアかね？」と彼はうかつな質問をした。なにしろ、いまや彼の注意は、書類を机に置こうとする私のしばしばの試みを折よく制止するために、書類を持った私の手に集中されていたからだ。

「アブハジアはアブハジアです」胸を張って、しかし尊大にならぬよう私は答えた。そして再び、書類を差し出そうとした。

「ここの試験がどんなものかご存知かね？」　彼は再び質問で私の試みを封じた。

「私はメダルをもらいました」と、私は得たりとばかり答え、少し間を置いてつけ加えた——「金メダルです」

彼は、ここにはメダルを受けた者がたくさん来る、と言って、いくらか疲れたように書類を繰り、引き出しを動かし始めた。メダリストたちの膨大な名簿を探すか、たんに時間をかせごうとしていたのだろう。

「ここでは、授業はロシア語でしか行われないということをご存知ですか？」と彼は、書類を繰るのをやめて、とつぜん切り出した。

「私はロシア語の学校を卒業しました」私は気取られないようにアクセントを整えながら言った。「よろしかったら、詩を朗読しましょうか？」

「それなら、文学部へ行ったらいい！」　彼はうれしそうに叫んで、むこうの机をアゴで示した。

「いいえ、私は哲学部志望です」と私はくい下がった。

相手はがっかりした。私は書類を机の上に置いてもいいことを理解した。

「聞いて来ましょう」と言うと、彼は私の書類を机の上に投げ出して、立ち上がった。

彼が姿を消すや、私は書類をつかんで、大学をあとにした。腹が立った。

同じ日、私はモスクワへ来る途中で同じ車両の女の子がしきりにほめていた図書館大学へ入学した。

あの大学の年輩の男性が、私には哲学部に入る力がないとしきりに納得させようとしたのにたいして、こちらの大学では、逆に、入試委員の一人が、私の書類をふりまわして、この大学のためには成績がよすぎる、ニセ物ではないか、と驚いた。彼はほかの書類もたんねんに調べ、私の意図を察し、いくらか同情さえするかのように私の目をのぞき込んで、同情するからそれに答えて、せめて本心を明かしてくれと言った。私は入学の意図を明かさなかった。その委員はどこかへ出て行ったが、やがてもどって来て、重く息をつくと、席に座った。私は支払いすぎたと感じて悲しくなった。しかし、差額をどう回収したらいいか分からなかった。

「よろしい、入学を認めます」とその人は言った。私をそのまま民警につき出すわけにはいかないと悩んでいる様子もなく、私が帰ってから書類の真偽を確かめる時間がたっぷりあることを喜んでいるふうでもなかった。

このすばらしい大学は当時、いまほど有名ではなかったので、私は入学者の中で最初のメダリストのようだった。図書館大学は現在、文化大学と改名され、卒業生たちも社会で活躍している。このことはいま一度、看板を適宜に替えることがいかに重要かを思い出させる。

この大学で3年間勉強したのち、私は他人の本を分類する仕事よりも、自分で本を書いた方が簡単で、儲けも多いと思いつき、文学大学に移って、作家の仕事を勉強した。そこを卒業して、人間の魂の技師としての中級の技能資格を取り、もろくて重いドームを崩壊させないように、用心深く文学に穴をあけ始めた。

初めて見るモスクワは、無数の写真やニュース映画で見たのとそっくりだった。私は郊外が美しいと思った。ただ山が全然ないので、ときおり心細い感じがした。平坦な空間ばかりだと、なぜか背中が疲れた。ときには、山にもたれたり、その陰に隠れたりしたかった。

モスクワっ子たちはその善良さと素朴さで私を喜ばせた。あとで分かったことだが、私もまた彼らには素朴に思われた。そんなわけで、すぐに気が合った。

そのほかにも私は、モスクワっ子たちが、ふだんでも、私たちよりたくさん食べることに気がついた。彼らはそれを、持ち前の素朴さで、きみたちはぼくたちよりも野菜類をずっとたくさん食べるからさ、と正当化していた。

いまでも理解できないモスクワっ子たちの特徴の一つは、彼らがつねに、天気にたいして不思議なまでに関心を持っていることだ。知人たちといっしょにお茶を飲みながら、モスクワっ子たちの快い会話を聴いている。壁時計が時を刻み、ラジオがしゃべっている。しかし、だれもそれを聴いていないし、なぜかスイッチを切ろうともしない。

「静かに！」と、とつぜんだれかが身をふるわせ、ラジオの方に顔を向ける。「天気予報だよ」

みんな息を殺して、翌日予報が外れたときの証拠をつかんでおくために、ラジオを聴く。初めのうち、この〝静かに！〟という声を聞くと、戦争か、何かそれに劣らず破局的なものが始まるのではないかと思って、身ぶるいしたものだ。やがて私は、みんなが特別な、前代未聞なほど快い天気を期待しているのだな、と考えた。そして間もなく、みんなが期待しているのは、前代未聞の快い天気でもなさそうだ、ということに気づいた。それでは何なのか？

何百万人ものモスクワっ子が、朝から狩りや野良仕事に出かける、と考えてもいい。ふつうの職場では、だれの頭上にも屋根があるからだ。天気にたいするこのようなむなしい、たえず気を使わなければならない消耗的な関心を、雨が降ったらトロリーバスか地下鉄まで走らなければならないということで説明できないだろうか？　これは、大都市の住人にとってはかなり奇妙で、似つかわしくない、と言わざるをえない。

数年まえ私がモスクワへ移ったのも、まさに天気にたいするモスクワっ子の関心の真の原因を研究するのが目的だった。何しろ私の真の使命は、それを発見、究明することだった。

モスクワっ子たちにいささかの疑念も起こさせず、私が居合わせても天気にたいする神秘的な関心を自由に発揮してもらうために、私もまた、天気に関心があるふりをした。

「で、ラジオじゃ何と予報していますか？　東の風？」

「いや」とモスクワっ子たちはうれしそうに答える。「ごく弱い南西の風だって」

「ごく弱いなら、悪くないね」

私は観察を続ける。なぜなら、あらゆる発見は、根気と観察力を必要とするからだ。だが、発見したり発明したりするためには、生活費をかせがなければならない。だから私は書いている。

ところが、うまく行かないものだ。読者は私に、ユーモア作家の役割を強要し始める。そして私も、不本意ながらその役を演じているのだ。結局は私がこっけいなものを書き始めるだろうと期待している奥ゆかしい忍耐の表情を浮かべた読者の顔を見るにつけ、私はまじめなものに取り組まなければならないと考える。

私はがんばる。しかし、奥ゆかしい忍耐のこの表情は、やはり私をくじけさせる。私は途中で調子を変え、あとでもっとこっけい味を出すためにわざとまじめなことから始めた、というふりをする。

概して私は、描かれている出来事の参加者自身が思いつくままに行動し、私は脇にいて、ただそれを眺めているだけにしたいので、叙情的な主人公が一切いないような作品を書きたいと思っている。

しかし、まだそれに成功していないと思う。完全に信頼していないからだ。なぜなら、ある人に思いつくまま行動せよと言うとき、私たちは、私たちや周囲の人々にとって都合のいいことを彼がやるだろうと考えているからだ。そして、その都合のいいことを彼が、私たちに指示されずにやったとき、それはもっと都合のいいものになる。

ところが、そう行動してくれると信頼されるような人間は、人生に長じていなければならない。そうでなければ、不都合な愚行をやらかすか、もっと悪い場合には、何もしないで、消沈した無為にとどまってしまうだろう。

そこで、自分の筋立てに沿って進み、主人公たちを監視し、自分自身の勇気を示して彼らを元気づけるよう努力しなければならない。

「元気を出して、仲間たち！」

家にいない日を除けば毎日、私は部屋に閉じこもって、小さなくせに大食らいのタイプライターに紙をセットして、書く。

しばしばタイプライターは、何度か元気なくはぜては、長いこと黙り込んでしまう。家人は私の仕事のための条件を作り出そうと努力しているふりをし、私は仕事をしているふりをする。実際にはその間、私は何かを考案したり、タイプライターの上にかがみ込んで、別の部屋にある電話に聴き耳を立てている。この地方では農家のブタもこのように頭を垂れ、実のなる木の下に立って、実が落ちたら早速駆けつけようと、落ちる音に聴き耳を立てている。

つまりこうなのだ。私の娘もまた電話に聴き耳を立てていて、私より早く電話に駆けつけると、受話器を拳でたたいて、上手にそれを切ってしまうのだ。彼女はそれを、概して、まったく無意味ではない遊びだと考えている。

自分の多くの発見について私は、その秘められた性質上、敵対的な陣営が存在するいま、当然のことながら語るわけにはいかない。しかし私には、一連の貴重な観察があり、それをみなさんと分かち合う用意がある。私は、すばらしいユーモアを身につけるためには、極度のペシミズムにまで行き着いて、真っ暗な深淵をのぞき込み、そこに何もないことを確信して、静かにもどって来る必要があると思う。その帰路に残された痕跡こそ、真のユーモアになるだろう。

こっけいなものは、一つの、ささやかかもしれないが、争う余地のない長所を持っている。それは、つねに正しいということだ。それだけではない。こっけいなものは、それが正しいからこっけいなのだ。別の言い方をすれば、正しいものはつねにこっけいとは限らないが、こっけいなものはつねに正しいのだ。これ以上疑わしい結論に行きつかないために、このかなり疑わしい警句をもって、ピリオドとしよう。

（さし絵　ユーリー・ウラジーミロフ）

文化と芸術

工芸に打ち込む鉄鋼労働者たち

カメラ　Y・アブラモチキン

1　一万人の労働者を抱えるルスタビ製鉄所の労働時間は終わった。従業員の約3分の1は青年。学校、趣味サークル、スポーツへと人々は散る。

2　「オピザリ」スタジオには市内の労働者や職員——工芸愛好家が集まってくる。写真はこのスタジオの中核になっている製鉄所労働者たち。





グルジア共和国のルスタビ市（首都トビリシの南東27km）は、大製鉄所を中心とした人口約一〇万の工業都市。ここの鉄鋼労働者宮殿にアマチュア工芸スタジオが開設されたのは6年前の秋だが、伝統の金属打ち出し作品などスタジオ員たちの活躍はめざましい。中には美術大学への進学を計画している青年もいる。

明るい感じの色の木のドアに趣向を凝らした木の根細工の取っ手が付いている。ドアには鍛冶工の姿を打ち出した小さな金属細工がはめ込んである。その浮き彫りにしてある鍛冶工が装飾・応用芸術スタジオ「オピザリ」の標章である。一歩中へ入ると、異様な光景が目に入る。広く明るい部屋いっぱいに金属を打つハンマの音がこだましており、どっしりしたテーブルのまわりに、ウサギの皮で覆った木の腰掛けに金属細工師たちが座っている。ちょっと離れた小机には道具類、金属板、輪郭を整えた素材、スケッチがおいてある。麻布をはった壁には一面このスタジオの面々がつくった打ち出し金属細工の飾り板、木彫り細工、ゴブラン織物が飾り付けられている。

……グルジアのルスタビ市のペールブイエ・メタルルギ通りのアパートの住人たちは、夜ごとバルコニーの一つから響くリズミカルな音をたびたび耳にする。ユーリー・ロラーゼさんがモスクワの展覧会に出す金属の打ち出し細工をつくっているのだ。



スタジオの誕生

ユーリー・ロラーゼは製鉄所の技師で、最近製鉄所の美術工芸評議会の議長に選ばれた。ユーリーがグルジア共和国の工芸作品展に入賞したことをみんな知っていたからだ。しかし彼はすばらしい組織者でもあった。彼の指導で、一九七二年秋に鉄鋼労働者宮殿に装飾・応用芸術スタジオ「オピザリ」が開設された。オピザリという名称は、12世紀末のグルジア金属打ち出し細工（チェカンカ）の創始者ベック・オピザリの名からとったものだ。そして早くもその翌年このスタジオは、モスクワのソ連国民経済成果博の民芸祭でグランプリを獲得した。

いまスタジオ員は40名で、10名がいわば通信教育生である。いろいろな理由で定期的に授業に通えないからだ。

ユーリーは講師にその道の通を招いた。講義は美術史やグルジア金属打ち出し細工、その起こりと伝説などから始まった。

民芸や建築に通じた製鉄所中央実験所副所長のジュムベル・ゴギチャシビリ技師も、ユーリーを助け、スタジオで座談会を開いたり、古代装飾模様を探したり、テーマ別の飾り板の題材を考えたりしている。

製鉄所はスタジオ員に銅板や薄い金属板を支給し、また必要な道具や設備をつくった。

このスタジオでレッスンを受けているのは、金属打ち出し細工をやる人のほか、木彫りの愛好家たちである。製作所の鋼管工場のオペレータ、グリゴリー・ムトビンは、子どものころから木工細工に打ち込んできた。シベリアの農村に住んでいたころ父親から農具や家具などのつくり方を教わり、出来上がったものにノミを入れて装飾を施した。グリゴリーがスタジオ員になったのは、ここで学べば、木彫りの腕があがると思ったからだ。

工場新聞『メタルールグ』（鉄鋼労働者）の編集員ツイナ・キクナーゼ、消防監視員ベーラ・ベロウーソワの二人は、このスタジオで手織りを習い始め、みごとな腕になった。すでにゴブラン織りの織物を何枚か織り上げた。

活発な社会活動

スタジオはここで制作された優秀作品90点以上を市の公共施設や製鉄所に贈った。

製鉄所の製品の包装用品にしるされている商品マーク、製鉄所労働者の標章入りのバッジ、成績優秀者や賓客に渡される記念メダルなども、スタジオの作品である。

製鉄所の工場食堂やビュッフェの内装、飾り板、照明具、家具なども、スタジオ員たちの汗の結晶だ。

いまスタジオの工芸家たちは、市の青年クラブ「アレグロ」の建築、内装工事に参加している。

スタジオ員たちの仲は実によく、和気あいあいだ。

ここの工芸家は、真の美術家になるには、〝古典的な課目〟を身につけなければだめだというので、まず絵画や彫刻の基礎から勉強し始めている。

こうして教育、指導活動の実績が徐







3　スタジオの指導役ユーリー・ロラーゼとその作品——鍛冶工の姿を打ち出したスタジオの標章。ロラーゼの本職は製鉄所の技師。

4　ゴブラン織りの技術を学んだ消防監視員ベーラ・ベロウーソワ。目下、ケーノバ祭（仮面行列でにぎわう）用のタペストリーを制作中。

5　おとぎ話の木の精〝デワ〟を彫る製鉄所のオペレータ、G・ムトビン。スタジオ開設以来のメンバーだ。

6　ユーリー・ロラーゼは今『火の職業の人々』シリーズの『金属工』の制作に挑んでいる。このシリーズの作品はすでに各地の展覧会で賞を受けている。





7　ジバリ（グルジア西部）、ムツヘタ（トビリシ北部）の古寺院周辺は、スタジオ員たちの絶好の写生場所だ。

8　製鉄所の各工場食堂の内装はスタジオ員たちが工夫をこらしている。最近オープンしたこのビュッフェもスタジオ員が内装を担当。

徐に積まれ、スタジオの評判も広まっている。ソ連の多くの都市から金属打ち出し細工の愛好家たちがスタジオに手紙を寄せ、この細工の技術などについて助言を求めてきている。

プロをめざす人も

ルスタビのアマチュア工芸家たちが証明しているとおり、金属細工の題材や手法はそれこそ無尽蔵である。彼らは新しいテーマを次々に開拓し、それぞれの作品の内容にふさわしい表現手段を見付けている。それは鉄鋼労働者の労働をたたえるものであったり、グルジアの民話の有名な場面であったり、現代を題材にするものなどさまざまだ。

成功に力を得た一部のスタジオ員は、美術学校に入ろうと考えている。たとえば製鉄所のキビ・アタネリシビリとミハイル・デニソフ、ルスタビ温室農場の労働者ニコライ・コブラーゼは、トビリシの美術大学に入学するつもりだ。

しかし、肝心なのは、もちろんこの趣味を第2の職業にすることではなく、ほかのきつい労働にたずさわっている人々が芸術なしに生きてはゆけないことだ。たえず芸術に接していれば、その人々は精神的に豊かになり、自分の本職に力を入れる元気も湧いてくるのである。

ソ連の視点

緊張緩和と軍拡抑圧に全力を

——ワルシャワ条約諸国の呼びかけ

APN通信政治評論員
スパルターク・ベグロフ

昨年11月22、23の両日モスクワで開かれたワルシャワ条約加盟諸国政治諮問委員会会議には、ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、ルーマニア、ソ連、チェコスロバキア7ヵ国の党、政府首脳が参加し、国際世論やマスコミの注目を集めた。

平和と軍縮にたいする配慮

この会議で開会のあいさつを述べたレオニード・ブレジネフは「政治諮問委員会に期待されているのは、緊張緩和の深化や全欧州諸国間——欧州諸国だけではない——の協力の改善に、あらたに強い拍車をかけることである。この期待にこたえるために全力をつくそう」と語った。

全会一致採択された宣言が発表されたいま、会議が諸国民の期待にこたえた、とはっきり言い切れる。

会議は欧州情勢の緊急問題を検討し、国際情勢全体の若干の問題について意見を交換した。とくに討議の中心となったのは、緊張緩和と軍縮の動きを進展させるためのこんごの措置である。

情勢の評価、結論および提案を盛り込んだ7ヵ国の宣言は、国連の公式文書として配布され、欧州安保協力会議の全参加国の政府に通知された。

会議参加諸国の意見によると、現代の国際生活の重要な問題は、軍縮競争の停止と軍縮へ断固転換する課題である。この目的を遂げるために、ワルシャワ条約加盟諸国はさまざまなイニシアチブをまとめて出した。

最も緊要な問題

さてその点での最も緊急な課題は、あらゆる種類の核兵器の生産を停止し、最終的には完全に廃絶する問題について交渉に着手することである。これと平行して核兵器の使用の永久禁止をかちとり、各国が互いに武力を行使することをやめさせなければならない。核軍縮を促進する重要措置の中で最も重要なのは、モスクワ会議参加諸国の意見によると、SALTIIを早急に妥結させ、あらたな攻撃戦略兵器削減協定の締結へと移ることで、これには他の核保有国も合流すべきだ。

会議では軍事費、まず第一に大きな経済力と軍事力をもつ諸国の軍事予算を削減する問題も、あらためて大きく打ち出された。

ワルシャワ条約諸国は、核実験の全面完全禁止、核非拡散体制の強化からインド洋における軍事行動の制限とそれに続く縮小にいたるまで、世界の軍事対決のレベルを低下させるすべての措置を重視している。

緊張緩和と欧州問題

さきの課題に照らしてモスクワ会議では、欧州の軍事的緊張緩和と軍縮の緊急問題に特別の注意を向けた。会議参加者はウィーンの中欧兵力軍備削減交渉の成功を百方手を尽くして促進する意図を再確認し、これに関連した最近の大きな努力——一九七八年6月8日付けの提案を指摘した。この提案は、削減地帯に含まれるNATO加盟諸国とワルシャワ条約加盟諸国の兵力を同等にするとともに、そのレベルを現在よりもずっと下げることを重点において、現在討議中のすべての問題を包括している。相手側の回答も、これと同じ建設的精神に貫かれたものでなければならないと、ワルシャワ条約諸国は指摘している。そうであってこそはじめて交渉は前進する。その場合、さしあたって交渉の対象とはなっていないが、現在双方の不安のタネとなっている双方の欧州における軍事力の構成要素を制限、縮小する問題をも、交渉範囲に含める用意があるむねをワルシャワ条約諸国は表明している。

各国の努力の統一のこと

ワルシャワ条約諸国は、現在進められている交渉を重視し、この交渉を妥結にこぎつける努力をすすめるとともに、どの国の安全にも損害を与えないという原則の厳守にもとづいて制限または縮小する用意のないような種類の軍備は、一つもないと声明した。ワルシャワ条約諸国は北大西洋条約機構の解散と同時に、ワルシャワ条約機構を解散する用意があり、その第一歩として、まず軍事行動の相互削減から始め、双方の軍事機構を廃止する用意があることを確認した。

7ヵ国首脳は軍縮の現状と見通しの分析にあたって、正当にも西側の軍国主義層の軍拡あおり立ての行動がもたらす否定的結果に、憂慮の念を表明した。その一例として、ただでさえ膨大な軍事支出をさらに大幅に増額するというNATOワシントン会議の決定を挙げることができる。軍国熱をあおり立てている張本人は、社会主義諸国や世界のその他の諸国に対するNATOの優位をあてこんでいる勢力にほかならない。この道を今後も進むなら、それは人類が受け入れることのできる唯一の立場——核戦争の防止と軍縮——を閉ざしてしまうことになる。諸国民は理性に導かれるこの事業で、各国が努力を統一することを切望している。しかし、この方向での決定的転換は、諸国民、諸国家自身の行動意欲が、どれほど明確に表明されるかに、少なからず左右される。

ワルシャワ条約諸国の提案

ワルシャワ条約諸国の宣言に定式化された行動綱領は、次のような具体的な諸目標の達成のため特別の努力を払うよう、広範な国際世論と諸国政府に提案している。

——あらゆる種類の核兵器を各国の兵器庫から取り除き、核エネルギーをもっぱら平和目的にのみ向けるため、ごく近いうちにソ米英仏中の核保有5ヵ国の交渉を行う。

——最も強大な軍事力と経済力をもつ諸国、まず安保常任理事国5ヵ国の間で、さしあたり今後3年間、それぞれの軍事予算を一定の比率あるいは同等の額だけ減らすという合意を早急に達成する。

——主要方向での軍拡競争の制限および停止について、いま行われている交渉を早急に妥結させる。

——欧州の軍事的緊張緩和の事業を断固推進し、欧州大陸での軍事対決のレベルを下げる有効な措置をとる。

モスクワ会議参加者は、機の熟した軍縮問題を解決するには、各国間の信頼を高めなければならぬという点をもはっきり理解していた。しかし、このような信頼は、すべての当事者がその意図をはっきり示さなければ確立できない。ワルシャワ条約諸国の意図は、モスクワ会議の宣言の中に、十分はっきりと定式化されている。

モスクワ宣言は軍拡競争抑止の緊急課題をもれなく全面的に含み、軍縮分野での実際の前進によって緊張緩和を強化発展させることを説得力をもって提案している。国際問題の評論家もこの点を正しく評価しないわけにはいくまい。

トピックス*

オットセイの数と黒潮の変動

北部太平洋のオットセイの数は、人間による捕獲量に左右されるものと考えられてきたが、ソ連の生物学者はそれが太平洋の暖流——黒潮の変動によることを確かめた。

オットセイ保護条約がすでに効力を発していた七〇年代の初めに、サハリンのチュレニー島のオットセイの数が急激に減少し始め、米国領プリビロフ諸島でも同様の状況が見られた。そこでオットセイの越冬状況をトレースしたところ、チュレニー島のオットセイ群は寒い季節には黒潮と親潮のぶつかる水域に生息していることが判明。黒潮は周期的に岸から遠ざかり、熱条件や栄養条件の急激な変化をもたらすが、これは若い個体群に破滅的影響を及ぼす。米国側に生息する群れの減少は、カリフォルニア暖流の変動によって引き起こされたと、ソ連の学者は見ている。いまでは危機は去り、昨年のチュレニー島のオットセイの数は3年前の2倍に増えている。

65歳のカーマニア、手製の自動車でソ連横断

イーゴリ・アンドレーエフ
カメラ S・ソロビヨフ



モスクワのカリーニン大通りへ姿を現したマルティノフじいさんの手製の自動車。こんな場所でUターンを許可される運転手はこの人ぐらいなもの。

▼前世紀末の〃自動車野郎〃たちも、このように通行人をびっくりさせたにちがいない。



私はその自動車に、すぐには気がつかなかった。信号待ちでとまっている車のかげになっていたからだ。横断歩道を渡っている歩行者たちが、いつになくにぎやかで、なぜか笑いながらこっちを振り向くので、私はようやく、私たちの列に変わった自動車がいるのだな、と気がついた。次の瞬間、車の群れは走り去り、一台だけが取り残されて、のんびり交差点を走っていた。

私は〃自動車〃と言ったが、それはちょっと言いすぎだった。というのは、その交通手段は、技師やデザイナーの作ったものとは似ても似つかなかったからだ。前後のタイヤの寸法がちがって、後輪は電動運搬車の車輪だが、それより径の大きい前輪は、何の車輪か分からない。いわば、後部をシートで覆った木製の箱が動いているのだ。がたがた揺れる平らなボンネットの下では、昔の航空機用の星形エンジンを真っ二つに割ったような、奇妙なエンジンが唸(うな)っている。ボンネットには小さな字で、シートには大きな字で〃49年間無事故。見ならいたまえ!〃と書かれている。乗り物の真ん中には、ほぼ半世紀無事故のキャリアを持つ運転手の、大きな白髪頭がつき出ている。

すでに四〇〇〇km

数分後には、私は〃見ならいたまえ!〃と呼びかけている人物の名前を聞き出していた。グレープ・マルティノフ。65歳。彼はヒゲの中で笑いながら言う。

「交通当局との平和共存のための書類は、いっさい持っておらん。交通監視員には、厳しく取り締まって下され、応援しますぞ、と言ってやる」

「で、その効果は?」

「スローガンはともかく、カザフ共和国の首都アルマアタ市から四〇〇〇kmほど、実際に無事やって来た。ボンネットを見なされ、全部書いてある」

ボンネットには次のように書いてあった。

「単独行。行程、アルマアタ——モスクワ——ムルマンスク——アルマアタ。目的、ソ連全土を走破することによって、構造全体およびエンジン、足まわり、ステアリング等、各部をテストする。安易に陥ることのないよう、書類とガソリンは携行しない」

その後の説明で分かったことだが、希望者には自動車を見せて、その代わりにガソリンを分けてもらうのだということだった。

見かけは珍妙だが

私は何度も手製自動車のコンクールへ出かけて、手製のリムジンや水陸両用車やジープのぴかぴかの車体を見た。このアルマアタの老人の自動車はきわめて珍妙だが、同時によく出来ていた。私はこれほど作った人に似た自動車を見たことがない。

彼は語る。

「いろんな材料を使って、半年がかりで作りましたよ。このあらゆる機械の寄せ集めは、わしにとっては何物にも代えがたい。エンジンには苦労したよ。こいつは空冷式で、ラジエータがいらない。故障したら取り替えるさ。やはり手製のやつを二つ、予備に持っている」

私は老人の話をききながら、自動車を一周して、すみずみまで見ようとした。しかし、通行人が取り巻いているので、自動車を道路脇に寄せることもできない。みんな笑って、この自動車の挑むような姿に驚きながら、一徹そうな、何物にも動じない老人を見ている。だが、馬鹿にする者はだれもいない。

老人は誇らし気に言う。

「こうやって、みんな眺めて、助けてくれる。ムルマンスクまで行ったら、もどって来る。一カ月後には、わしらのアルマアタではリンゴが実る。じゃあ、さようなら。わしは急いでいるもんだから……」

スターターが鳴り、エンジンが身ぶるいして、排気管から赤い炎の舌をのぞかせた。自動車はきしり音を立て、がたことと走り出し、やがて車の流れに乗ると、姿を消した。

＊トピックス

曲技飛行用の軽飛行機YaK 50

アレクセイ・ヤコブレフ航空機設計局は、軽飛行機製作を開始して以来すでに50年、スポーツ機製作の伝統も長い。1965年にセルゲイ・ヤコブレフ副所長が若手の製作班を組織し、YaK 50をつくった。以来同機は再三にわたり、曲技飛行世界選手権大会の優勝に貢献。

YaK 50は全金属製低翼単葉機。着陸装置は引込式、尾輪式。エンジンは空冷式9気筒 360馬力。離陸総重量900kg、全長7.8m、全幅9.5 m、翼面積15平方m。地表での上昇速度16m／秒。1977年にこのクラスの航空機では世界最高のスピード319.5km／時を出した。

YaK50の製作者たちは、機体を最大限に軽くしようと努力し、その結果、馬力荷重2.5 kgと近代的な航空機としては記録的な動力装備軽量化に成功した。おかげで、あらゆる曲技飛行が可能になった。

またYaK50の製作とならんで同機をベースにした2人乗り練習機YaK52も開発された。これは設計、動力装置、飛行特性などほとんどYaK 50と同じで、飛行士が練習から実際の飛行に移りやすいようになっている。YaK 52の馬力荷重は3.3kgで1人乗りスポーツ機なみ。

社会主義と環境保全

経済学博士　ボリス・ラキツキー

生態系破壊の不安

こんにち、生態系の問題が討議されるさい、人類の運命にたいする不安の声がますます大きく響きわたっている。自然にたいする人間のたえず続く働きかけは、どういう影響を自然に与えるだろうか？　そもそも、人類が生存し、存続する唯一の環境を破壊する過程を、逆行させることはできないものだろうか？　人間がこれまで環境に与えた損害を償うには、どうしたらよいだろうか？　これらはみな重大な問題だ。

ソ連は「人間―自然」系における相互関係の規制を重視しており、ソ連経済制度の基礎にそれを含めている。ソ連憲法第一八条には「ソ連においては、現在および未来の世代のために、土地と地下資源、水資源、動物界と植物界の保護と科学的裏づけをもつ合理的な利用のため、大気と水の汚染防止、天然資源の再生産の保障、人間をとりまく環境の改善のため必要な措置がとられる」と明記されている。

いま強力な工業国家では、自然がどんどん開発されており、毎年数十億tの鉱物が採掘され、数億tの燃料が燃やされ、流水量のかなりの部分が調節され、木材が伐採され、広大な土地が耕されている。電力産業、化学工業、自動車運輸などはすべて、人間と自然との調和を徐々にとはいえ、必然的にぶちこわす恐れがある。だが私が生態系の将来を楽観する根拠となったいくつかのエピソードをここで紹介して、ソ連の環境保全対策の実際を見てもらうことにしよう。

環境保全のエピソード

リトワ共和国のある化学工場の構内で、私はミツバチ飼育場を見た。15箱のミツバチの巣箱が工場のへいのすぐそばにあって、そのミツバチが工場の汚染度を知る一つの方法になっていた。当然ミツバチが生きている以上、有害物質は出ていないわけで、化学工業も結構汚染物質を出さないきれいな産業になりうるのである。3年ほど前ある日本人記者が、「幾晩もモスクワ川の河岸通りで太公望を見たが、人口八〇〇万のモスクワ市を貫流するモスクワ川に魚がいるのはまったく奇跡だ」と語るのを聞いたことがある。モスクワ川もそれほどきれいなのだ。

だがもちろん、水質、大気、土壌が許容限度以上に汚染されている例が少なくない……それは批判されているし、刑罰をうけている。それに汚染の許容基準はめっぽうきびしい。

ソ連では天然資源は全国民の財産である。さらにソ連経済は計画経済で、中央が管理していることも指摘しておきたい。そのおかげで自然を総合的に、科学的に利用できる。ソ連には人間、生産と生活環境との関係を規制し、監督している組織がたくさんある。全体の指導に当たっているのは最高国家権力機関であり、ソ連最高会議には自然保護委員会が、またソ連の国家計画委員会や他の省庁には専門の部や課、企業には実験所が設置されている。国家機関の自然利用改善の活動は、世論から積極的に支持されており、自然保護のボランティア団体の会員は三五〇〇万人にのぼっている。

自然保護措置

水、地下資源、土地、森林、その他の天然資源利用の規則を定めたソ連基本法が作成、採択された。各連邦構成共和国もその領土内の自然利用の具体的な基準、規則を定めている。ソ連の最高諸機関は生態系の問題をたえず監督している。たとえばソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議は、「自然保護の強化と天然資源利用の改善について」の決定（一九七二年）、「黒海とアゾフ海の水域汚染防止措置について」（一九七六年）、「バルト海水域の汚染防止の強化措置について」の決定（一九七六年）を採択した。

このような法律や党・政府の決定は、具体的な措置とその実施期日を定めている。またこれらの法律や決定は、特別な目的の計画を策定する基礎になっ

ている。こんな短い記事では、自然利用の実際の規制の具体的な形態、方法などをもうらすることはできないので、ここでは四つだけ例を挙げておこう。

対策の実際例

第1の例――ソ連閣僚会議林業委員会が承認した基準によると、人口一万人以下の都市の周辺には、住民一〇〇〇人当たり少なくとも55ha以上の森林緑地帯を設置しなければならない。人口二五万一〇〇〇人―五〇万人の工業都市の場合は住民一〇〇〇人当たり少なくとも一二〇ha以上となっている。市内の緑地帯の最小設置基準も定められている。

第2の例――年ごとに各種の植物や樹木の植え付け規模が増大しており、なかには絶滅にひんしている種類の樹木も植え付けられて息を吹き返している。たとえば2年前にモルダビア共和国のメレシェンスク山林区に植えられたベレカ（ナナカマドの1種）は、木質の美しさや有用性でたぐいまれなバラ科の木であるが、前世紀にほぼ完全に伐り尽くされてしまった。生き残った標本からいまベレカ林が復活しようとしている。

第3の例――全ソ国家規格（GOST）の制定にあたっては、クリーンで廃棄物を出さない製造・加工技術が重視されている。環境保全は、水中、大気中の有害物質の最大許容濃度基準（世界一きびしい）、騒音許容基準などでも規制されている。これらの基準を作成するのはソ連保健省で、基準はいずれも法的効力をもっており、その順守はきびしく監視されている。

第4の例――毎年自然保護区や伐採禁止区が新設されている。将来、あらゆる主な植物・地理地帯を包括する自然保護区網がつくられよう。

環境の保護、改善には、もちろん少なからぬ経費がかかる。これらの経費の財源を列挙するのはむずかしい。たとえば企業は技術改善に、地方のソビエトは住民地の整備に、保健省は公害監視に、それぞれ資金を出している。全国家計画や予算は、とくに重要な、規模の大きな措置に資金を出している。たとえば、一九七六年に水資源の保護と合理的利用に一四億三〇〇〇万ルーブル、大気汚染防止に一億八三〇〇万ルーブルが支出された（1ルーブルは約二八〇円）。

一九七六年の自然保護と天然資源の合理的利用関係の支出総額は一九億ルーブルに達し、第10次5ヵ年計画（一九七六―一九八〇年）のそれは一一〇億ルーブルにのぼる。

ソ連最高会議は毎年ソ連の経済的、社会的発展の年次計画を承認するさい、最も重要な公害防止措置をも同時に承認している。たとえば一九七八年には1昼夜当たり合計六四〇万立方mの汚水を処理する浄水場、1昼夜に約二三〇〇万立方mを処理するクローズド・システムの処理場が操業を始めた。その結果、この1年間に汚水排出量は10%減り、その分だけ生産に使われるきれいな水の消費量は減った。

合理的な自然利用計画が実施されており、それは年を追ってますます大がかりなものになっている。

＊トピックス

ビーバーの風土順化事業

ヨーロッパ・ロシア北部のカレリア地峡で捕獲された若いビーバー60匹が、1万1000kmも離れたカムチャツカに空輸され、ソ連最東端のビーバーのコロニーをつくることとなった。毛皮獣として珍重されるビーバーがレニングラード州内の保護区に移殖されたのは比較的新しく、約25年前にカナダから数つがいを輸入したのが始まりだが、その後行き届いた保護のもとに急速に増殖し、いまではさまざまな気候帯の国内各地への移殖のための恒常的な基地となっている。特に重点が置かれているのは、シベリアと極東の森林に移して風土に順化させる仕事である。

ビーバーのポピュレーションを回復するために行われた仕事はソ連で計画的に進められている自然保護事業の典型的な一例だ。

ロシア連邦共和国だけでも2000万ha以上の自然保護区があり、これらの地域では自然が野生の鳥獣とともに、人間の手による介入を一切受けずに保存されている。

生活サービス費をのぞく

——マロースおじいさんの派遣料は1000円

ウラジーミル・ミーチン



私がサービス業をねたに物を書くようになってから、かれこれ20年になる。私のペン仲間のうちで私ほど理髪店や浴場、ドライクリーニング店、テレビ修理所の仕事の欠点をあばいた毒舌や皮肉まじりの記事とか、風刺文を書いて、がっぽり原稿料をかせいだ者はほかにあるまい。あげくの果てにこうしてサービス関係の多くの店で顔を知られるようになってしまい、うす暗い横町でばったりサービス業の従業員に出くわすのがこわくさえなった。だから日常のくらしの諸事にてんでだめな私は、自分のことや日常の身のまわりのことなどは一切女房におまかせした。

「もう結構よ！」——ある日女房がのたもうた。「あんたから離れてカフカズで休んでくるわ。電球をはめこんだり、自分でワイシャツを洗ったりもできない人のそばで、いつまで我慢できると思うの？」

女房が家を出てゆくと、とたんにヒューズがとんだ。私は動かない電気カミソリを手にして、途方にくれながらいじりまわして見たもののだめ。こうなっては理髪店に出かけて行くしかなかった。

「あらっ！」——と私を見て女性の理容師が思わず悲鳴に近い声をあげた。「どうしてここへいらっしゃったんですか？　お宅で奥様にやってもらいになればおよろしいのに……」

私がどんな気持ちでイスに座ったかお察しがつこう。理容師たちは一瞬私に目を投げると、私に前掛けをつけ、私の哀れな頭におそいかかった。刈られ、そられ、洗われ、パーマがかけられ、オーデコロンさえふりかけられた。

およそ精神的な拷問ほどつらいものはない。これじゃ、だいぶふんだくられるぞ。私の頭の中のコンピュータは次々に計算していった。……パーマ、ドライヤ、オーデコロン……最新モードに髪を縮らせた私の頭の中を電光のように「これじゃ破産だ！」という思いが流れた。

さて仕上げのハサミが入れられて、最後の毛が床に散り、前掛けがはずされる。立ち上がって、次の稿料が入るまでの日数を指折り数えながら、会計のほうへ行く。

だが料金はたったの3ルーブル（一ルーブルは一〇〇コペイカで、約二八〇円）だった。自分の目を疑いながら、価格表に目をこらした。カットが50コペイカ、顔そりが13コペイカ、洗髪が15コペイカ。ドライヤが5コペイカで、〝特別のブラシによるヒゲの手入れ〞がたったの10コペイカだ。

「じゃ、30分だけ女になったとして、一体どれだけかかるんだろう？……」私はすっかり気持ちが大きくなって、考えた。一番高いパーマで5ルーブル以内だし、〝夜会や結婚式用などの結髪〞だと、64コペイカないし80コペイカだ……私は価格表のペディキュアのところに目をとめ、これじゃご婦人方は結構ずくめだと身勝手に決め込んだ。

「ペディキュアをやってもらえますか？」とたずねる。

「会計へ1ルーブル支払って下さい」という返事だ。

私は外見にとことんみがきをかけるため、整形美容院へ出かけていった。もちろん、まず初めにおずおずと料金をきいて見たが、十分手持ちのオカネで間に合うとわかってほっとした。〝鼻の修正〞でさえたったの20ルーブルだという。最も高い「アゴの変形、異常の場合の骨プラスチック手術」でも90ルーブルですむということだった。

私はソバカスをとってもらって（80コペイカ）、同じく80コペイカで顔のマッサージをしてもらったが、鏡を見てから両ほおのしわもとってもらうことにした（22ルーブル50コペイカ）。





美容コンサルタントが「体の余計な脂肪もとりましょうか」ときくので、これもやってもらう（70ルーブル）。

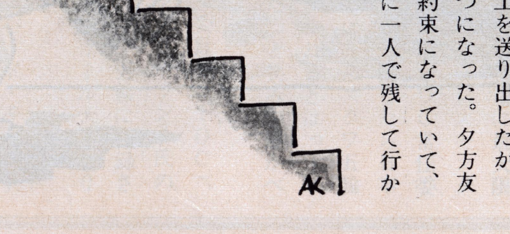
「やあ、ありがとう。これからはせいぜいまちを歩いて、脂肪をとることにしよう」と私は言う。

さて私のサービス業とのおつきあいはさらに深まるわけだが、それについてはくどくど書く必要もあるまい。オーバーのクリーニング代は2ルーブル45コペイカだったし、真っ白なワイシャツ（1着19コペイカ）をクリーニング店から受け取ったときも、ふところに別に響かなかった。一八〇ルーブルのテレビの受像管がだめになって修理屋を呼んだときは、女房が予約サービス（月に1ルーブル30コペイカ払えば、毎日でも無料で修理してくれる）に加入していたので、支払う必要はなかった。





私はすっかり上機げんでテレビ修理工を送り出したが、すぐ憂うつになった。夕方友人と会う約束になっていて、息子を家に一人で残して行か



ねばならないのだ。一人でおいておくのは、まったく地震みたいに不安だ。そこで早速電話のダイヤルをまわした。

「もしもし〝ザリャー〟フィルマですか？　息子についていてくれるよい付添婦さんをきょうよこして下さいませんか」

「長時間ですか」

「3時間ぐらいです」

「では1ルーブル80コペイカいただきます。それから新年にほんとうのマロースおじいさんをお宅に派遣できますが。おじいさんだけなら3ルーブル70コペイカですが、雪姫（スネグーロチカ）と組みなら、5ルーブルです」

＊　＊　＊

私は休息にいってきた女房といっしょに新年を迎えた。夜半前に〝ザリャー〟フィルマから派遣されたマロースおじいさんと雪姫が息子に新年のあいさつを言いに来た。私は二人にシャンペンをごちそうし、風刺記事の稿料から5ルーブルをぽんと払った。



OLYMPICS-80

80年オリンピックの成功は間違いなし

——モスクワ五輪を語る外国スポーツマン

モスクワ五輪の組織委員会には毎日のように外国のお客が訪れている。お客は著名なスポーツ家、各国の国内オリンピック委員会の指導者、国際スポーツ団体の幹部や代表などさまざまだが、どの客もオリンピック各競技の施設などをくわしく視察し、それぞれ意見を述べている。

米国オリンピック委員会のロバート・ケイン会長は記者会見で「オリンピックに参加する米国チームに、体操、水泳または陸上の選手が何人入るかは、まだわからないが、ただ一つ五〇〇—六〇〇人が参加することだけは確かだ。だから米国がオリンピックに参加して以来最大のチームになる。オリンピック施設はまったくすばらしい。もうオリンピックは成功間違いなしだ」と語った。

オリンピック大会をボイコットしようとする米国の一部議員の企てについてどう思うかとの質問にたいして、米国オリンピック委員会のドナルド・ミラー事務局長は、ボイコットをしようとしている者に世論はついて行くまいと答え、「組織委員会との取り決めにより、米国から二万人の観光客がモスクワを訪れよう。これまでのオリンピックの経験から見て、まず大体これくらいだろう。米国からの観光客が受け取る入場券は二〇万枚の予定だ。もちろんわれわれが一番関心をもっているのは、陸上、水泳、バスケットボールだ」と語った。

イタリア・オリンピック委員会のマリオ・ペスカンテ事務局長——「これまでメキシコ、ミュンヘン、モントリオールと三つのオリンピック大会に参加したが、モスクワ大会ほど、選手にすばらしい条件を約束しているところはなかった」

モスクワ五輪の準備状況を視察したイタリア代表団員たちは、モスクワ大会は成功する、とタイコ判をおした。イタリア・オリンピック委員会のフランコ・カラロ会長は「イタリア国民はモスクワ五輪に大きな関心を寄せており、選手たちはモスクワ行きの準備を進めている」と記者団に語った。

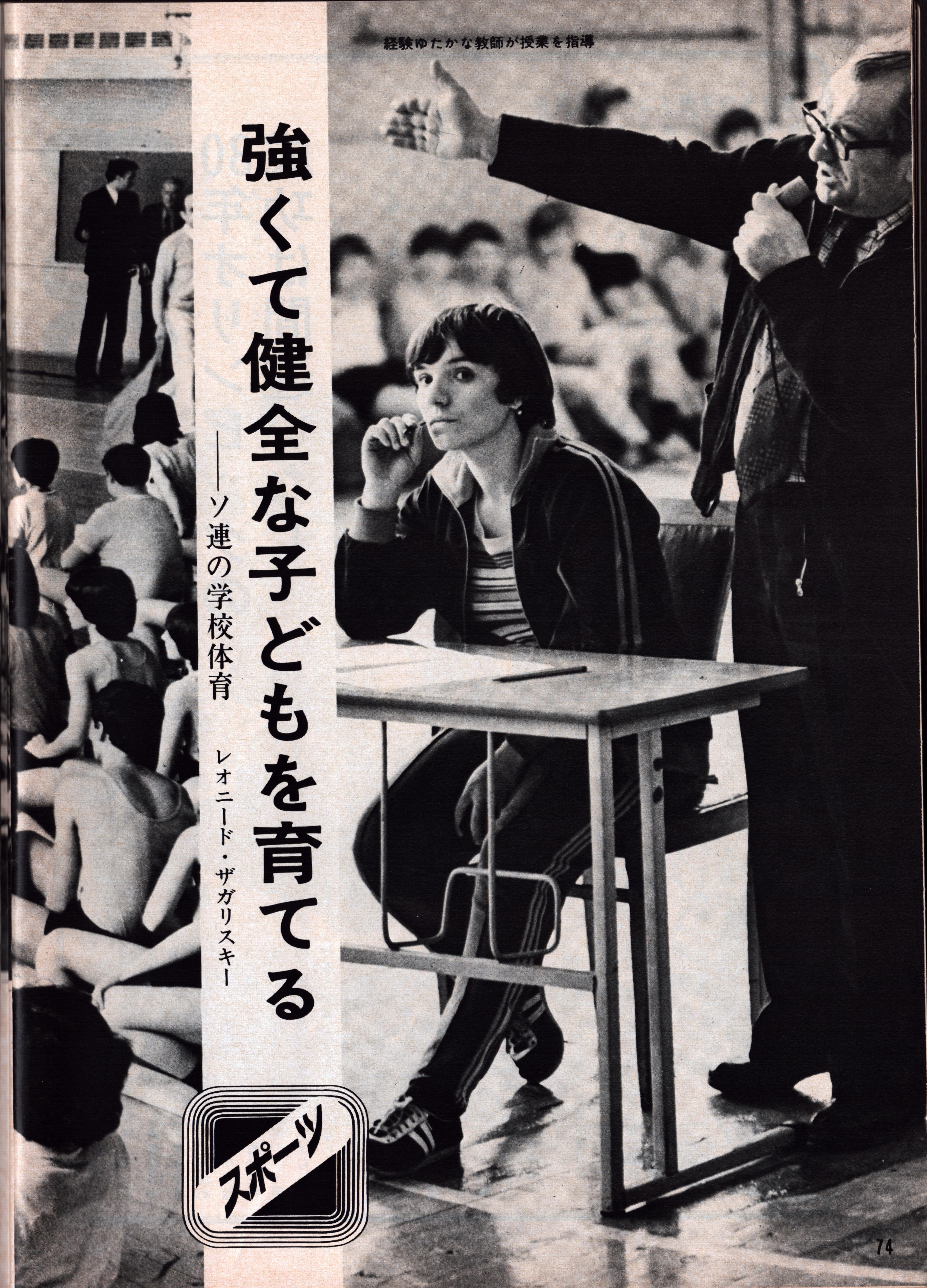
モスクワ五輪のカナダ選手団の団長となるカナダ・オリンピック委員会のイムレ・サボ副会長は「$\frac{1}{3}$が出来上がっているオリンピック村は、オリンピック史上最高のものになろう」と強調。カナダの代表たちは、カナダは大型チームだけでなく、約八〇〇〇名の観光客をモスクワに乗り込ませると、鼻息の荒さを見せた。

アルジェリア民主人民共和国のジャマール・フフ青年・スポーツ相は、「さきのアフリカ最高スポーツ評議会の会議で、われわれはアフリカの選手のモスクワ五輪出場を確保することを決めた。それを実現するためモスクワ五輪の準備に全力をつくしたいと思っている。80年オリンピックがスポーツ、平和、民主主義の一致を示すすばらしい行事となることを信じている」と語った。

モスクワ五輪では新聞報道に最大限の便宜がはかられよう。プレスセンターを訪ねたあと、宮川毅ＪＯＣ常任委員はその点を指摘し、「帰国したら日本のスポーツ記者たちに、モスクワ五輪では支障なく仕事がやれるとはっきり言ってやるつもりだ」と笑みを浮かべた。

国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）、プレス担当、ファン・サマランチ氏の意見によると、モスクワ五輪に登録される記者数はモントリオール大会より多くなろう。

ＩＯＣ委員のアルパード・チャナディ氏（ハンガリー）は「モスクワ五輪組織委員会とＩＯＣとの接触は良好というよりも、模範的といえよう」と強調した。



経験ゆたかな教師が授業を指導

強くて健全な子どもを育てる

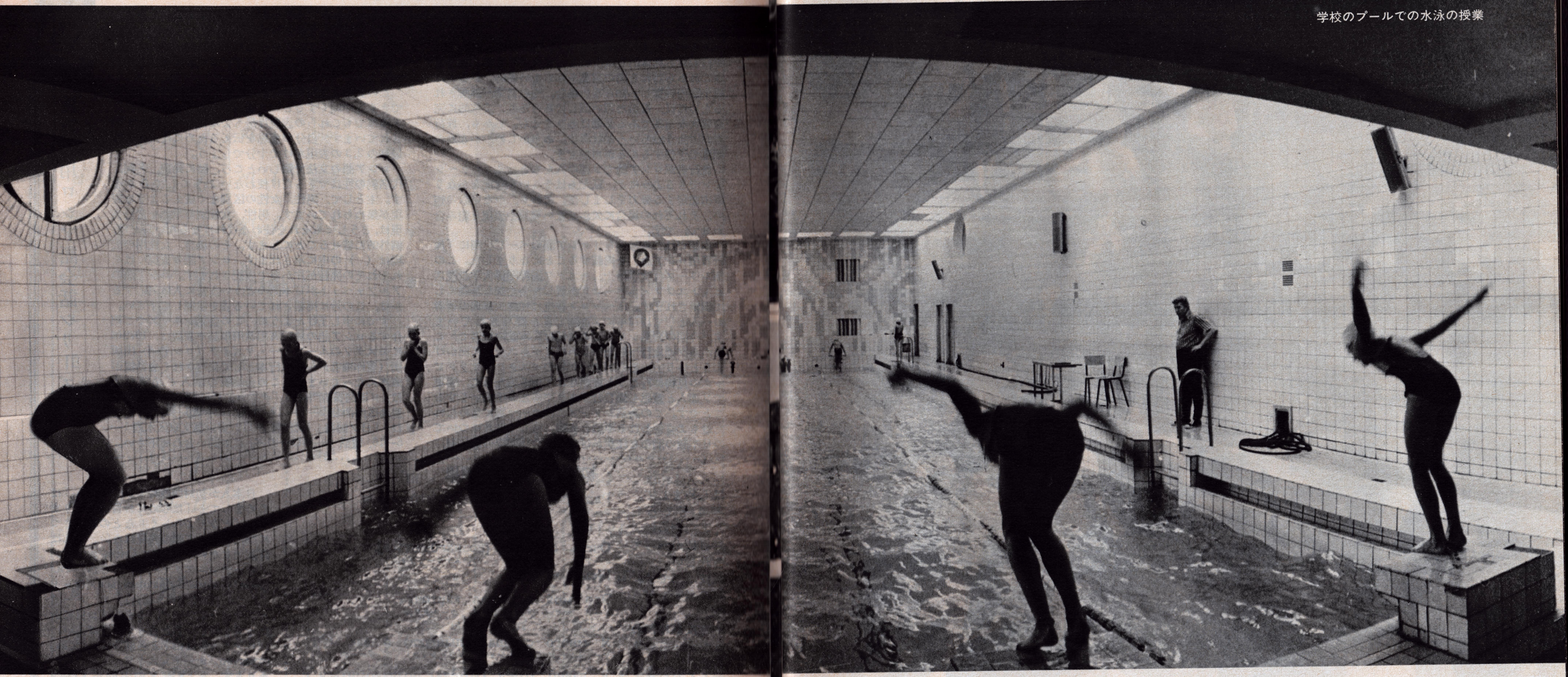
——ソ連の学校体育

レオニード・ザガリスキー

スポーツ



学校の体育の時間は、時々全生徒が参加するたのしい競技の時間になる。



学校のプールでの水泳の授業

ソ連のスポーツ人口は五二〇〇万人で、その大半が子ども。

組織だった体育のレッスンが始まるのは3歳児からで、幼稚園では普通の遊戯とスポーツの課業とは区別されない。きちんとしたスポーツの課業は7歳から学校の週2回の体育の時間で始まる。週2回は季節にかかわりない。

モスクワの第一一二学校のニーナ・クレメンチエワ校長は「うちの学校は市の中央部にあり、まわりは19世紀末に建てられた住宅や官庁の建物ばかりです。いたるところレンガの厚いへいが張りめぐらされているので、へいの外で子どもが遊ぶ余地はほとんどなく、ボール遊びも自転車乗りもできません。

いまモスクワの新地区に建てられている学校は、いずれも広い体育館のほかに十分な空き地もあり、なかにはサッカーやアイスホッケーの競技場付きの本格的なスタジアムを備えているところもあります。うちの校舎はそれよりも前に建てられたもので、当初の体育室ではもう手狭で困っていました」と語る。

校長の要請で区の国民教育部は2階建てのプール付き体育館の工費として五〇万ルーブルを計上し、手狭な土地にりっぱな体育館を建ててのけた。

体育担当のセミョン・サリマン先生は「もう子どもたちは体育の時間をたのしく過ごせるだけでなく、放課後もさまざまなサークルや部の活動をやることができます」と顔をほころばせる。

きょうは5年生の体操の時間で、平行棒やつり輪、鉄棒の練習。同じ時間6年生はプールで水泳。

放課後も学校のスポーツ活動は続く。部やサークルでレスリングやフェンシング、バレーボールやバスケットの練習が始まる。

もちろん、第一一二学校の生徒は地区競技会に出場している。しょせんスポーツはスポーツであり、競技のないスポーツは考えられない。だが競技が肝心かなめではなく、子どもが一人残らず強く、健全に成長することが何よりも大事なのだ。



水泳をやる前に検査。
心臓は大丈夫かな……

А Б В

旅行者用ロシア語会話シリーズ(1)

編集部から

現在の言語学で広く認められているように，人間の言葉，その個々の発言はまず第1に，その言葉が向けられる相手によって決まります。第2には，その会話が行われる具体的な状況によって決まります。旅行者がこれから訪れる国の言葉を知らない場合，あるいは最小限の言葉しか知らない場合，その言葉が理解されるためには，複雑な言い回しであったり，文法的に完全無欠な言葉である必要はありません。しかも，旅行者が出会ういろいろな状況は，あらかじめ，かなりの確度で予想することが可能です。

旅行者がロシア語でソ連の人たちとコミュニケーションできるようにと，私たちはそういう状況をかなり沢山想定する努力をしました。それも，少ない数の短い，それぞれの場合に欠かせない発言や表現と組み合わせて，です。

本誌ではこの号から「ロシア語のページ」欄に「旅行者用ロシア語」を掲載することになりました。この新シリーズは文学博士，モスクワ国際関係大学教授スビャトスラフ・ネベーロフが著した会話帳を基礎にして編集されます。ネベーロフ教授は和露大辞典の著者の一人として1972年にソ連国家賞を授与されています。今回の会話シリーズの目標は，本誌の読者で，これからソ連旅行（観光あるいはビジネスで）に出かけようという方，あるいは1980年のモスクワ・オリンピックの見物に行こうと計画されている方たちに，言葉でソ連人と意思を通じ合うささやかなお手伝いをすることです。この会話シリーズにはテーマ別に集められた最もよく使われる単語と表現，そしてこれについての日本語の簡単な注釈が付きます。1980年の前半期，つまりモスクワ・オリンピックの開催を直前に控えた時期には主としてスポーツをテーマにした会話を掲載する予定です。このテーマではモスクワ・オリンピックのプログラムに入っているすべての競技種目をカバーします。

この会話シリーズに収められている表現はすべて，できるだけ短くするという観点から選ばれています。どの章でもこれらの表現は最もよく使われる順に配列されています。自分の意思を伝えるためには，各章の最初の2,3の表現だけで十分でしょう。

ロシア語の文法で難しいところ，特に動詞，名詞，代名詞の性はできるだけ使わないようにしてあります。主として，男性，女性の区別なく使えるような表現が集められています。男性，女性別の単語を含む表現は，どうしてもそれを使わなければならない時だけ，例外的に載せることにします。その場合，女性用の表現は（　）の中に示されます。ロシア語の表現にはそれぞれその発音が片かなで表記されます。ロシア語のアルファベットが日本語のどういう音に大体対応するかは，この号に掲載されている表を参照して下さい。

すでに申し上げたように，この会話シリーズでご紹介するロシア語の旅行者用常用単語や表現は，1979年にモスクワのルースキー・ヤズイク（ロシア語）出版所（著作権者）から単行本として発行される会話帳が底本になっています。この会話帳の購入ご希望の方は，ソ連図書専門店の「ナウカ」（郵便番号171 東京都豊島区南池袋 2—30—19，電話 03—981—5261）または，「日ソ図書」（郵便番号 112 東京都文京区水道 1—5—16，電話 03—811—9190）にお問い合わせ下さい。

初対面の時に使う表現

はじめまして，どうぞよろしく。	Рад (ра́да) с ва́ми познако́миться. ラッド（ラーダ）ス ヴァーミ パズナコーミツア
お目にかかってうれしい。	О́чень прия́тно [познако́миться]. オーチェニ プリヤートナ [パズナコーミツァ]
私は……です。	Меня́ зову́т . . . メニャー ザヴート...
私の名刺をどうぞ。	Это моя́ визи́тная ка́рточка. エータ マヤー ヴィジートナヤ カールタチカ
お噂はかねがねうかがっていました。	Я мно́го слы́шал (слы́шала) о вас. ヤー ムノーガ スリーシャル（スリーシャラ） ア ヴァース
前からお目にかかりたいと思っていました。	Я давно́ хоте́л (хоте́ла) познако́миться с ва́ми. ヤー ダヴノー ハチェール（ハチェーラ） パズナコーミツァ ス ヴァーミ
あなたのお名前とご父称をおきかせ下さい。	Скажи́те, пожа́луйста, как ва́ше и́мя и о́тчество? スカジーチェ パジャールスタ カック ヴァーシャ イーミャ イ オーチェストワ
どうぞあなたの苗字を書いて下さい。	Напиши́те, пожа́луйста, ва́шу фами́лию. ナピシーチェ パジャールスタ ヴァーシュ ファミーリユ
私の…をご紹介します	Разреши́те познако́мить вас с . . . ラズレシーチェ パズナコーミチ ヴァス ス...
友人	мои́м дру́гом マイーム ドルーガム
夫	мои́м му́жем マイーム ムージェム
妻	мое́й жено́й マエーイ ジェノーイ

日本人が初対面の時にふつう使う「はじめまして」，「はじめてお目にかかります」，「どうぞよろしく」などのあいさつに当たるロシア語の表現はない。これは直訳できないので，単に **О́чень прия́тно**／オーチェニプリヤートナ／とか，**Рад (ра́да) с ва́ми познако́миться**／ラッド〔ラーダ（女性が言う場合）〕ス　バーミ　パズナコーミツァ／，つまり「お目にかかってうれしい」と言っておけばよい。

ロシア人には苗字と名前の他に「父称」**о́тчество**／オーチェストワ／というのがあります。たとえば父の名前が **Семён**／セミョーン／であれば，その息子の父称は **Семёнович**／セミョーナヴィチ／，その娘の父称は **Семёновна**／セミョーナヴナ／となります。直訳すれば，セミョーンさんの息子さん（娘さん）ということになるでしょう。名前＋父称（たとえば **Ива́н Семёнович**／イワン　セミョーナヴィチ／〔男〕，**А́нна Петро́вна**／アンナ　ペトローブナ／〔女〕など）は親密感の他に尊敬の念もふくまれているので，年上の人，先輩，上司に向かって呼びかける場合や，知り合い同士でなど，ソ連人のあいだで広く使われています。

ロシア語のアルファベット

活字体 大文字	活字体 小文字	筆記体 大文字	筆記体 小文字	文字の名称と発音	
А	а	*А*	*а*	ア	ɑ
Б	б	*Б*	*б*	ブ[ェ]	b[e]
В	в	*В*	*в*	ヴ[ェ]	v[e]
Г	г	*Г*	*г*	グ[ェ]	g[e]
Д	д	*Д*	*д*	ド (名称は)デ	d[e]
Е	е	*Е*	*е*	イェ	ye
Ё	ё	*Ё*	*ё*	イョ	yo
Ж	ж	*Ж*	*ж*	ジ[ェ]	zh[e]
З	з	*З*	*з*	ズ[ェ]	z[e]
И	и	*И*	*и*	イ	i
Й	й	*Й*	*й*	イィ [クラートコエ]	
К	к	*К*	*к*	ク[ァ]	k[a]
Л	л	*Л*	*л*	[エ]リ	[e]l
М	м	*М*	*м*	[エ]ム	[e]m
Н	н	*Н*	*н*	[エ]ヌ	e[n]
О	о	*О*	*о*	オ	o
П	п	*П*	*п*	プ[ェ]	p[e]

活字体 大文字	活字体 小文字	筆記体 大文字	筆記体 小文字	文字の名称と発音	
Р	р	*Р*	*р*	[エ]ル	e[r]
С	с	*С*	*с*	[エ]ス	e[s]
Т	т	*Т*	*т*	テ	t[e]
У	у	*У*	*у*	ウ	u
Ф	ф	*Ф*	*ф*	[エ]フ	e[f]
Х	х	*Х*	*х*	フ (名称は)ハ	h[a]
Ц	ц	*Ц*	*ц*	ツ[ェ]	ts[e]
Ч	ч	*Ч*	*ч*	チ[ェ]	ch’[e]
Ш	ш	*Ш*	*ш*	シ[ャ]	sh[a]
Щ	щ	*Щ*	*щ*	シチ[ャ]	sh’[a]
	ъ		*ъ*	-	硬音符号
	ы		*ы*	ウィ	+
	ь		*ь*		軟音符号
Э	э	*Э*	*э*	エ	e
Ю	ю	*Ю*	*ю*	ユ	yu
Я	я	*Я*	*я*	ヤ	ya

1) [　] 内にあらわされた音は，文字を単独で読む時には発音するが，単語の中で走り読みする時には発音しない。

シロクマの親友として

ウラジーミル・フィリモノフ

シベリアの東北端、チュコト海に面するムイス・シュミットの海獣猟アルテリ（協同組合）で働いているニコライ・マチュリャクさんは、一頭の雌のシロクマ（ホッキョクグマ）と大の仲良し。このシロクマのところへ遊びに行ったり、ミルクをごちそうしたり、子グマたちとたわむれたりしている…

ニコライは海辺の小さな家に妻と年輩の父親と3人で住んでいる。記者の矢継ぎ早の質問に答えるかわりに、ノートを差し出した。

「分からないことがあったらこれを見て下さい」

最初の記録。

〈一九七四年12月、チュクチ人の猟師が家を荒らした雌のシロクマを撃ち殺した。シロクマは幼い雌の子どもを連れていた。自分でエサを取ることをまだ知らなかったので、私が5ヵ月間面倒を見た。マーシャと名付けた。しかし約一年後、私は彼女に再会した……〉

〈ある日、氷原で突然、一頭のシロクマが私をめがけて突進してきた。動物の意図を見抜くことなど滅多にできないものだが、この場合私は攻撃ではないと直感した。そしてはっと、これはマーシャだと悟った。私は彼女を杖（つえ）の動きで制した。いつもそういう杖を持ち歩くことにしているのだ。軽い、長さ60cm位の杖だ。

マーシャは明らかに私だと知っていた。それでも私は恐ろしかった。別れてから11ヵ月もたっているのだ。私は肉を持ってきた。彼女は喜んで食べた〉

「シロクマには何回も出会ったことがありますか？」

「いろいろな時期に7回出くわしたことがある。しかし、その時はシロクマ自身が〝設定〟する安全ラインを侵すようなことはしなかった。何しろシロクマたちこそ氷原の主人公なのだから。そしてシロクマが不快の表情を示すような時はすぐに後退する。しかし、急いではいけない。シロクマの方へ顔を向けていることが絶対に必要だ」

通い合う心

「マーシャに恐れを抱いたのは？」

「獣はやはり獣だ。しかし、私はマーシャと会う前には必ず心の準備をした。私は胸の中でマーシャに、いやマーシャだけではない、すべてのシロクマに語りかけた――ほら、これが私の手だ。武器は持っていない。持っているのはお前の好きなコンデンスミルクのびんだ。私はお前と友だちになりたいんだ。私ほど頼りになる友だちはいないぞ」

「シロクマたちにはそういう態度が分かりますか？」

「ノートの先を読んでみなさい」

〈一九七六年3月14日。巣穴へ肉を持って行く。マーシャのかわりに巣穴から出て来たのは毛並みが悪く黄色っぽくなった、大きなやせた雌のシロクマで、すぐに私に飛びかかってきた。ようやくのことで杖で追い払ったが、シロクマは肉を取って、食べた。しかし、全身をブルブル震わせている〉

「どうしたんですか？」

「これは多分、マリヤ・ミハイロブナ（私がそのシロクマに付けた名前）が巣穴からマーシャを追い出したんだろう。彼女の方が年上で、力が強いから。しかも、子連れらしいので、このシロクマの方に分があった」

「びっくり仰天したでしょう？」

「ウソだと思うかもしれないが、それほど驚かなかった。むしろ腹が立ったほどだ。私はお前のところに肉を持ってきたのに（元々はマーシャのためだったが）、目を怒らせ、後ろ足で立ち上がり、左の前足で私を打とうとする。シロクマは何しろ左ききだから……それから彼女はあとずさりした。目付きが何だか変だ。食べながら、全身を震わせている」

「ということは、シロクマは敏感にあなたの人間的な態度を感じ取った？」

「そうだと思う」

〈3月18日。肉を持って行く。マリヤ・ミハイロブナは8m以内に近付くことを許さない。

3月19日。セイウチの肉を持って行く。食欲がない。アザラシの肉を持って行くが、食欲がない。

3月26日。きょうは荒れていたが、手から肉を取った。マーシャを探す。

3月28日。明らかに、マリヤ・ミハイロブナは別の新しい雌のシロクマと巣穴の争奪戦を演じたようだ。あたりに毛の塊が落ちている。

4月1日。暖かい。マリヤ・ミハイロブナはもう巣穴のそばで待っていた。すばやく、しかし攻撃的ではない足どりで私から2m位まで近付いた。

4月4日。地質調査隊員8人と雪上車で巣に接近。万一を用心して銃を携行。マリヤ・ミハイロブナは訪問者たちを歓迎せず、出てこなかった。

4月7日、雪上車が来てから3日目、マリヤ・ミハイロブナは古巣を放棄。ここ数日間、私は彼女を見なかった。部落から約1kmの地点で発見。正確には彼女の方が私を発見した。側面からやってきて、いつの間にか後ろにいた〉

「マリヤ・ミハイロブナはどういうシロクマですか？」

「大きく、足跡から判断すると三〇〇kgはある。非常に独立心がおう盛で、強い。今はまるまると肥っている」

子グマと握手

〈4月8日、2頭の子どもを連れたマリヤ・ミハイロブナを発見。接近を許さず。肉は一〇〇m離れた場所に置く。

4月11日。大勢が子グマの見物に押しかける。もっとも、遠くからだが〉

〈4月15日。私のすぐそばまで来た。子グマたちは離れたところにいる。

4月18日。きょう初めてマリヤ・ミハイロブナが一頭の子グマのそばへ近寄るのを認める。子グマと握手。じゃれる。もう一頭の子グマ（恐らく、雌）は母親のそばを離れない。

4月24日。シロクマたちは元の場所へ戻った。巣穴へ入ってみた。中には白い毛が一面に敷いてある。子グマは仰向けになったり、でんぐり返しをしてみたり。マリヤ・ミハイロブナがやきもちをやく。

4月29日。このごろは大勢の人がやってくるので、私はその人たちに同行する。多くの人がマリヤ・ミハイロブナを甘く見ているが、彼女は手乗りのリスとは違う。万一、不意にだれかに襲いかかりでもしたら、撃ち殺されてしまう……〉

帰りの飛行機の中で私は自分の最初のシロクマ狩りの時の恐怖を思い出した。そのシロクマはカムチャツカの村で雌牛を引き裂いたのだった。そしてあのニコライが手にしていた軽い杖が私の目に浮かんだ……



ニコライ・マチュリャクとシロクマの一家

今日のソ連邦
一九七九年1月1日号
編集・発行　ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13）



1980年モスクワ・オリンピック記念コイン・シリーズ

ソ連政府は1980年の第22回オリンピック・モスクワ大会開催を記念して公式白金（プラチナ）貨、金貨、銀貨を発行しています。とくに白金貨は世界で初めての発行であり、コイン史上に残る貴重な記念貨として愛好家の注目を集めています。

記念コインはそれぞれ白金品位999／1000、金品位900／1000、銀品位900／1000と高い品質を持ち、表面にソ連の国章、ソ連邦の略称（ＣＣＣＰ）、額面が刻印されています。裏面のデザインはそれぞれ異なり、写真の150ルーブル白金貨（上）はモスクワ・オリンピックのシンボルマークと月桂冠、100ルーブル金貨（下）はボートの競技場となっています。これらの記念貨は法定公貨として承認されており、日本での売上金の一部は日本オリンピック委員会に寄付されます。なお、モスクワ・オリンピック記念貨は1980年夏までに合計16シリーズ39種類が発行されます（お問い合わせ先等については本文34ページ参照）。

印刷　大日本印刷株式会社